アイ　ラブ　ナチュラリーカーリーヘアー

小丹小菜栖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アイ　ラブ　ナチュラリーカーリーヘアー

【Ｎコード】
Ｎ００８３Ｋ

【作者名】
小丹小菜栖

【あらすじ】
「いよっ、天パー」「天パーじゃねー、天然パーマと言え！」挨拶はいつもこれだった。
クリーニング店次男坊・豊と縫製工場一人娘・比奈子、共に二人は跡取り息子と娘。
若い二人のお茶の間恋物語。

（1）天パーｖｓハチマキ１

「おい、豊、次はどこだ？」
「んーと、二丁目の『小鳩縫製』さん」
「二丁目だな？　この町にも縫製工場なんかあったんだな？　住宅街なのにな」
「うん、俺も知らなかった。
なんか、親子三人とパートの人三人とでやってるらしい。
おやじさんは、競馬、競艇好きであんま働いてないらしけどね？
奥さんが働き者で、娘さんと一緒にやってるらしい」
「どっからそんな個人情報仕入れたんだ？」
「たばこ屋のおばちゃん」

前田クリーニング店経営・前田五郎太と次男の前田豊・２４歳は、ミニバンで隣町までやって来た。
「前田クリーニング店」は、個人経営の普通のクリーニング店だが、駅前近くにチェーン店のクリーニング店がオープンし、このご時世とも重なりお客も減り、顧客確保のため二人で、定休日を利用し、サービス券を配りながら各家を回っていた。
個人客だけではなく、クリーニング以外の「洋服プレス仕上げ」を必要とする縫製関係の工場も回り、大型注文も確保したいところだ。
車のスピードを落とし、目的の縫製工場を探した。
「ここかなぁ」
豊が指をさした一軒屋は、看板など無く、ただ、表札に『小鳩縫製』の横に家族の名前が記されているだけだ。
「なんか、ちっさい工場じゃん？　っていうか、普通の家だよ？」

「家族経営だから、こんなもんじゃないのか？
うちだって小さいクリーニング店だ。人様のところをそんな風に言うんじゃない」
父親らしいお言葉だ。

二人は車を降り、『小鳩縫製』のチャイムを鳴らした。
「は～い、開いてるから勝手にどーぞ！」
女性の声がし、二人は、言われた通り勝手にドアを開け、中に入った。
「なんか、無用心じゃね？」

ドアを開けると、すぐにミシンや裁断台、事務机が置かれてある３０畳もない仕事場があり、少し離れたところに二階へと続く階段がある。
工業用ミシンの音が聞こえている。
小鳩家は、一階が仕事場で二階が住まいになっていて、住宅街の中にある一軒屋だ。

前田親子二人が、中に入ると、中年女性から声を掛けられた。
「ご用件はなんでしょうか？」
五郎太は、ちらしを渡しながら、「プレスの依頼があれば回してほしい」旨を伝えると、中年女性は、一番奥の事務机に座っていた若い女性の所へ行き、伝えた。

若い女性は立ち上がり、五郎太たちのところに来て言った。
「悪いけど、うち、プレス出してるところ決まってるから、ごめ～ん」
タオルのねじりハチマキを頭に巻いて出てきた、言葉使いを知らないこの女、
小鳩比奈子・２２歳、ここの工場の一人娘だ。

服飾の専門学校を出て、母親の手伝いをしている。
大人しく黙っていれば、ちゃんとかわいい女だ。

「仕事は丁寧にさせていただきますし、お値段の方もお勉強させていただきます。
全部をうちにとは言いませんので、お願いできませんか？」
腰を低くして言った五郎太に、比奈子は冷めた声で訊いた。
「いくら？」
「はい？」
「お勉強してくれるんでしょ？　シャツだったら、プレス一枚いくら？」
五郎太は、ポケットから小型の計算機を出し金額を押し、比奈子に見せた。

「はぁ？　これじゃ、今出してるところと変わんないじゃない。
やっぱこれくらいにしてくんないと。どう？　こんくらいならお宅に出すけど」
と、五郎太から計算機を奪い、パパッと数字を押し、見せた金額は、五郎太の示した金額の二分の一だった。
「いやいや、これは、ちょっと…」
「んじゃぁ、帰って！」

な、なんじゃぁ～この女！
こっちが下手に出ていれば！

黙って五郎太と比奈子の会話を見ていた豊だったが、上から目線でもの言う比奈子に苛立ち始めた。

（2）天パーｖｓハチマキ2

「おやじ、もう帰ろうぜ。他あたろう、こんな女相手にしてても時間の無駄だよ」
豊が五郎太を促したが、五郎太は豊を無視した。

このくらいのことで苛立っては、商売人として店など経営していけない。
怒った方が負けである。
当たり前だが、豊より人生経験豊富の五郎太は、落ち着いた声で比奈子に言った。
「この値段だと、うちも困るんですよ。
できれば、先ほどの値段で一度うちの仕上げ状態を見ていただければ…、
腕には自信がありますので！」
五郎太が頭を下げた。
「ふーん、で、前田クリーニング店さんは、何人でプレスしてんの？」
比奈子が、チラシを見ながら訊いた。

「うちは、息子のコイツと私の二人で中の作業をしておりまして、あとは妻とパートが一人、店に出ております」
「ふーん、でもさ、普通のお客さんのクリーニングが主なんでしょ？工場のプレスとか入れても納期とか間に合うの？」
「はい、それは大丈夫です。頑張りますので」
再び五郎太が頭を下げると、比奈子が言った。
「おじさんさぁ、頑張る意気込みだけじゃ仕事はできないよ？」
「「へっ？」」
富士山頂ほどの上から目線の比奈子に、前田親子は、次の言葉が出

てこない。

「あれもやります、これもやります、頑張りま～すって、仕事入れて、

納期に間に合わなかったら意味ないじゃん？

自分たちができる範囲で仕事したほうがいいよ～」

「は、はぁ…」

２０歳くらいの若い女に説教じみたことを言われ、怒りが出てくるというより、なんとなく憎めない比奈子の顔と話し方に、五郎太は苦笑いをし、頭をかいた。

そんな五郎太とは裏腹に、まだ血の気の多い若い豊は、比奈子を睨みつけ言った。

「おまえさぁ、さっきから聞いてれば、偉そうに、なに言ってんの？

俺の親父の仕事馬鹿にしてんの？　っざけんなよな！」

声を張る豊に、怯むことも無く、比奈子はどこまでも目線が高く言った。

「私は、無理しない方がいいって言ってんの。

うちの仕事、全部おたくに出したら、何日も徹夜になっちゃうよ？

納期厳しいんだから！」

「はぁ？　なに言っちゃってんでしょうね～、おまえなぁ、ちっせー縫製工場のくせして、

なにが「うちの仕事したら徹夜になる」だ。

プレスなんて一日も掛かんないで終わるぜ！　はっ！」

豊も負けじと、そう言ったあと、顔を背け、斜め上を見た。

「あはは～、なに粋がっちゃって、天パーのくせにっ！」

比奈子が笑った。

豊は柔らかい髪質の少し茶色の天然パーマ…、性格や体型は男らし

いが、顔はかわいらしい。

「んなっ！　かんけーねーだろが！　俺が天然パーマだろうがなんだろうが！」

「その天パー、お父さんにプレスしてもらって真っ直ぐにしてもらえばぁ？

　直毛も似合うかもよ」

「んが！　天パー天パーっつーんじゃねぇ！　言うならちゃんと『天然パーマ』と言え！」

「ぶっ、ははは～～～～、おもしろーい」

豊は怒鳴ったが、比奈子は、動じず笑い倒し、五郎太も豊の頭を見て少し笑ってしまった。

「おやじも笑ってんじゃねーよ！」

「すまん、すまん」

豊の怒りが収まらず、もう一度比奈子に文句を言おうとしたその時、ちょうど玄関のドアが開いた。

（3）天パーｖｓハチマキ３

「あら、な～に？　外まで聞こえてるわよ？　声が」
比奈子の母親・志乃が外出先から戻って来た。
比奈子が「前田クリーニング店」の話をし、五郎太も加わり、「小鳩縫製」の代表である志乃に説明をした。

「そう。じゃぁ、とりあえず、来週上がってくるものを少しづつお願いするわ」
「ほ、本当ですか！？」
志乃は、やさしい話方だがキビキビテキパキし、押えるところは押さえ、五郎太が示したプレス一枚単価から、２０円引きにさせ、仕事を出す約束をした。
２０円と言えども、結構な値引き額だ。
そして、様子を見ながら、後々「前田クリーニング店」に、どのくらいの量のプレスを任せるか検討していくことになった。
比奈子にはまだ出来ない「商売の差し引き学」。
五郎太は喜んだが、豊の顔は二コリともしない仏頂面のままだ。
豊もまだ、商売の仕方を知らない。
クリーニングという中の仕事だけをしていればいいというものではない。

「天パー、もうちょっとは喜びなさいよね？
　お母さんがあんたのところに仕事出してあげても良いって言ってんだから！」
比奈子は、腰に手を当て偉そうに言った。
「はぁ？　俺は天パーっていう名前じゃねーぞ！」
「おいおい、豊、いいかげんにしろ！」
五郎太が言い、志乃も溜息まじりに比奈子に言った。

「比奈子、あなたも静かにしなさい。いつも言ってるでしょ、言葉使いをどうにかしなさいって。もう少し女らしくできないのかしら…。
ごめんなさいね、前田さん」
志乃は、豊に謝った。

「……」
帰りの車の中、まだ腹の虫が納まっていない豊は、無口だ。
「よかったなぁ、とりあえず、プレスの仕事が入ってな」
五郎太は、嬉しそうに言った。
「ぜっんぜん、良くねーよ。なんなんだよ、あのハチマキ女。人のこと天パーとかバカにしやがって！　俺は天然パーマが好きなんだよ！！
アイ　ラブ　ナチュラリーカーリー　ヘアー！　ライクじゃねーぞ、ラブだぞ、ラブ！」
助手席から見えるサイドミラーに自分をうつし、髪の毛を整えた。

「がっはははは、あのお嬢さん、比奈子さんだっけ？　おもしろい子だったなぁ」
五郎太は、豪快に笑った。
「本当にあれ親子か？　母親は話がわかるみたいなのにさ、あいつはなんなんだ！　偉そうに！」
「親子だろ？　顔似てたじゃないか」
「……顔じゃなくて…」

前田家は、店舗と住まいが隣接している木造二階建ての商店街の端にあるクリーニング店で、五郎太の父親の代から、ここでクリーニ

ング店を経営している。
庭を含めると結構な坪数になるが、家自体は古く、リビングとは到底呼べない茶の間でちゃぶ台をおいて食事をする昭和の香りを残している。
庭、縁側続きのそんな茶の間で、今夜も前田家は、仕事で遅くなる長男・一男を除き、母・恵子、三男・浩司と四人で食卓を囲んでいた。

『小鳩縫製』の話になり、五郎太が、比奈子を話題に出した。
「でな、豊の髪の毛をプレスして直毛にしろって。まったく笑えるだろ？」
家族3人は大笑いだが、豊だけは、ふくれっ面だ。

「あの女の話はすんなよ、飯が不味くなる。あー、胸クソ悪ぃー」
大皿の大根の煮物を握り箸にして差した。
「こらっ、豊、行儀悪いでしょ！　ちゃんと摘みなさい！　…でも天パー？」
恵子が豊を見てクスクスと笑った。
自分で産んでおいて…

「それで、その比奈子さんって人、若いの？」
浩司が五郎太に訊いた。
「んー、いくつなんだろうなぁ、21，2あたりかなぁ」
「あらそう、じゃ、結婚はまだかしらねぇ？　一男か豊に、なーんて～」
母親の言葉に豊は、箸を置いた。
「おふくろ…、本当にそういう冗談止めてくれ。なんで俺が、あいつと。
　うわーー考えただけで吐き気がする！　あんなやつ嫁にしたら、俺の人生がぶっ壊れる！」

「そうだな、あの子がここに嫁に来たら…、んがははは～」
五郎太は、一人笑い出した。
「やっだぁ、何？　お父さん、一人で笑って。それより、豊もそろそろお嫁さん連れてきてよ」
恵子が豊の顔をチラッと見た。
「兄ちゃんも結婚してないのに、なんで俺が先に嫁さん連れてこなきゃなんねーんだよ。
　それに俺、まだ２４だぜ？」
長男・一男、２６歳は、大学を出て、広告代理店で仕事をしているが、結婚のけの字も出ない女っ気なし。

食事を済ませ、風呂から出てきた豊は、一人鏡の前で、天然パーマを整え、大声をだした。
「俺の天然パーマを馬鹿にするなぁぁぁぁぁ！」
鏡の自分に吠えてどうする…豊。

（4）天パーｖｓハチマキ４

小鳩家では、風呂上りの比奈子が、ソファに座り、志乃に訊いた。
「お母さん、どうして町のクリーニング屋さんに仕事出すの？
プレス工場なら何件も出してるし、そこで充分じゃないの？」
小鳩縫製は、いくつかの大きなプレス専門工場に仕事を出している。
それが、なぜ、町の普通のクリーニング屋に仕事を入れるのか不思議で、疑問に思っていたことを訊いた。

志乃の答えは、簡単だった。
「すぐ近くにプレスをしてくれるところを見つけて仲良くしておけば、
急ぎのプレスもすぐやってもらえるでしょ？」

展示会用のサンプルや、舞台用衣装には納期が少ないものが多い。
大きなプレス工場に入れると、運送工程なども含め、時間のロスが大きい。
近くにプレスをしてくれるところがあれば、、急を要するサンプルなどが上がってきた場合、少量だと、パッと持って行って、パッっと無理を言って、仕上げてもらえる。
ようするに、仕事を定期的に入れておいて、何気に恩を売り、何気に「前田クリーニング店」には、頑張っていただこうと、志乃は考えていた。

「人間なんて、持ちつ持たれつよ。ミジンコで鯨を釣ればいいのよ、覚えておきなさい？
じゃ、お母さんは、お風呂入ってくるわ」
志乃は、そういいバスルームに向かったが、「ミジンコでは鯨は釣れない…」と、真面目に思った比奈子であるが、志乃が言いたかっ

たことはそんなことではない…
「エビで鯛を釣れ」ということだ。

志乃がバスルームに行ったことを確認すると、父・恒和が、向いに座っている比奈子に甘えた声で言った。
「比奈ちゃ～ん」
「無いからね！」
比奈子は、即答で答えると、恒和を睨みながら、ペットボトルの水を飲んだ。

「まだ何も言ってないぞ…」
恒和が、肩をひそめたが、比奈子が怒った。
「お金ないからね！　今月分、先週あげたでしょ！　もう無いわけ！？」
「そんなこと言わないでさぁ、頼む！」
恒和は、女遊びや酒はやらないが、競馬・競艇大好きで、週の４日はどこかで開催される競馬・競艇に通っている。

比奈子が幼稚園の頃、「お父さんと動物園に行こう！」と言われ、象が見れると喜んだ比奈子だったが、帰宅し、母親に「象さんいたの？　楽しかった？」と訊かれ、「馬しかいない動物園だった…」としょぼくれた。
幼稚園児の比奈子を競馬場に連れて行くような父親だ。

競艇に連れて行かれたときは、「ボートが猛スピードで走る湖に行こう！」と言われ、比奈子がボートに乗りたいと言うと、「ボートはね、乗るものじゃなくて、見るものなんだよ！」と、その日の全１２レースを、空っ風の中、一番前で見させられた。

恒和は、お金があるにも関わらず、競馬・競艇共に、指定席ブースには絶対入らず、常に一番前で、レースを堪能している。

週の大半を賭け事に費やす恒和は、家の仕事は、ほとんどしていない。

まぁ、仕事に手を出されても、足手まといになるだけなので、大人しく競馬・競艇場に行ってもらっていた方が、「小鳩縫製」としては、ありがたい。

賭け事では、勝ったり負けたり…まぁ、負けの方が多いが、財産を潰すような使い方はしていない。

働き者の志乃のおかげで、自分が好きな所へ足を運んでいても問題はない。

が、働かずしてお給料としてもらっているお金が、なくなると、志乃には内緒で比奈子に打診してくる。

「あのさぁ、お父さん？　そんなことばっかしてたら、本当に、家、追い出すよ」

「またまたぁ、そんなこと言っちゃって、比奈ちゃん。

比奈ちゃん、小さい頃からお父さんっ子で、お父さんのこと大好きだって、

言ってたじゃないか？　んん？」

上目遣いで、比奈子を覗くように見た。

「なに、そんな大昔の過去話持ち出してんのよ。小さいころのことでしょう？

過去は一秒前でも過去なのよ！」

「ぇえ！　今はお父さんのことが好きじゃないのかぁ……？」

この上ない悲しい瞳になった父・恒和。

「……、なんでそうなる…。

とりあえず、お金ほしいなら、お母さんの了解得てから私に言ってよね！」

「そ、そんなぁ。比奈ちゃん…」

家計簿関係をしているのは、比奈子だが、金庫を握っているのは、志乃だ。
志乃には、言いづらい。
二人に捨てられたら困る。
悩む恒和は、明日の競艇のことを思うと、今日も眠れない。

＊　しっかり者の妻と娘を持つ男は、しあわせ者…なのであろうか
＊

（5）初お邪魔、前田クリーニング店１

翌週から、小鳩縫製からプレス注文の入った前田クリーニング店。
レディース・ブラウス３００枚、プレスのみ。
ハンガーかけ、ビニール袋なし、そのままボックス積め。
納期は、一週間。
配達は、小鳩縫製契約の運送会社がとりに来る。

軽いじゃん？　こんなの。
やっぱ、ちいせー縫製工場じゃん～、比奈子め、ぐぁはは。
などと、豊はのん気に思いながら、アイロンをかけていた。
近所の顧客のクリーニングの一日の仕事をこなしても、「３００枚プレスのみ納期一週間」というのは、楽勝だ。
鼻歌交じりで、仕事ができた。

「おやじ、なんか楽な仕事もらっちゃったな？」
「そうだなぁ、汚れも傷チェックもすでに向こうさんが検品済みだからなぁ、
　プレスだけってーのも、ちょっと淋しい仕事でもあるなぁ」
首に巻いたタオルで汗を拭いながら、五郎太が手際よくアイロンをかけながら言った。
業務用アイロンは、重い。
そして蒸気が熱い。
自宅経営の狭い加工場は、いつも蒸し蒸し状態だ。

「豊、おまえ、夢とかなかったのか？」
ふいに五郎太に訊かれた。
「夢？　…って？　なんだよ、いきなり」

「たとえば、一男みたいに、どっか会社に働きに行くとか、
ほら、豊は学生のころラグビーやってたじゃないか？　選手になりたいとか、なかったのか？」
「え？　俺にとってラグビーは楽しい青春の思い出だよ。
それにサラリーマンにもなる気なかったし。
俺は、ずっとおやじの跡を継ぐつもりでいたからさ」
笑いながら言い、ブラウスの袖口に蒸気をシュッっと掛けた。

豊は、高校、大学とラグビーの選手だった。
実業団からの熱烈な誘いもあったのだが、断り、「前田クリーニング店」を継いだ。
豊の言うとおり、本人は小さい頃から跡を継ぐつもりでいたが、長男の一男が、サラリーマンになってしまったことで、豊は、好きなラグビーを捨てて無理をしているのでないかと思い、五郎太と恵子はずっと心配していた。

「それにさ、クリーニング屋、好きなんだ。
この仕事でおやじとおふくろに育ててもらってさ、大学も出してもらって、感謝してる。えへへ」
と、照れ笑いをした。
「そ、そうか…」
五郎太は、汗ではない水分をタオルで拭った。

豊の言葉に感涙していると、恵子が来た。
「父ちゃん、小鳩縫製のお嬢さんが来てんだけど？」
豊の顔が、歪み怪訝になった。

「小鳩縫製さんが？」
五郎太が手を休め、店に向かおうとしたら、比奈子が恵子の後ろから、ひょっこりと顔を出した。

「いよっ！　おっちゃん！　天パー！　がんばってる？」
「……」
頭にはこの間と同様に、タオルのねじりハチマキを巻いている比奈子を、豊は顔を引きつらせ、睨んだ。
比奈子は、一歩作業場に入ると、顔をしかめた。
「あつい…、きょえ～、ここ暑いんだね！」
「当たり前だろ！　狭い中でアイロンと蒸気使ってんだから！　バカか、おまえは」
豊はそう言うと、比奈子に背を向け、アイロン台に体を向けた。
「おやおや、天パーくんは、ご機嫌斜めのようですね、今日も！」
「うっせ！　天パーじゃなくて天然パーマだっつーてんだろーが！！」
また振り向き、怒鳴った。

「お嬢さん、今日はまたなんで…？」
「きゃはは、おっちゃん、お嬢さんだなんてぇ、比奈ちゃんでいいわよ」
自分で“ちゃん”づけをする比奈子である。
「今日は、様子伺い。ちゃんとプレスしてっかなぁ～、なんてね！　チェックしにきたの、比奈ちゃんがっ！」
比奈子は、ピースサインで言った。

「なにが比奈ちゃんだよ…。小鳩？　鳩は平和のシンボルだっつーの、おまえはコンドルかハゲタカじゃねーかよ。
それに、ヒナコ？　どこが雛なんだよ、ダチョウのデカイ卵から孵化したみたいな顔して！
名前負けなんじゃね？　小鳩比奈子！」
豊は、バカにしまくった喋り方で、比奈子を見た。
「あっ、天パー、私のフルネーム覚えてんだ。すごいね～、天才だ

ね～天パー」
なにを言われても動じない。
「……、テメェ、邪魔なんだよ、とっとと帰れ！」
豊が自分の胸の前で、拳を握り、比奈子を威嚇すると、五郎太の影に隠れて言った。
「あ～ん、おっちゃん～、この天パー恐いぃ！」
「おいおい、豊、お嬢さんに対してなんだ」
「おやじ、どこにお嬢さんなんていんだよ！　うすらトンカチみたいな女はいっけどよ！」
「うすらトンカチって、あなた…、何歳？　昭和一桁生まれ？　あっはは…、古っ！」
「……」

比奈子は初めて入るクリーニング店の加工場をキョロキョロと見回した。
ランドリーマシンやドライマシン、乾燥機、パンツストッパーなどフル回転している業務用のマシンが物珍しかった。

「クリーニングやさんって、大変なんだね？」
「あったりめーだろ！　ただ洗ってアイロン掛けてるとでも思ってんのか？
おまえんとこみたいに、ミシン踏んでるだけじゃねーんだよ」
「あっ！　ちょっと！　何々？　縫製の仕事をバカにする気？
洋服作んのがどんだけ大変か知りもしないくせに、そういうこと言わないでよね」
「うっせ！」
「天パーが今着てる服だって、作ってくれる人がいるから身につけてられるんだからね。
じゃなきゃ、天パーなんて裸なのよ？
それにね、服をクリーニング店に出さなくても人間は生活できる

けど、
服がなければ人間は困るのよ！」
「ぁあ？　じゃ、原始民族はどうなるんだよ。未だに下しか隠してねーだろうが！
服だってなくても生きていけんだよ！」
二人の、アー言えばコー言うが続く。

「クリーニングも服もなくても人間は生きていけるよ…心臓が動いていれば…」
五郎太がポツリと言うと、豊と比奈子が、座った目で五郎太を見た。
「まぁまぁ、お嬢さん、ここじゃなんですから、狭い茶の間だけど、上がってお茶でも」
恵子が、後ろから声をかけた。
「お茶？　じゃー、お言葉に甘えて～」
比奈子は、態度とコロリと変え、恵子に連れられ、茶の間に向かった。

「なんじゃ！　あの女は。様子見に来たって、茶飲みにきたんじゃねーかよ！」
豊は、比奈子が去る後ろ姿に向い、空気相手にキックをした。
「おいおい、落ち着け。おまえも、一緒に茶の間行ってくればいいんじゃないか？」
「なんで俺なんだよ。おやじ行って来いよ、休憩兼ねてさ」
豊は、アイロンを握り直し、作業にかかった。
「んじゃ、ちょっと、父ちゃんも比奈ちゃんとお茶飲んで来よっかね～」
五郎太は、鼻歌まじりに茶の間に消えて行った。

「……んだよ、みんなして比奈子比奈子って！　おかしーんじゃねーの！？」

誰に向かうでもなく、憎まれ口をたたいていると、店にお客が入ってきたことを知らせるチャイム音が鳴った。

（6）初お邪魔、前田クリーニング店2

「おっす！　豊！」
「なんだ、慎太郎かよ。どうした？」
勝手に作業場に入って来たのは、豊の幼馴染で同級生の慎太郎だ。
高校を卒業と同時に、酒屋を営んでいる実家を継いだ。
暇があれば、年齢の近い商店街の青年団の連中とつるんで集まっている。

「配達中～っていうか、おばちゃんは？　店にいないの珍しいじゃん？
あれ？　おっちゃんもいない…」
「あー、今、どーしようもねー客が来てて、二人して茶の間に行ってる。で、なに？」
「ふ～ん、そう。あっ、来週の土曜日、コンパだってさっ。
さと兄が、おととい行ったクラブでナンパした子と意気投合したみたいでさ、
コンパが決まったって。配達の道すがら、ついでに、それ伝えに来た」

さと兄とは、商店街の青年部に所属する豊より二つ年上の米屋の息子・さとると言い、遊び人だ。
二ヶ月に一度の割合で、商店街の若い独身を募り、コンパを開いているが、だいたいが、さと兄が話を持ってきて幹事をしている。
小さい頃から兄貴分のさとるには、豊も慎太郎も必ず誘われ、『絶対参加』を余儀なくされていた。

豊は作業の手を休めず、愚痴った。
「また飲み会かよ…、この間なんて、さと兄ってば一番いい女と先

に帰っちゃうし、
俺なんて、へべレケに酔っ払った女押し付けられて、家まで送ったら終電なくなっちゃうし、
真逆の方角からタクシーで帰ってきたんだぜ」
「その女のとこ泊まってくればよかったじゃん。まぁ、豊は案外真面目だからそれは、無理か」
「真面目とかそんなんじゃなくてさぁ、タイプじゃなかったんだよ！　その女！」

豊と慎太郎が話している間、茶の間では、比奈子、五郎太、恵子が和気藹々とお茶とお菓子を食べながら語り合っていた。
「へえ～、比奈ちゃんは、一人っ子なんだ」
「いいわよねぇ、娘がいるって。おばちゃん、うらやましいわ」
「そうだな、うちなんて男三人だもんな。花もなんにもありゃしないな」
五郎太と恵子は、女の子の比奈子をうらやましがった。
比奈子は、言葉使いや態度は大きいが、顔はかわいらしく、話していると性格のおもしろさも増していく。

「でも、うちのお母さんは、私が男みたいな性格だから、
なんで、男に生まれなかったのかって、今でも嘆いてる」
比奈子は、出された柏餅をパクつきながら言った。
「あら、比奈ちゃん、顔かわいらしいじゃない？
女の子がねじりハチマキっていうのは、初めてみたけど。ほほほ」
「やっだぁ、おばちゃん、かわいいなんて言われたことないよ～。なんか、うれしいしぃ」
きょほほ、と笑い、二つ目の柏餅に手を伸ばした。
五郎太と恵子は、そんな比奈子を嬉しそうな顔で見ていた。
思う心は一つ！
『比奈ちゃんを、長男・一男の嫁にぜひ！』

比奈子たちがのん気に話している時、豊もまたのん気に慎太郎と話続けていた。
「あっ、そうだ。店の前の看板に自転車がチェーンで繋がれてたぞ？　お客さんのか？
すげーよ、ＢＭＷの自転車だぜ！」
「はぁ？　看板に？」
豊は慎太郎と急いで、店の外に出た。

「な、なんだよ、これ！？」
「前田クリーニング」と書かれたスタンドタイプの看板に寄り掛ける様に、看板の足の部分と自転車の車輪部分がごっついチェーンで留められていた。
自転車が勝っているかのように、だいぶ年季の入っている看板は、倒れそうだ。

「ふざけんなよ、比奈子…」

舌打ちをした豊は、呼び止める慎太郎を置いて、店の中に入り、茶の間に直行し、ふすまを開け、比奈子に怒鳴った。

「比奈子！　テメー何考えてやがんだよっ！」
三人は一斉に豊を見た。

（7）初お邪魔、前田クリーニング店3

「へっ？　なにがぁ？」
のほほんと顔を上に上げ、問い返した。
「おまえなぁ、俺んちの看板をぶっ壊す気かよ！」
座ったままの比奈子を見下ろすように怒鳴った。

「どうしたんだ、豊。比奈ちゃんが驚いているじゃないか」
「そうよ、やーね、女の子に向かって、恐い声出しちゃって。怯えてるじゃない！」
五郎太と恵子は、そう言うが、比奈子は驚いても怯えてもいない…。
根性だけは座っている。

「ちょっと来いよ！」
「なに、なに！」
豊は比奈子の腕を掴み、無理やり立たせ、柏餅を握ったままの比奈子を、引きずるように店の外に連れて行くと、看板の前で振り放すように比奈子の腕から手を放した。
「これ！　なんだよ！」
「私の自転車…よ？」
と、かわいく首をかしげているが「どれがどうした」みたいな顔をした。

「おまえの自転車ってーのは、わかってんだよ！　なんでこの看板に繋いでんだって聞ーてんだよ！」
豊は比奈子を睨みつけながら言い、その横でわけのわからない顔の慎太郎と、二人の後を追いかけてきた五郎太と恵子が、事の成り行きを見守っていた。
「え、だって、自転車繋ぐとこなかったから、ちょうどいいところ

にコレがあって…」
比奈子が指さした看板は、自転車の重みで少し傾き、ゆらゆらと揺れていた。

「ぉお、比奈ちゃん、良い自転車乗ってんだねぇ」
「おじちゃん、これBMWだぜ？」
「うん、先月買ってもらったんだぁ～」
五郎太と慎太郎が言い、比奈子がうれしそうに答えた。

「おやじ！　慎太郎！　そんなことは問題じゃねーんだよ！
うちの看板が、壊れそうなのになんとも思わねーのかよ！
今、この家には買い換える余裕は、ねーんだぞ！　比奈子、早く外せよ！」
豊が、揺れる看板を手で押さえ、比奈子に顎をしゃくり言った。
「看板の一つや二つ、小さいこと気にするわね、天パーは！　ゆってぃの爪の垢でも貰えば？」
「うっせ！　大事な看板なんだよ！　それにあいにく、ゆってぃとは知り合いじゃないんでね！」
比奈子は、柏餅を全部口に押し込み、豊に言われるまま、しぶしぶごっついチェーンを外し、籠の中に入れ、唇を尖らせた。

「外したわよ……」
口をモグモグさせながら言った。
「よし！　じゃ、おまえ帰れ！　仕事の邪魔だ」
「はぁあ？　まだお茶飲んで、」
「帰れって言ってんだろーが！」
店の外で怒鳴り散らす豊を歩行者に見られ、五郎太と慎太郎は豊を制止した。
比奈子は五郎太と恵子にお辞儀をして自転車に跨り、漕ぎ始めた。

「けっ！　二度と来んじゃねーぞ！　ダチョウのヒナ！！」
比奈子の後ろ姿に怒鳴ったが、当の比奈子は、後ろ向きのまま片手を挙げて、「バイバーイ、また来るね～天パー」と手を振り、自転車を飛ばした。

豊は、五郎太と恵子に怒られたが、聞く耳を持たずムッとした顔で、看板を直し、店に入って行った。
「豊、あの子誰だよ。かわいーじゃん」
慎太郎が興味深深で訊いてきた。
「ぁあ？！　慎太郎、おまえ目ーおかしいんじゃねーの？　脇田眼科にでも行って来い！
　んがぁぁぁぁ」
慎太郎に向い、吠えた。
「なんだよ、まぁ、いいけどよ。とりあえず、来週コンパだからな」
そう言うと、配達途中の頭をかきながら慎太郎は、軽トラに乗り、去って行った。

（8）初お邪魔、前田クリーニング店４

「ただいまぁ」

「比奈子、前田クリーニング店、どうだった？」
「うん、クリーニング屋さん、暑かった。あー、背中かゆ～」
ミシンを踏んでいる志乃に訊かれ、比奈子は近くの椅子に座り、ものさしで背中をかき始めた。

「それで？」
「柏餅ごちそうになった」

「で？」
「天パーに追い返された」

「……。そう……、で、前田さんのところは一日どれくらいできそうな感じだったの？」
志乃が訊きたいのは、このことだけだ。
「ん？　うちのプレスだけだと、一日頑張って２００が限度かな？　他のクリーニングもあるだろうし…。でもさ、ちょっとしか見なかったけど、
丁寧な仕事してたと思うよ」
「そう、じゃ、ここで上がったサンプル分くらいは、問題ないようね」

ほそぼそとやっているように見えるこの『小鳩縫製』。
住まいの下に儲けられている仕事場は、サンプルを作っているだけで、志乃が代表取締役を努める『小鳩縫製株式会社』のオフィスは別のところにあり、自社工場も別に持っている。

他に、裁断、縫製の仕事を出している契約の下職工場が全国に３０件ほどあり、既製服のサンプルから量産、ファッションショーや芸能関係の衣装までを扱い、仕事は途切れることなく、年商は「億」をいっている。

志乃は、現場仕事をしなくても良いのだが、オフィス、工場の様子を見に行くだけでは、体が鈍ると言い、自宅工場でパートの人と一緒にミシンを踏んでいる。

豊たちも間違えたように、傍から見たら、縫製を営んでいる小さな自営業の家にしかみえない。

そんな事実を「前田クリーニング店」が知るのは、まだまだ先のことだ。

「天パーったらさぁ、私のことダチョウのヒナとか言うんだよ！
それに小鳩じゃなくて、コンドルかハゲタカだって！　ムカつくでしょ？　それにね――――――」

志乃は、比奈子がまだ恋愛というものに興味がないのかと思っていた。

仕事柄、業界のパーティがあれば、志乃は比奈子を連れて出向くことも多い。

父・恒和と三人でパーティなどに出席するときは、比奈子のところに変な男が来ないように、というか、恒和にとってファッション業界の人間は、全て変な男に見えてしまうため、常に目を光らせ、比奈子にピタリとくっ付いていて無理なので、志乃は比奈子と二人で出かけるときに、いろいろな男性と出会うチャンスを与えていたが、比奈子自身が何も興味を示さなかった。

普段でも、比奈子が男の人の話を自らすることは、ほとんど無い。

なのに、怒りながらとは言え、豊の話をずっとしつづけ、どことなく楽しそうな比奈子に、うれしくなった志乃だが、顔には出さず、相打ちだけし、ミシンを踏みながら、比奈子の話を聞いていた。

比奈子は、夕食の時も、連日同様負け競馬から帰ってきた恒和相手に、豊の話を一生懸命していた。

「くわぁぁああ、けしからん男だ！　なんだその天パー野郎は！
比奈子がダチョウのヒナなわけないだろ！　うちの比奈子はかわいい小鳩のヒナだ！
お父さんが文句を言ってやるぅぅぅう！」」
などと、恒和は、比奈子の変化には全く気づかず、会ったこともない豊を敵にし、怒りまくっていた。

＊　気になる男の話をする女は、おしゃべりになる　＊

（9）男子！　いざ、コンパへ！

適度に入ってくる小鳩縫製の仕事を難なくこなし、豊は、さと兄幹事のコンパの日を迎えた。
夜7時から始まる「女の子たちとの楽しい語り合いＤＡＹ」と題された飲み会は、渋谷のおしゃれな居酒屋で行なわれる。

参加男子はみな、商店街の連中。
さと兄を筆頭に、豊、慎太郎、八百屋の小窪ちゃん、花屋の次男坊でサラリーマンの花ちゃんが集まり、五人仲良く電車に乗って目的の店まで行く予定だ。
さと兄と慎太郎は、すでに仕事を家族に任せ、豊の家に来ていた。

「今日の女の子も結構いいぞ。クラブでナンパした子だけどセクシーでさぁ、
　ナイスなボディだったんだ」
さと兄が、鼻の下を伸ばした状態で言った。
「でも、さと兄は、その子しか知り合いじゃねーんだろ？　前みたいのは勘弁だよ？」
慎太郎は心配そうに訊いた。

一度、さと兄がナンパしたという女の子とコンパをしたとき、その女の子以外は、残念な結果だったことがある。
だいたい一番いい女は、見た目カッコイイ・さと兄が持っていってしまう。
「大丈夫だって！　今回は、粒ぞろえ揃えてっから！」
とは、自信満々に言うが、相手の女の子がそう言っているだけで、さと兄は見てはいない。

三人で話していると、玄関から聞こえてきた。
「ゆーたーかーく～ん～」
小学生が友達宅を訪ねたときに言うように、豊の名を呼ぶ花ちゃん。
２２歳になっても変わらない。
「おう、入れ！」
茶の間から顔だけを出してまるで自分の家のように言ったのは、さと兄。

「花ちゃんさぁ、玄関でその呼び方やめろよ、いい年して」
毎度のこととはいえ、豊は呆れながら言った。
「なんでさ、いいじゃん？　豊くんの家に来たんだから」
花ちゃんは、五人の中で一番年下の男だが、家が花屋なので昔から
「花ちゃん」と呼ばれている。
少し小柄で、かわいらしく、年上の女性にかわいがられている上に、
町内の子供たちの人気ナンバーワンでもある。

続いて八百屋の小窪ちゃんが来た。
歳は２５歳。
八百屋という元気な客商売としては致命的な、無口で無愛想。
「いらっしゃいませ」の声もほとんど口パクだ。
だが、接客時、本人意識ゼロのまま流し目を送ってしまい、そのクールさが女性のハートを掴み、下はお使いの幼稚園児から上は９５歳の地元地主の婆ちゃんまで、隣町からも女性客が、小窪ちゃん目当てに、しがない商店街の一八百屋に買い物に来る。

五人は、時間になり、豊の家を出た。

（10）女子！　いざ、コンパへ！

「比奈子？　今どこぉ？」
高校のときの友人・由美子から着信が入った。
「もう渋谷着いてる。駅のホーム歩いてる。今階段降り始めた。」
「……実況中継、もういいから。みんなもう来てるから早く改札においで」
比奈子は、由美子を含む高校の同級生４人との待ち合わせ場所の改札へ向かった。

「みんな～」
元気よく声をかけ、駆け寄った。
「「「「「……」」」」」
由美子たち女四人は無言だ。
「何？　どうしたの？」
比奈子は怪訝な顔でみんなを見たが、それ以上に怪訝な顔というか、四人は怒った顔で比奈子を見ている。

「比奈子、あなたね！　なんなのよ、その格好は！！」
一目もはばからず晶子が怒鳴った。

「今日は、コンパでしょ！？
どうして、そんなテレンテレンのＴシャツに穴のあいたジーンズなのよ！」
澄江が眉を寄せ、肩を落した。

「んもぉ！　今日のコンパは、超カッコイイ人で、気合入ってるんだから！
私の立場も考えてよ」

絹子に嘆かれた。
この絹子とは、さと兄がナンパしたナイスバディの女である。
「……比奈子さぁ、いつもの比奈子でいいんだけどさぁ、コンパの時くらいお洒落してっ！」
腕組みをした由美子に言われた。
「由美子ちゃん、腕組みすると胸が余計に目立つよ？　ぼよ～ん」
比奈子は、由美子の胸に視線を落とし、人差し指で突っついた。
「うるさい！　そんなことはどーでもいいのよ！」
由美子の胸は、Ｆカップだ。

比奈子のファッションセンスは、イケイケ女子のみんなとはちょっと違っている。
みんなからはテレンテレンに見えるＴシャツは、ビンテージで結構なお値段だ。
ジーンズの穴はファッションである。
それに今日は、タオルのハチマキも巻いていない。
専門学校で一緒だった友人たちは、比奈子スタイルをいつもカッコイイと言ってくれるのに、高校時代のこの四人には、いつもダメだしを喰らう。

なにがいけないのか、わからない。
このステキな格好のなにが悪いのか、私にはわからない…。
四人に囲まれ、比奈子は頬を膨らませた。

「もぉ、まったく比奈子は。みんな先行ってて。
私、この子連れて家行って着替えさせてから居酒屋に行くから」
渋谷から一駅のところに住んでいる晶子はそう言うと、比奈子の手を引っ張ってタクシーで自分の家に向かった。
なぜ、コンパごときにお洒落をしなければならないのか、比奈子に

は不思議だった。
残された3人は、先にコンパ場所の居酒屋に行くことにした。
晶子の家に着き、比奈子はクローゼットの中を覗いた。
「着れるものがないよ、晶子の服…」
めちゃくちゃ乙女嗜好の晶子の服に比奈子の顔が、嫌そうに歪む。
「なに言ってんのよ。あっ、これこれ、これにしよう～先月買ったばかりなのよ」
かわいいでしょ？　と、晶子が手に取った服は、花柄のフリフリのスカートで、裾からレースが少し覗いているラブリーなものだ。
晶子は無理やり着せようとしたが、比奈子は抵抗した。

「ちょっと待ってよ、似合うと思う？　私に！！」
「あー似合う似合う！　だから早く着て！　時間ないんだから」
適当に言われた。
「やだ！　こんなの！」
駄々をこねる比奈子に、次から次へと服を見せたが、比奈子は、首を縦に振らない。
しかたなく、仕事で着ている一番シックなアイボリーのスカートスーツを見せ、納得させた。
テキパキと晶子は、比奈子の化粧を直し、髪も軽くセットした。
「もう、ボーっとしてんじゃないわよ！　比奈子」
「自分の美しさに少し酔いしれていた…」
少し本気で言ってみた比奈子の頭を、晶子はひっぱたいた。
用意を整えると、来た時同様、比奈子の手を引っ張り、タクシーに乗り込み、居酒屋に向かった。

＊　偶然というものは、いったい誰が、なぜ、その人に与えるのだ

ろう　＊

（11）コンパ・どうしてここにいる

そのころ、先に着いていた五人の男が居酒屋の座敷に一列に並び、座っていた。
ワクワクとしているのは、さと兄だけで、花ちゃんは紙ナプキンで鶴を折り、小窪ちゃんは姿勢を正し、目を瞑り瞑想に入り、慎太郎はメニューに目を通し、豊はテーブルに伏せていた。

五分ほどして、女子三人が来ると男子五人は、ピシッと背筋を伸ばした。
女子三人は、晶子と比奈子がまだ来ていないので、絹子、空き、澄江、空き、由美子と間を一つ空けで座った。
さと兄と少し頬を染めた絹子が、挨拶を交わし、あとから来る二人は置いておいて、先に自己紹介をした。

さと兄がテーブルの下で、隣の花ちゃんに親指を上に向け合図をし、花ちゃんは隣の小窪ちゃんに親指を立て、小窪ちゃんは隣の慎太郎に親指を立て、慎太郎は隣の豊に親指を立てた。
テーブル下の合図は、その日の女の子の良し悪しの合図。
今回は、全員親指が上向きなので、「今日の女子はＯＫ」だ。
絹子は、さと兄狙いと、最初に宣言しており、澄江と由美子は、物言わず笑顔のまま、他の四人をチェックした。

豊の前には、由美子が座っている。
胸を強調する服を着ている由美子の胸に、豊は軽くうれしい眩暈を起こした。
慎太郎に関しては、鼻血が垂れたため、隣の小窪ちゃんが花ちゃんの折っていた紙ナプキンの鶴を奪い取り、慎太郎の鼻の中に突っ込んだ。

３０分ほど遅れて、比奈子たちが到着した。
「こめんなさい。遅くなっちゃってぇ」
テヘッ、という感じで晶子が、かわいく謝り、その後ろには「二コリともしない」比奈子が、
「よっこらしょっ、とぉ～」と、おっさんくさい一言を発し、由美子の隣に座った。

「あっ…ＢＭＷの自転車…？」
「…え？」
慎太郎が比奈子を見て言うと、比奈子は慎太郎に顔を向け、豊は斜め前に座った比奈子を見た。
化粧をし、スーツを着ている比奈子を少し直視したあと、豊が大声を出した。
「……ぁぁあああ！？　なんでおまえがいるんだよ！」
豊の声に、慎太郎を見ていた比奈子は、顔を豊に向け、全員が豊を見た。

「あっ、天パー…」
落ち着いた声でボソっと言った。
「天パーじゃねーつってんだろ！　天然パーマだ！　…そんなことはどうでもいいんだよ！
　なんで比奈子がいんだよ」
豊は眉を山にして比奈子に怒鳴った。
「おい、豊、知り合いか？」
「知り合いみたい。彼女、この間、豊の家に来てた」
さと兄が、端の方から訊いてくると、慎太郎が代わりに答えた。

「なんだよ、いつの間に？　おまえら」
「そうよ、比奈子、知り合いなら早く言ってよ～」
なんだなんだと、みんなは口々に言い出し、なぜかしら緊張がほぐれだした。

そんなことはおかまいなしに、豊は比奈子を睨みながら言った。
「なんで、ここに座ってんだよ、おまえ……」
「え？　コンパに…参加…？」
自分で疑問詞調に言い、首をかしげた。
「……そんなことは、わかってんだよ！」

「私たち、高校の同級生なの、ね、比奈子？　でも、豊くんと知り合いなんて、すごい偶然ね？
二人がお友達なんて初耳ぃ。
比奈子一言も豊くんみたいな人とお友達なんて教えてくれなかったじゃない」
由美子は、比奈子の腕を組み、かわいらしく顔を傾け、豊を見て言った。
「待って、由美子ちゃん！
俺と、この『おかめひょっとこの比奈子』とは友達でもなんでもないから、間違えないでくれ」
「あっ、また出た昭和一桁発言。あはっ、おかめひょっとこって、どうよ。相変わらず、古っ！」
「……」
きゃはは、と、鼻と眉間の間にしわを寄せ、笑い倒す比奈子に豊はもう何も言えなくなった。

「もう、比奈子ったら、笑いすぎ。豊くんに失礼でしょ？　これでも食べて大人しくしてなよ」
由美子が、比奈子の一番好きな鳥のから揚げを皿の上に置くと、「

ぐふふ」っと、緩んだままの顔で、言われた通り、大人しくから揚げを口に運んだ。

「ごめんね、豊くん。この子こんなんだけど、本当はいい子なんだよ。はい、豊くん、どうぞ」

「あ、ありがとう」

由美子は、代わりに謝り、ちょうど運ばれてきた大根サラダを取り分け、豊に渡した。

比奈子と対照的に女らしい行動の由美子に照れながら、微笑みを由美子に向けた。

（12）コンパ・やっぱ、おまえムカつく

「あれ？　比奈子ちゃんて、お酒飲まないの？」
全員、アルコールを口にしている中、ウーロン茶しか飲んでいない比奈子に慎太郎が訊いてきた。
「うん。ぜんぜんお酒飲めないから～。すぐ酔っちゃうし、眠くなるんだ！」
つくねを二個食いし、両頬を膨らませモグモグと食べながら答えた。
（うそつけ、おまえが酒飲めねーわけねーだろうが！　何かわい子ブってんだよ）
豊は、チラッと比奈子を見た。

「お酒ダメなんだ、なんかかわいいね、比奈子ちゃん」
（げっ、慎太郎、やっぱおまえは脇田眼科へ行け！）
テーブルに頬づえをついている豊は、シラけた顔で慎太郎を横目で見た。

「えへへ、この間、豊んとこのおばちゃんにも言われたぁ、比奈ちゃんかわいいって！」
比奈子は少し顔を上に上げ、うふふ、と目を線のようにしニンマリ顔で、自慢げに慎太郎に言った。
（ぁあ？　おふくろも脇田眼科へ行けーー！）

「うん、比奈子ちゃんマジかわいいし～オレ、タイプかも～。
比奈子ちゃんて、どんなタイプの男が好きなの？」
「ん？　私？　一生懸命仕事をちゃんとする人。あとね、やさしくて、素直で、渋くて――――」
次から次へと、自分の好みのタイプを並べていく比奈子に、慎太郎は、「うんうん」と笑顔で聞いてあげていた。

けっ、何言ってんだか、比奈子め。
おまえの理想の男が、おまえを好きになるわけがねーだろ！
自分の顔を鏡で見てみろ！
高望みもいいとこだろーが！
慎太郎も何ニコニコしながら、ダチョウの話聞いてんだよ！

二人の会話を聞きながら、チラチラ見ていた豊は、どんどん不可解な顔になり、手元も見ずに梅干チューハイの梅をマドラーで潰していたが、急に由美子に話しかけられ、顔を笑顔に変え、さわやか青年を気取った。

慎太郎と話しながら比奈子が、皿の上にある最後の「から揚げ」に箸をのばすと、斜め前から豊の箸も伸びてきた。
お互い一瞬目が合い、譲り合うわけではなく、すばやく四本の箸が一つのから揚げに刺さった。
「おまえ、さっきから何個「から揚げ」食ってんだよ、俺に譲れ」
「やだ。私、から揚げ好きだもん！」
比奈子は、頬を膨らませ、口を尖らせ、から揚げを引き寄せようとしたが、豊も負けじと自分の方に引き寄せた。
「女の子に譲りなさいよ！」
「はぁあ！？　女の子ぉ？」
睨み合いながら、ググッとお互いの箸に力が入った。
慎太郎と由美子は、皿の上で行ったり来たりしている「から揚げ」を見つめた。

「おまえは、女じゃねーだろが！　いつもねじりハチマキしてるヤツが、なにが女の子だぁ？
女の子ってーのはなぁ、由美子ちゃんみたいな子を言うんだよっ

！」
「ぇえ？　やだぁ、豊く～ん」
由美子が頬を赤らめ照れていると、急に比奈子の箸が、から揚げから離れ、豊の箸だけが、から揚げに残った。
「な、なんだよ…急に…」
意表をつかれた豊が、比奈子の顔を見ると、口元をギュッと閉じて、少し悲しそうな目で自分を見たことに驚いた。
「い、いいもーんだ！　女じゃない私は、こっちの軟骨揚げ食べるもん！　ふん！」
そう言うと、比奈子は左にあった軟骨揚げを、三つほど口にすばやく放り込み、黙ってしまった。
「豊、おまえ、ガキじゃないんだから、比奈子ちゃんにあげればいいだろ？　まったく…」
慎太郎は、豊の情強さに呆れながら言い、頭を叩いた。

自分が吐いた言葉で、比奈子の表情が変化したと思った豊は、少し良心が痛み、箸に刺さったままのから揚げを比奈子の前に出した。
「じゃ、じゃぁ、食えよ！」

「い・り・ま・せ・ん！　そんな天パー菌のついた物は、い・り・ま・せ～ん」
と、先ほどの悲しみの瞳はすでに無く、軽んじて言い、また軟骨揚げを口に入れた。
「て、て、天パー菌！？　あー、腹たった！　もう我慢の限界！　テメェ、」
豊が立ち上がろうとしたが、慎太郎が、豊の腕を掴み、座らせた。

「どうした？　さっきから、そっち何もめてんのぉ～？」
さと兄が、顔をひょいっと出し、訊いてきた。

「なんでもないで～す。仲良くやってま～すぅ」
慎太郎が、さと兄にVサインを出しながら答えた。

「落ち着けよ、豊」
「馬鹿にされて落ち着いてられるかよ！」

「比奈子も、悪いんだよ？　豊くんの天パーを馬鹿にするから。
天パーは天パーで天パーだからしょうがないでしょ？
ほんとにもぅ、比奈子ったら。ごめんね？　豊くん」
（ぁぁあ！？）
由美子の「天パー」連発発言に、豊の顔があんぐりとなり、慎太郎が「プッ」と吹いた。
全身の力が抜け、もう何も言いたくなくなった豊は、箸に刺さったままのから揚げを口に入れ、梅干チューハイで一気に流し込んだ。

（13）コンパ・カラオケへ

さと兄と絹子の所為で、席替えをすることもなく、二時間ほどの飲み会は終了し、二次会のカラオケへと向かうことになったが、さと兄は絹子と共にみんなの前からいつの間にか消えた。
いつものことなので残された男四人は、気にしない。
同じく残された女四人もわかっていたことなので、気にしない。

八人でカラオケに行き、みんなノリノリで歌いまくり、途中で比奈子と豊が隣同士になった。
二人共口を利くことはないが、それぞれに楽しんでいた。
比奈子が「トイレに行く」と、席を立つと、豊の目がほくそえんだ。
（絶対、あいつは大酒飲みに決まっている、猫を被っているだけに違いない…）
比奈子のカルピスウォーターと、自分のカルピスのチューハイ割りのグラスを取り替えた。

比奈子が戻ってくると、豊は素知らぬ顔で、歌っている者に合の手を入れながら、比奈子がいつチューハイを口にするか、心で笑いながら待っていた。

比奈子が、自分の目の前のグラスに手をかけ、チューハイを口にすると、豊は思い切り比奈子に顔を向けた。
（ダチョウが乙女ぶってんじゃねー！　って言ってやる！　くはははは～）
お酒を口にしても全然大丈夫な比奈子を想像している豊の顔は、すでに笑っている。

「えっ？　何？」
比奈子が豊にもたれ掛かってきて、そのままズルズルと豊の膝の上に比奈子の体半分が乗っかり、持っていたグラスは下に落ち、中身が全部こぼれた。
「えっ！　おい！　ど、どうした？　比奈子？」
豊があせり、比奈子を揺すった。

「きゃぁ、比奈子？」
「飲んじゃった？　比奈子！」
「やだぁ、誰よ？　飲ませたの！」
女子三人が、慌てた。
豊は、何事かもわからず、比奈子を膝の上に乗せ、固まったまま、みんなを見た。

比奈子は本当にお酒が飲めず、一口で爆睡するタイプであった。
あと1時間は完全に起きない。
豊が自分が飲ませたと白状すると、女子のみんなが「責任とって連れて帰ってよね！」と怒りだした。
残り２０分ほどで、カラオケもお開きになる予定だったが、豊は比奈子が起きるまでカラオケを延長して、その部屋に二人残された。

「うそだろ？　おい、比奈子、起きろよ、寝たフリしてんじゃねーぞ？」
ペチペチと比奈子の頬を叩いたりしてみたが、ピクリとも動かない。
「……マジか、よ…」

諦めた豊は、比奈子の頭を膝に乗せたまま、一人、誰も聴いてくれないカラオケを楽しんだ。
「拍手くらいしろよ…、比奈子…」
淋しくなり、呟いてみた声は、マイクを通り、エコーがかかり、ス

ピーカーから流れた。
本当に小一時間すると、比奈子がボーっとしたまま体を起し、目をグリグリ擦りながら、まだ眠そうな顔で訊いた。
「……あれ？　みんな……は？」
「帰った…」
「んー…ん？　なんで豊がいるの？」
「ってーか、なに一人で、のん気に寝てんだよ！　みんな帰っちまうし、残された俺どーすんだよ！」
自分で飲ませておきながら、怒り始めた。

「…ん、ごめんね…」
「……、」
素直に謝る比奈子に、ふいをつかれ、返す言葉が出てこない。

「帰るか。終電まだ大丈夫だし、な？」
「ん…、ごめん…」
「もういいよ、謝るな」
「ん、ごめん…」
開けきらない、眠そうな目で見つめられた豊は、何かを払うように頭を振り、フラフラする比奈子の手を掴んでカラオケ店を出た。

週末のまだまだ人の掃けない道を歩き、トボトボと手を引かれながら少し後ろを歩く比奈子に豊が訊いた。
「おまえ、本当に酒ダメだったんだな？」
「……酒？　私お酒飲んじゃったの？」
「うん、俺のと間違えて…」
自分がやったとは、言えない。
「私、お酒飲むと眠くなっちゃうんだ。なんでだろう…」
「知らねーよ、俺に聞くな」

電車に乗り、並んで座っていると、また比奈子が眠り始め、豊の肩にもたれ掛かってきた。
豊は、ちょっと笑いをこぼしたが、払いのけずにそのままにしておいた。

＊　女に肩を貸しただけでも男はなぜか、頼られた気になり、少しうれしい　＊

（14）眠さに勝てず…

「……さん、お客さん…？」
豊の肩を誰かが、叩いていた。
「お客さん？　終点ですよ、降りてください？」
薄目を開けると、目の前に帽子を被り、制服を着た人がいる。
「へっ……？」
頭がよく回らない。
瞬きを数回繰り返してから、その人を見た。

「お客さん、終点なんですけど」
「終点？　終点！？」
「はい！　終点です！　この電車は車庫に入りますので、すばやく下車お願いいたします！」
予定では、渋谷から数個先の駅で降りるはずが、二十数個目の終点駅に着いていた。
横を見ると比奈子がもたれかかっていて、今だ熟睡中だ。
駅員に謝り、比奈子を起した。

ボーっとした顔のまま、豊に引きずられながら電車を降り、反対側のホームに行こうとしたが、駅員に残念そうに言われた。
「渋谷行きの最終は、今しがた発車いたしました」

「ぇえ！？　どーすんだよ、俺たち…」
豊が比奈子に答えを求めた。
「タクシーで帰る…」
「馬鹿か、いくらかかると思ってんだよ」
「ここどこ…？」
ここは、隣の県だ。

とりあえず、駅にいてもしょうがないので、改札を出た。
「電話…しとけば？　ご両親心配してんじゃねーのか？」
豊が言った。
「あ、うん、大丈夫。もう寝てる時間だし…、豊は？」
「俺は、別にいいよ、男だし。うちも寝てると思う」

比奈子の家は、昔から放任主義と言えば、放任主義。
一度深夜三時過ぎに帰宅すると、翌朝、志乃に言われた。
「比奈子、夜中帰って来るんなら、朝帰って来なさい！　あなた、バタバタうるさいから」
と、言われ、夜遊びになるときは、朝帰りをすることも多い。
父・恒和は心配するが、母・志乃は、「お母さんは、比奈子を信じてるから！」と、全く心配せず、近所の目も気にしない。

駅のロータリーで突っ立ったまま、辺りを見回していた豊が、訊いた。
「比奈子、おまえいくら持ってる？」
「え？　５００円…どうして？」
「５００円！？　なんじゃそりゃ！　財布見せろ！」
比奈子の財布の中身を見たが、本当に５００円玉が一つだった。
「子供か、おまえは…」
呆れたように言った。

「俺だって、カラオケ代立て替えて、あと４０００円くらいしかねーんだぞ？」
「どうすんの？」
「あそこ泊まるよ」
豊が指を差したところは、駅前のビジネスホテルだ。

「カードあるし、部屋二つ取ればいいだろ？」
「うん、わかった。眠いし…」
そう言いながら、お酒の酔いと、疲れで何かに頼って歩きたい比奈子は、何のためらいもなく自然に豊の手を繋いだ。
豊は、戸惑いながらもそのまま、ビジネスホテルへと歩き始めた。

（15）部屋がない！？1

「エェエエ！？　そんなぁ…。本当にないんですか？」
「申し訳ございません。本日は団体のお客さまが入っておりまして、かろうじてダブルのお部屋が一部屋空いているだけでございますがっ！」
フロントに「お客さん、部屋一つ空いていて、ラッキーでしたね」くらいの勢いで言われた。

「やーよ、私。なんで豊と同じ部屋で一晩も過ごさなきゃなんないのよ！」
酔いが少し薄れてきた比奈子は、豊を見ながら訴えた。
「俺だってイヤに決まってんだろ？　おまえみたいなのと同じ部屋なんて、寒気がする！
あーやだやだ、さむさむ～」
「ちょっと、寒気って何？　私のどこが寒いのよ」
夜中なのでロビーに人気は全くないが、フロント前でケンカを始めた二人を、フロント係が、首を捻りながら見ている。

「おまえがカラオケやで寝ちまうから、こんなんなったんじゃないかよ！」
「はぁ？　電車で一緒に寝ちゃって、ここまで私を連れて来たの誰よ！
天パーのくせして眠りこけてんじゃないわよ！　役立たず！」
「テッメェー、天然パーマは、今は関係ねーだろうが！」

「……あのぉ」
「「なに！？」」
もめている二人に、フロント係が、少し不思議な顔つきで尋ねた。

「あの…、このようなことをお聞きして良いのかどうか…、
えー、お二人は、ご夫婦とか恋人同士とか…あのぉ、そういうご関係では、」
「「ないです！！」」
声を揃えてきっぱりと否定した。

「なんで私がこの天パーと」
「なんで俺がこのすっとこどっこいと」
言葉は違うがハモった。
息は、ぴったりだ。

フロント係は、納得できない顔で、また言った。
「しかしですね、お二人は…手を、」
「「手！？」」
「はい、手をずっと繋いでいらっしゃいましてですね…」
豊と比奈子は、一度顔を見合わせ、顔を下にし、自分たちの手に視線を向けた。
確かに繋いでいる。

一緒の部屋を嫌がりもめていて、夫婦でもなく、恋人でもないのに、なぜ、手を繋いだままなのか、フロント係には不思議でしょうがなかった。
立ち入ったこととは思ったが、聞かずにはいられなかった。

「「……」」
二人は、パッとすぐに手を放し、睨み合ったまま数秒が過ぎた。
「で、いかがなさいましょうか？　お部屋…」
この辺には、他にホテルはないと言われ、結局このホテルに泊まるしかなく、あきらめて泊まることにした。

（16）部屋がない！？2

比奈子が先にシャワーを浴びると言い出し、豊をチラリと横目でみた。
「ちょっと、覗かないでよ？」
「はぁ？　何言っちゃってんの？　誰が見たいかよ、比奈子のすっぽんぽんなんてよ！
　カギかけとけ。万が一ドアが開いて、おまえの貧弱な胸が見えたら俺の目が腐る」
「見たこともないのに、そーゆーこと言わないでよね！　結構胸デカイんですから！　わたくし！」
少し見栄を張ってみた。
豊はドキッとしたが、比奈子は「ふん！」と言ったあと、バスルームのドアをバンッと閉めた。

豊は、ダブルベッドに目をやった。
ダブルベッドと言っても小さいビジネスホテルの狭い部屋のベッドだ。
ベッド自体が少し小さい。

「よし、これでいい。あんなのと一緒に寝るなんて俺の一生の汚点だ」
二つ並べられていた枕を少し離し、隙間を作ったあと、テレビを点けて見ていた。
テレビのリモコンをいじくり、ホテルチャンネルのボタンを押した。

「……や、やばい、なんだよ、これ」

有料ＡＶチャンネルの予告が流れ、画面の中で裸の女が映っている。
豊はあせり、もだえる女の声を聞きながら、ローカルチャンネル切り替えのボタンを一生懸命探していると、後ろから冷たい声が聞こえた。
「最低ー。男って本当にどうしようもないわよね！」
振り向くと、ホテルの浴衣を着た比奈子が腕組みをして、豊を見下ろしていた。
「う、うわー」
驚いて、思わずリモコンを落した。
比奈子は、リモコンを拾い上げ、ボタンをプチッと押し、テレビを消した。

「なんだよ！　ボタン押したら、わけわかんねー場面になったんだよ！」
うそをこけ！　という蔑んだ表情の比奈子は何も言わず、豊を見ている。
豊は、シティホテルにしろ、ビジネスホテルにしろ、泊まることなどほとんどないため、ボタンの沢山あるリモコンは扱えない。

「テメェが風呂出たんなら、俺が入る！」
比奈子の冷たい視線に耐えられないくなった豊は、バスルームに向かった。
「ったく、男ってどうしてあーゆーことしか考えられないのかしらね」
比奈子は、ブツブツ言いながら、ベッドの上に座ったが、枕の位置が気になった。

「よしよし、これでいいわ。本当は、あいつなんて床で寝ろっつーのよ、ったく」
自分が寝ようと思っている場所の枕を少し真ん中寄りにし、豊の枕

をベッドサイドから少しハミ出す感じに置き直し、ベッドの中に入り、先に寝た。

シャワーから出て、ベッドサイドに立った豊は無言のまま比奈子を見た。
すでに目を閉じている比奈子が中央寄りにデンッと寝ていて、自分の場所は、無いに等しい。
豊用の枕も落ちかかっている。
ざけんなよ…比奈子。

比奈子の頭を乗せたまま、枕をベッド脇にずらした。
比奈子の目がパチッと開き、下から豊を睨んだ。
「なにすんのよ、人が寝てるのに」
「おまえ、ふざけんなよ、俺が寝れないじゃねーかよ」
豊が自分の枕を真ん中に置いて、急いでベッドに入って位置を確保した。

「ちょっと、何やってんのよ。これじゃ私がベッドから落ちちゃうじゃない！」
「うるせー、おまえは、端っこで寝ろ！」
「冗談でしょ？　豊がもっとあっち行きなさいよ！」
豊の体を足で追いやった。
「痛っ、テメェがそっち行け！」
豊が比奈子の足を蹴った。
「痛い！　なに女の子に暴力振るってるのよ！」
数分もめたあと、端と端に背を向けて寝ることで落ち着いた。

（17）部屋がない！？3

んがぁ！？
朝になり、豊が目を覚ました。
目の前に比奈子の寝顔があった。
二人仲良く真ん中で向かい合っていた。

あ～ぁ、こいつも寝てるとかわいい顔してんのになぁ、一生寝てろってんだ。
などと思っていると、比奈子が目を覚まし、自分の顔を見ていた豊に驚き叫び、飛び起きた。
「キャー、このドスケベ！」
「ぁああ！？　おまえが勝手にこっち向いて寝てたんだろーが！
……乱れてるぜ、浴衣…」
「へっ？」
自分の姿を見て、はだけていた浴衣を急いで整えた。
「なんも、色気もなんもねーな、おまえ」
「はぁ？　あんたに見せるような色気なんて持ち合わせておりません！」
比奈子は着替えを持ってバスルームに行った。

昼前にホテルを出て、駅に向かったが、「お腹が空いた」と、比奈子が言い出し、駅なかにあったファストフード店で軽く食べたあと、電車に乗った。
「今度は寝ないでよ」
「寝るわけねーだろ、酒も抜けてるのに」

「なんかエライ目にあったわ…」
「誰の所為だよ…」
「豊がちゃんと起きてなかったからじゃない…」
「俺の所為かよ」

「……ごめん…」
急に謝り、俯いた比奈子をチラッと見た。
「いいよ、もう」

豊の降りる駅の一つ手前で比奈子が降りた。
「じゃ…。あっ、来週、サンプルが上がってきて、前田クリーニング店に届くと思うから、
よろしく…」
ボソッと話したあと、比奈子はホームに降りて、豊の方を振り返り、声に出さずバイバイと口を動かし、手を振った。
豊が片手を挙げると、扉が閉まり、少ししおらしくなっていた比奈子を、動き出した電車の中から見えなくなるまで目で追っていた豊であった。

「ただいま〜」
自宅に戻った比奈子は、仕事場にいた志乃に言い、二階へ上がろうとした。
「お帰り〜。比奈子、どこにお泊りしたの？」
「えっ？　えー、ゆ、由美子のところ。昨日遅くなっちゃったからさぁ」
あはは〜と、笑った顔は固い。
「あら？　由美子ちゃんって、今朝電話あったわよ？
晶子ちゃんと絹子ちゃんに澄江ちゃんも、比奈子、大丈夫ですか？って」

げげげっ！
固まっていた笑顔は、固まったままだ。
「どこの由美子ちゃんの所に泊まったの？　一丁目の？　三丁目の？」
志乃は、涼しい顔で訊いた。
一丁目にも三丁目にも、由美子という知り合いは、いない。
「う、うん！　最近知り合った五丁目の由美子って子～。私着替えて来るね！」
慌てて、二階に上がっていく比奈子を見ながら、志乃は、微笑んだ。
なんでみんな、私の携帯に電話しないのよ！
と携帯を出したが、バッテリーが切れていた。

「ゴメン、おやじ。俺すぐ着替えて仕事するから」
「あぁ、疲れてんじゃないのか？　珍しいよな、おまえが、朝帰りというか、昼帰りするなんて」
五郎太がチラリと見たが、豊は五郎太と目を合わせない。
「う、うん。慎太郎が酔っ払っちゃってさぁ、な、なんかみんなで、そのまま、さと兄の部屋でごろ寝して」
と言い訳をしている後ろに、恵子がやってきた。
「あら、おかえり豊。さっき、慎太郎くんが来て、豊、ちゃんと戻って来てますかぁ～って。
で、あんた、比奈ちゃんとどこに泊まって来たのよ？　んふ！」
お客さんの洗濯物を持ちながら、めちゃくちゃうれしそうな母・恵子。

げげっ…、慎太郎…なんで俺に電話しないで、おふくろに聞くんだ…
携帯を見てみた。
バッテリーが切れている。

「なに！？　豊！　比奈ちゃんとお泊りだったのかぁ！？」
うれしそうに大きな口を開けて笑う父・五郎太。
「うるせーな、二人共！　違うよ、比奈子となんて一緒じゃねーよ！」
そう言うと、足早に部屋に消えた。

五郎太と恵子は、顔を見合わせ、微笑み合った。
『比奈ちゃんは、一男ではなく、豊に…』
夫婦、思う心は同じである。

（18）空しいキューピット

知り合いの展示会の仕事を手伝ったりし、忙しく過ごしていた比奈子は、豊と会わず十日ほどが過ぎた。
夜十一時過ぎ、自室でネットをしていた比奈子の携帯が鳴り、出ると、由美子からだった。

「もしもし、比奈子？　この間の話なんだけど」
五日ほど前、由美子から連絡が来て、「豊くんを気に入っちゃったんだけど、比奈子とお友達なんでしょ？　もしかして比奈子も好きとか？」
と、訊かれ、思い切り否定すると、仲を取り持ってほしいと頼まれ、軽く「ＯＫＯＫ」と言ったことを、忙しさの中、すっかり忘れていた。

「あ、あれね、あれ。明日、連絡もらうことになってるから、明日の夜にでも由美子に電話するよ」
とりあえず、その場をつなぎ、由美子との電話を切ると、すぐに豊に電話をした。

携帯のアドレスから「天パー」という文字を探し出し、ボタンを押した。
コールだけが続き、中々出ない。
もう寝ちゃってる？
そう思い、切ると、すぐに折り返してきた。
「もしもし、ごめん、寝てた？」
「いや、風呂から上がってきて電話取ったら、切れたから」
比奈子は、寝ていなくて少しホッとした。
仕事で疲れているのに、寝ているところを起してしまったのだとし

たら申し訳ないと思った。

「どうした？」

「由美子って覚えてるでしょ？」

「由美子？　…あぁ、コンパで一緒だったあの胸のデカイ…」

と言った豊は手で口を押さえた。

「……そう、その胸のデカイ、私と全然違う、胸のデカイ由美子！」

なぜかムキに言う比奈子。

「別におまえと比べてねーだろが！　で？　彼女がどうしたって？」

豊は、ベッドにゴロンと寝転がり、訊いた。

「うん、由美子がね、なんか頭おかしくなったみたいでさぁ」

「なにそれ。どんな風におかしくなったんだよ」

「それがね？　本当にどーしちゃったの？　って感じでさぁ」

「だから、何なんだよ」

豊は面倒くさそうに訊いた。

「由美子が、豊を気に入っちゃって、付き合いたいんだって！　まったく笑っちゃうでしょ？」

そう言い、ガハハハと笑った。

「……っえっ？　俺…？」

「うんうん、天パーの豊！」

「天パーの俺…と？」

自分で天パーと言ってしまっている。

「マジ？」

「うん、豊、別に彼女いないんでしょ？　まぁ、聞くだけやぼってもんだけどね」

「マジィィィ？」

豊は体を起こし、立ち上がった。

「あはは、なんか今の声だと、ＯＫみたいだね？
じゃ、由美子に豊の番号教えておくから、あとは勝手にやってね」
豊の喜んでいる姿が想像できて、比奈子は口元を少し上げ、顔が緩んだ。
「じゃ！　伝えるだけ伝えたから、おやすみ」
比奈子は携帯を切ろうとした。

「あっ、おい、待て！　俺もおまえに電話しようと思ってたんだよ」
「ん、なに？　私はもう用ないけど？」
「おまえさぁ、今度の日曜日、暇？」
「日曜日？」
「うん、浩司がさぁ、彼女と行こうと思ってた映画のチケットがあったんだけど、映画じゃなくて遊園地に行くことになったらしくてさ、あまっちゃったから俺がもらったんだ。ったくよ、高一のくせして、彼女いんだぜ！　あっ、で、おまえ暇なら付き合えよ、映画」
豊自身気が付いていないが、弟からチケットをもらった時、なぜか比奈子を誘おうと思っていた。

「豊くんさぁ、由美子誘えば？　由美子とお付き合いするかもしれないんでしょ？
だったら私じゃなくて、彼女をお・さ・そ・い！なさい。
それに私は今度の日曜日はどっちみち予定があるから…」
「なに？　予定って？」
「え？　ははっ、デートに決まってるじゃない。若いピチピチの活きのいい男子と！」
「へ、へぇ～、比奈子、そんなヤツいたんだ」
豊はベッドに腰掛け、そのまま後ろにゴロンと寝転がり、天井を見た。

「うん！　若い男子が私のこと奪い合いよ？

ということで、由美子との初デートに映画のチケット使いなよ、んじゃ、そーゆーことで！
おやすみ！」
「…え、もし、もしもし？　なに切ってんだよ！」
比奈子は、電話を切り、ホッとした溜息なのか、切ない溜息なのかわからない溜息をつき、由美子にメールをした。

『今さっき、天パーから連絡あり！　前田豊、由美子とのお付き合いＯＫみたいなので、電話してね。　おしあわせに～』
最後に豊の携帯番号を記して、送信を押した。

「おしあわせに…か…、あはは～」
空笑いのあと、なぜか空しくなり、比奈子は机の上に伏せた。

（19）デートなのに、比奈子の話？

比奈子から電話をもらった翌日、豊のところに由美子から連絡があり、
「お友達から始めましょう」的な感じになり、豊は比奈子に言われた通り、日曜日の映画に由美子を誘った。

女子と並んで映画を観るのは、大学生の時以来の豊は、少々緊張していた。
弟・浩司からもらったチケットは「ココ・シャネル」の物語。
高校生には渋すぎる…、浩司は何の興味があってこの映画を観ようとおもったのだろうか…
などと豊は、考えていたが、映画の中盤から居眠りをしてしまった。
豊のお好みではなかった。

「なんか比奈子が好きそうな映画だったね？」
映画を観終え、外に出てきた由美子が豊に言った。
「ん、そうだな、あいつ、縫製の仕事って言っても一応ファッション関係だしな」
もし、比奈子と来ていたら、映画館で眠りこけていた自分は、張り倒されていただろうなぁ、
などと豊は思った。

食事をする場所を探しながら、由美子と歩いていると、すれ違う男８０％が、由美子の胸をチラ見していく。
今日の服装も胸を強調したものだ。
やっぱ、由美子ちゃんの胸、目立つよなぁ…、すげぇよなぁ。
由美子ちゃんの胸がポンポコ山だとしたら、比奈子なんてきっと、

ポンポコ山の滑り台か、砂地…みたいな感じか？
ポンポコ山とは豊が通っていた小学校の敷地内に作られていた人工の山だ。

「豊くん！？」
由美子の胸を見てニヤついていた豊は、由美子の少し冷たい声に、我に返った。
「あっ、ご、ごめん…。あっ、この店にしよう！」
と、慌てて、目の前にあったイタリアンの店を適当に指さした。

「だけどさぁ、仕事の様子見に来たとか言って、
初めて来た家で、柏餅二個食って帰って行ったんだぜ、あいつ」
軽くワインを飲みながら、豊は比奈子との出会いなどのことを、由美子に話した。
「なんか、比奈子のこと話してる豊くん、楽しそうだね？」
由美子が首を少し横に倒し、かわいらしく笑いながら言った。
「え？　あ、べ、べつに…俺は」
豊は慌ててカラマーリのフライを口に押し込んだ。

「うふふ、豊くん、おもしろ～い。でも、私も比奈子のこと大好きだから許せる」
「え？」
豊は顔を上げ、ニッコリと笑っている由美子を見た。

「比奈子は、サバサバしすぎているくらいサバ子ちゃんなんだけど、すごく良い子なの。
高校生の時、学内でも人気者で、女子校だったんだけど、モテてたよ～。

バレンタインデーもすごかった。だけど、本人はなぜ自分がモテるのかわかってないみたいでさ
チョコ沢山もらえてラッキーくらいにしか思ってなかったんだ。
そんなところも、かわいいでしょ？　比奈子」
由美子は豊に教えてあげるかのように、比奈子との思い出話を続けた。

高校一年のとき、同じクラスになり、それからずっと友達だという。比奈子は、勉強はそんなにできるほうではなかったが、性格が面白いというか、変わっているというか、何に対しても物怖じせず、口は悪いが誰とでも仲良くなれる素質を持っていた。先生に対してもタメ口で、校長にも気に入られていて、校長室に入り浸ってソファでくつろいでいた。
意地の悪い教頭にはダメだしをよくしていたが、卒業式の日、教頭は比奈子の卒業に涙していたという。その涙が、もう虐められなくて嬉しいという涙なのか、比奈子との別れが淋しいと言う悲しみの涙なのか、誰もわからない…

由美子の話す比奈子の学生時代の様子に、豊はあんぐりと口を開け聞いていたが、途中で、今と何も変わっていない比奈子を思い出し、笑いながら聞きいった。
お互いのことなど話さず、「比奈子話」で初デートは幕を閉じた。

「まだ早いから送ってくれなくても大丈夫」という由美子と、駅で別れ、別々の路線の改札を入り、豊は、電車の中でも比奈子の高校時代を想像し、可笑しさのあまり一人ニヤついてしまい、隣に立っていた女性には変な目で見られたが、地元の駅まで堪えた。

由美子は由美子で、電車の中で首をかしげた。
「あれ？　今日は豊くんとの初デートなのに、比奈子の話ばっかし

てたなぁ。どうしてぇ？」
と、そのことは置いておき、とりあえず、比奈子に報告のメールを打った。

『無事、初デート終了〜！　豊くん、良い人だった。また会う約束したよ！』

リビングのソファに寝転びながら、父・恒和の「本日の競艇の話」を聞かされていた比奈子は、由美子からのメールを受け取り、携帯を開いた。
「今日は１－４狙いで行ったんだけどさぁ……、お父さんの話を聞いてくれよぉ〜。」
比奈子が携帯に目をやると、恒和が拗ね始めた。
「はいはい、ちょっと待ってよ…」
由美子からのメールの内容を読んで、返信した。

『初デートお疲れ〜！　天パーの心はすでに由美子のモノか！？次のデートもファイト！』
送信……。

軽い溜息と同時にパタンと携帯を閉じ、顔を上げ少し目を細め、恒和を冷めた目線で見て言った。
「それで、１－４狙いで行って、全部摩っちゃったわけでしょ！？いつものことじゃん」
「……そ、そーんなんだけどさ、でもね、今日はね――――――」
恒和は、比奈子に媚びるような目で続きを話しだし、比奈子は、呆れながらも、いつものように最後まで話を聞いてあげた。

豊が家に着くと、茶の間で浩司がテレビを見ていた。
「あ、兄ちゃんお帰り～」
「ただいま…」
「映画、どうだった！？　比奈ちゃん喜んでた？　ココ・シャネルゥ～」
浩司に訊かれた。
「え？　比奈子？」
「うん、比奈ちゃんと行ったんでしょ？」
「ちがうよ？　なんで比奈子なんだよ」
そう言いながら豊は自分の部屋へと向かった。

「ぁあ？　なんだよぉ…、僕のこづかい返せよ…」
浩司は、豊と比奈子がデートできるように、自分の少ないお小遣いで映画のチケットを買い、
「自分は行かなくなった」と嘘をつき、豊に譲ったが、兄思いの弟の作戦は失敗した。

（２０）男五人・居酒屋で…

平日の夜、仕事を終えた五人が地元の居酒屋に集まった。

一応上下関係はあるこの五人。

一番年下の花ちゃんが、みんなにビールを注ぎながら訊いた。

「さと兄、絹子ちゃんと付き合ってんでしょ？」

「ぁあ？　付き合ってるわけじゃないけど？」

さと兄が、こぼれそうになったビールの泡をペロッと舐めた。

「だって、あれから会ってるんだろ？　何回か」

慎太郎はうらやましそうな顔をした。

「会ってるよ、でもあと二、三回かもな」

「どうして？」

「絹子ちゃん、ナイスバディなんだけど、×××あんまり上手くないんだよなぁ」

「また下ネタかよ、さと兄…。それしかねーのかよ」

呆れた顔で豊が言った。

この男は、こういうヤツだ。

中学生のころから２６歳になる今まで、泣かした女は両手両足の指を足しても全く足りない。

「あっ、そういえば、豊は、この間、由美子ちゃんと二人で会ったんだろ？」

さと兄に訊かれた。

「ん、まぁね。映画観て、飯食っただけだけど」

「おまえ、由美子ちゃんにするの！？　比奈子ちゃん、どーするんだよ」

「なんで、比奈子が出てくんだよ！　あいつは関係ねーだろ」

そう訊いてきた慎太郎に、豊は箸袋の紙をくちゃくちゃと丸めて投げたが、慎太郎はキャッチし言った。
「んじゃ、オレ、比奈ちゃんもらっちゃおう！」
「え？」
慎太郎が投げ返した箸袋は、豊のおでこに当たり、膝の上に落ちた。
「そうだよな、慎太郎、比奈子ちゃんのこと、かわいいって言ってたもんな」
さと兄が、チラリと隣の豊を見た。

「オレ、今度、デートに誘う！　どこに行こう～」
慎太郎がご陽気に言った。
「あ、ラブホの割引券やろうか？　この間、絹子ちゃんと行ったとこだけど、結構よかったぜ」
さと兄はそう言うと、長財布を後ろポケットから出し、割引券を取り出そうとしたが、豊は、丸まった箸袋を伸ばしながら、静かに言った。
「比奈子、男いるらしい…から、慎太郎、無理だ」
みんなが豊を見た。

「比奈子ちゃんってフリーじゃないのか？
絹子ちゃん、比奈子ちゃんに男がいるなんて言ってなかったぞ？
五人とも特定の彼氏はいないって、聞いたぞ？」
「本人が言ってたから、いるんじゃねーの？　なんか年下の若い男だってさ」
豊は目を少し泳がせ、ビールを一口飲んだ。

「年下って…比奈子ちゃん２２だろ？」
「相手は、１９、とか２０？」
「それか、高校生の彼氏とか！？」

「愛に…年齢は、関係ない…」
やっと小窪ちゃんが喋った。

「なんだよ、オレ、告くる前に振られてんじゃん…、ちぇ～、ダチョウでも食お！」
慎太郎が、残念そうな声で言い、ダチョウ肉の竜田揚げに手を伸ばした。
ダチョウ…の、ヒナ…。
豊は、慎太郎がおいしそうに食べるダチョウの竜田揚げに目をやった。

「っていうか、なんか豊くんも、元気なくない？　比奈子ちゃんは関係ないと言いながら」
花ちゃんが、俯いている豊を覗き込みながら言うと、豊は、花ちゃんの顔を手で覆い、後ろに倒した。
「ばーか、なに言ってんだよ。俺は由美子ちゃんと付き合うの！
あ、俺これ、もーらいっと！」
皿の上に一つ残っていたから揚げを摘んだが、一瞬動きが止まった。
比奈子とから揚げを奪い合ったコンパのときを思い出したが、頭をフリフリ、我に返り、から揚げを口に入れた。
そんな豊の様子に、四人はお互い目を見合わせた。

「まっ、じゃぁ、豊と由美子ちゃんの前途を祝って乾杯でもするか」
さと兄が、豊にビールの入ったコップを手渡し、五人はグラスを鳴らし、一気に飲み干した。

豊は酔っ払ったまま、自分の部屋のベッドに寝転がり、横向きのまま何を見つめるわけでもなく、少し一点を見つめ、目を閉じた。
ダチョウの竜田揚げや、から揚げを見ただけで比奈子を思い出す。
由美子の胸を見ても、比奈子のことを考えていた。
自分でもわからない比奈子への気持ち。

「俺はあの胸のデカイ、女らしい由美子ちゃんと付き合うんだから。
比奈子には男がいるし…っていうか、関係ねーんだよ！
から揚げもダチョウも！　比奈子も！」

（21）のどかな前田家1

「いよっ！　おっちゃ～ん、天っパァ～」
「パーの部分をパァ～とか言うな！　パーと言え！　正しくは天然パーマだ！」
「……でさぁ、おっちゃん」
「……」
豊の話には聞く耳を持たないようだ。

「来週の火曜日と金曜日にプレスお願いしたいんだけど、ちょっと枚数が多いんだ」
比奈子が入り口のところで言った。
比奈子と五郎太が仕事の話をしている間、豊は鼻唄などを唄いながらビニール掛けをしている。

「そういうことで、よろしくお願いします。んじゃ、私はコレで！」
そう言い残し、比奈子は茶の間に消えて行った。

豊の鼻唄に五郎太は、鼻で笑った。
鼻唄の理由をわかっている。
比奈子はいつも2時3時に来るが、今の時間は5時過ぎ。
比奈子の両親が業界の集まりに参加する日、一人になる比奈子は、たびたび前田家で夕食を共にするようになっていた。

店は7時までなので、夕食は恵子が仕事から上がってからになる。
比奈子は料理を運んだり、茶碗を洗ったりの手伝いはするが、料理は作らないというか、作れないのでしない。
恵子が来るまで、比奈子は一人、茶の間で煎餅を食べながら寝転がっていた。

家の内装が綺麗に装飾されている小鳩家とは違い、前田家は１００％日本式の造りで、店の忙しさに感けてお掃除がおろそかになっている茶の間ではあるが、比奈子は妙に落ち着くらしく、その上、遠慮というものを持ち合わせていないので、自分の家のように使っている。
五郎太も恵子もそれがうれしくて、比奈子が来ると、仕事を早めに切り上げてしまい、豊に怒られていた。

「あれ、比奈ちゃん、来てたの？　今日飯食ってく日？」
浩司が学校から戻ってきた。
「あ、おかえり～。うん、今日、うちのお母ちゃんとお父ちゃんは、知り合いのパーチー」
寝転がり、テレビを観たまま言う。
浩司も慣れたもので、兄弟がもう一人増えたくらいにしか思っていない。

Ｔシャツに着替えて戻ってきた浩司は、あぐらをかいて比奈子の向い側に座った。
「比奈ちゃんさぁ、相談があるんだけど…」
「ん？　なになに？」

仲間で集まった時など、恋愛や会社のことで、誰かが悩みを打ち明け相談を始め意見を出し合うことは多々あるが、比奈子がアドバイス的なことを言おうとすると、「比奈子は聞いてるだけでいいの。あなたのアドバイスはトンチンカンでわからないから大人しくしていろ」と、毎回言われている。
そんな比奈子に相談したいという浩司が現れ、顔がほころび、身体を起こした。

「ん～、女心…なんだけど」
「女心？　彼女と何かあったの？」
高校一年生の浩司の彼女は、同じ学校の同級生だ。
浩司は意外に良い顔の男で、女の子にモテるため、彼女がいるにも関わらず、他の女の子たちとグループで遊びに行くことも多い。
そんな中、一人の女の子と二人でカラオケに行ってしまったのが本命の彼女にバレ、泣かれ、別れると言い出した。

「どうしたらいいと思う？
　別にカラオケ行った子とは何にもないし、ボクさぁ、彼女と別れたくないんだよね…」
浩司の真剣な目に、比奈子は大人の女として頑張ってアドバイスをと、思った。
「んー、じゃぁさぁ、君だけが特別なんだよ、っていうところ見せれば？」
「たとえば？」
「浩司って、結構クールでしょ。学校の中で彼女とはベタベタしたりしてないとか？
　学校の帰りに、手も繋がないとか？」
「すごい、比奈ちゃん！　どうしてわかるの！？」
浩司が少しばかり、驚いて瞳を輝かせ比奈子を見たことに、調子に乗った比奈子は話し続けた。

「手を繋ぐとか、人前でイチャイチャするとか、１００％じゃないけど、８０％の女の子はそれを望むわけよ、これが！　んでね、隙あらば、ガバッと抱きしめて、ブチュッって、そんでね、バサッと、ボキッと、ヒシッと――――――――――――――――」
比奈子が浩司にいろいろとダメだしをしつつ、女の子の扱いかたを説明したが、まったく適当だ。

話している比奈子も、真剣に聞いていた浩司も、途中で、わけがわからなくなり、話始めて数分後、お互い真顔のまま、しばし見つめ合い、首をかしげた。

「んー、……比奈ちゃんのアドバイス、翻訳機必要だよ？
あっ、比奈ちゃんってさぁ、何人の男と付き合ったことあるの？」
「へっ……？」
いきなりの質問に、口を継ぐんだ。
「何人くらい？　比奈ちゃんかわいいから、結構多いんじゃないの？」
「んーーー、……ない！」
「…え？」
「ない！」
真面目な顔で正直に答えた。
比奈子は、学生時代何人かに交際を申し込まれたことはあるが、どれも父・恒和によってぶっこわされている。
よって、ちゃんと付き合った男はいない。

「比奈ちゃんに相談したのが間違いだった、もういい」と言い、爆笑し始めた浩司に、ムッとした比奈子は、ちゃぶ台のピーセンを一つずつ投げつけた。

（22）のどかな前田家2

「おい、豊、今日はもう先に上がっていいぞ」
五郎太が、鼻唄の止まらない豊に言った。
「え？　まだ6時過ぎたばっかだよ？」
「いいから、いいから～、比奈ちゃん来てるんだし、一人じゃかわいそうだろ。相手しやれ」
「え、でもまだこれ、今日中にやるやつ、」
「あー、父ちゃんがやっといてやるから、ほれほれ、行け」
五郎太は、豊を無理やり作業場から追い出した。

「……ったく、なんだよ、おやじ…」
豊は、ブツブツいいながらも茶の間に向かった。

「……なにやってんの？　おまえら」
比奈子は、口を開けた浩司に向かってピーセンを投げ入れていた。
「浩司の調教…」
「…ふ～ん？」

「あっ、ボク、飯まで宿題してくる…」と、恋には先輩の浩司は、豊と比奈子に薄笑いを浮かべ、二階に上がって行った。
「なんだ？　あいつ」
豊は去っていく浩司を見てから、比奈子に顔を向けた。
「彼女のことで悩んでるっていうから、相談にのってあげてた」
「悩んでるわりには、楽しそうだったじゃん？　あいつ」
「ふっきれたんじゃない？　私のアドバイスのおかげで」
などと適当に言う。

浩司が座っていた場所に腰を下ろした豊が、比奈子の表情を変に思い訊いた。
「どうかしたか？　比奈子？」
「ん、べつに？　あっ、豊は何人の女の人と付き合ったことあるの？」
「ぁあ？　なんだよ、いきなり」
「ねぇねぇ、何人！？」
身を乗り出して訊いてくる。
豊は思い出しながら、指折り数えた。
「さ、三人…」
「ふ～ん、まぁ、指折り数えるほどじゃないわね」
「……聞いといて、なんだよ！　お、おまえは？」
「んーと」
と、言いながら、一応、手を出し、指を折りまげるマネをしたが、折曲がらないため、その手をそのまま煎餅に伸ばし、言った。
「秘密！」
「なんだ、それ。くだらねー」
「……」

どうしてこいつといるとき、なんも緊張感がないんだろう。
お互い会話もないまま、テレビを見ていたが、豊は、由美子と二人でいるときの自分と、比奈子といるときの自分が別物であると感じた。
由美子とデートしているときは、どことなくぎこちないというか、何か話しをしなくては、という感じになり、気を使ってしまう。
だからデートのときは、映画を観ることが多い。
話をしなくて済む。
ただ、由美子との会話の中には、お互い比奈子の話しは盛り上がっていた。

バリッ、ボリボリ、モグモグ、バリッ、ボリボリ、モグモグ、ズズズー、ゴックン…

「……スンゲー、耳障りなんだけど！？」

豊は、お煎餅を食べ、お茶を飲みながら、テレビニュースを見ている比奈子に言うと、顔を豊に向け、何も言わず、わざとお煎餅をバリバリと口いっぱいに入れ、ものすごい音を立て食べた。

殺気立っているような比奈子の顔に、向い側に座っていた豊は、少し退いてしまった。

な、なんか俺、悪い事言った？

恐ぇーし…

比奈子は、「誰とも付き合ったことがない」ということを浩司に笑われたことに、少なからずショックを受けていた。

（23）夏…

蝉がうるさく鳴き始めた季節。

「おっちゃん～天パー、頑張ってる？」

「おう、比奈ちゃん」

「また来たのかよ、邪魔しに来んなって言ってるだろーが！」

そう言いながらも、豊は笑顔だ。

「夏のクリーニング店の裏側って、サウナだね？　クーラー入ってんのに」

比奈子は、首に掛けてあるタオルで汗を拭った。

夏場は、タオルのハチマキと、首にもう一枚タオルが追加される。

「こんなところで仕事してたら干からびちゃうよ。の割には、おっちゃん、下っ腹痩せないよね？」

比奈子が五郎太の腹を見て言った。

「豊も、こーなるってこと？　おっちゃんと親子だし、遺伝子ばっちり受け継いで」

「ばーか、俺はスマートなまま年齢を重ねてやる！」

「だよね～、こんなんなったら由美子悲しむよ…うん！」

腹に指を差され、比奈子にケタケタ笑われた五郎太は、肩を落とし悲しい顔でアイロンをかけた。

「おい、比奈子。たぶん、来週の日曜日になると思うけど、慎太郎たちと海に行くんだけど、

おまえも行かない？」

「え？　海！？」

豊は仕事をしながら背を向けたまま、比奈子に言った。
「うん、海。車で行くし、さと兄は絹子ちゃん誘うって言ってた」
さと兄と絹子はまだ続いている。
一度、絹子が「さとるさんは、私の体だけが目当てなのはわかってる、別れましょう」と、絹子から別れを言い出した。
さと兄としては、好都合のように見えたが、自分から振ることはあっても振られることはなかったさと兄は、ショックが大きかった上に、絹子と離れてみて他の女に心が動かなくなっていた自分に気が付いた。
「やり直したい」と絹子に言い寄ったが、「寄りを戻す気はない」と突っぱねられ、また振られた。
それでも、さと兄は頑張って絹子を追いかけ、やっと寄りを戻してくれた。
いまでは絹子の言いなりで、「遊び人のさとるが、変身した」と、豊を含む仲間や家族や商店街のみなさまにまで驚かれている。

「みんな次の日仕事あるから、日帰りだけど、由美子ちゃんも誘うし、比奈子も、いっしょ、」
「私は、いいやぁ。来週の日曜日は、予定あるし」
言葉を遮るように言った比奈子の返事に、豊は一瞬仕事の手を止めた。
「そっ、か…。また、年下の彼氏とデート？」
「あはっ！　そう、デート！　あ、由美子きっと喜ぶよ、海好きだから」
そう言いながら笑い、豊の背中を見つめる比奈子の瞳は弱弱しい。
「比奈ちゃ～ん、お茶にしましょう？　今日はね、水ようかんよ」
恵子が呼びに来た。
「うっほい！　水ようかん！　お茶お茶～」
顔をすぐに元気一杯にし、いつものように恵子の後ろに連なり茶の

間に向かう。

「おばちゃん、この水ようかんおいしいねぇ～。腕あげたんじゃない？」

恵子お手製の水ようかんをタッパーごと食べながら比奈子は偉そうに言った。

「あら！　本当？　比奈ちゃんに褒められるとうれしいわぁ。もう一タッパー作ってあるから、お家に持って帰ってお母様と食べなさい」

「いいの！？　やりぃ～」

比奈子が来るようになり、最初はお茶請けを市販の和菓子やケーキにしていたが、ある日、恵子が作ったドーナッツを食べさせたところ、比奈子の「美味い！　おばちゃん天才！」と言う、嘘か本当かわからない褒め言葉に、店番で忙しい中、お菓子作りを始め、何かを作っては比奈子を携帯メールで呼び出していた。

「ほんと、あいつ、お茶目的でここに来てんのかよ。喫茶店じゃないってんだよ。

あっ、金払ってもらえばいいんじゃん！」

ブチブチ言いながらアイロンをかける豊に、五郎太は訊いた。

「おまえ、今付き合ってる、その由美子さんって言う人、比奈ちゃんの友達だろ？」

「え？　そうだよ」
今まで由美子のことなんて訊かれたこともなかった豊は、五郎太に顔を向けた。
「その人のことが…好きなのか？」
「何言ってんの、おやじ…。好きだから付き合ってるに決まってるだろ？」
「そっか…ならいい。そのうち、家に連れて来い」
「……あぁ…そうするよ」
気の無い声の豊を気にしつつ、五郎太は、ランドリーマシーンの様子を見にその場から離れた。
豊と由美子は、付き合っていると言っても、みんなで集まることの方が多く、二人でのデートはまだ数回しかない。
それも映画を観て、食事をしてと、ありきたりなデートで、ただの友達の付き合い方と同じだった。
男と女の関係はもちろん無いし、豊は別にそれを望んでいるわけでもなかった。
「好きだから付き合っている」自分で言った言葉ではあるが、豊自身、由美子のなにが好きなのか、わからないでいる。

その日の夜、由美子は豊から海への誘いのメールを受け取ったが、「比奈子は来れない」と聞き、比奈子へメールを打った。
『比奈子、来週の日曜日は、園に行く日だった？』
比奈子からの返信が届いた。
『うん、子供たち、夏休みだし、暑いけどテーマパーク連れて行く

約束してるんだ。
海、楽しんで来てね～』

（２４）男四人の思い

クリーニング店の会合に出ている豊を除いた、さと兄、慎太郎、小窪ちゃん、花ちゃんが、商店街の若者の溜まり場・居酒屋「お春」で飲んでいた。

「オレ……」
いつもほとんど話さない小窪ちゃんが、言うと、３人は一斉に小窪ちゃんを見た。
「「「何何何～？」」」
何を言うのか、興味がある。

「オレ、思うんだけど……」
「何を思うんだ？　小窪ちゃん？」
さと兄がやさしく訊いた。

「豊……」
「豊がどうした！？　小窪ちゃん！」
慎太郎が急かす様に訊いた。

「……いいのかな……って…」
「何を！？　何をいいのかな？　って思うの？　小窪ちゃん！」
花ちゃんが身を乗り出し訊いた。

いちいち小窪ちゃんの一言一言に相づちを打っていると時間が掛かる。

「豊、由美子ちゃんと、付き合っててて、いいのかな…？」
めったに話をしない小窪ちゃんが、その話を出してくるということ

は、余程心配しているのである。
「あぁ、それか…。俺も思ってる」
慎太郎が声を落として言ったが、さと兄も花ちゃんも思っていることは同じであった。

夏に海に行った時は、彼女の由美子と来ているにも関らず、楽しそうにするわけでもなく、「比奈子、今日、デートなんだって…」と言ったきり、一人パラソルの下で、ジーッと海を見ていた豊。
みんなで比奈子にお土産を買おうと言うことになった時は、みんなとは別に、小鳩家にと、サザエとはまぐりを買っていた豊。
海の家で昼食を食べている時、焼きそばを作っているおじさんをジッと見ていた豊…おじさんは、タオルでねじりハチマキをしていた。

たまに男女１０人で集まって騒いでいる時も、豊は由美子より比奈子に対して、ふざけ絡まることが多い。
「あいつ、たまに比奈子ちゃんのこと、スンゲーやさしい目で見てんだよな」
「気持ちの裏返しってのか、比奈子ちゃんが豊に対して天パーとか言って、豊は怒るんだけど、楽しそうっていうか、メチャクチャ顔喜んでるし…」
「彼女の由美子ちゃんには、見せない顔なんだよ」

小窪ちゃんが言った。
「豊、比奈子ちゃんのこと絶対好きなはずなのに、どうして由美子ちゃんとつきあってるんだろう」
「「「…わかんない…」」」
四人で首を捻った。
「あいつ、比奈子ちゃんには彼氏がいるって言ってただろ？　絹子ちゃんに訊いても、絶対いないって言うんだ。絹子ちゃんが嘘ついてるようにも見えないし」

「じゃぁ、比奈子ちゃんが嘘ついてるのか？」
「そんな嘘、必要ねーだろ？」

小窪ちゃんが言った。
「比奈子ちゃんは、豊のこと好きなのかなぁ」
「「「…わかんない…」」」
四人は俯いた。
「由美子ちゃんもさぁ、豊と付き合ってるわりには、豊が比奈子ちゃんのこと見てたりしても、なんも表情変えないんだよ」
「むしろ、二人を見て、ニヤニヤしてることの方が多いんだよ…」
「余裕か？」

小窪ちゃんが言った。
「由美子ちゃんは、あの二人にどうにかなってほしいの…か？」
「「「わかんねー…」」」
四人は沈んだ。

賑わう店内で、俯き沈黙を続ける男四人は、なんの対策も見つけられないまま、今日も家路に着いた。

（25）かえで学園1

厳しい残暑も和らぎ始め、長袖のTシャツが、気持ちいい気分にさせてくれる頃、比奈子は、定休日の前田クリーニング店に電話を掛けた。
茶の間でバリバリと煎餅を食べていた恵子が電話に出た。

「もひもひ？」
「あ、おばちゃん？　比奈子です。何食べてんのぉ？」
「あら、比奈ちゃん。お煎餅…うふふ」

比奈子からの電話の用件は、運びたい荷物があるのだが、自分や母親の車では荷物が載らず、バンは仕事で使ってしまっているため、もし、定休日で前田クリーニング店のミニバンを使わないようなら、貸して欲しいと言う内容だった。

五郎太は、近所のおっさん連中とカラオケに行っていて、豊は今、目の前で同じように煎餅を食べているので、ミニバンは使わないので貸しても良いと返事をした。
「これから取りに行く」という、比奈子に、恵子は言った。
「あら、わざわざ来なくてもいいわよ、豊に持って行かすから」
「でもそしたら、豊、帰り、」
「あーいいのいいの。どうせ一駅なんだから電車で帰えらせれば！　だから比奈ちゃんお家にいて。すぐに持っていかすから、ね？」
比奈子は恵子のお言葉に甘え、家で豊を来るのを待つことにした。

電話を切った恵子は目の前の豊に言った。
「というわけ、なので、はい！　早く比奈ちゃんのところにミニバン届けて来て」

豊の持っていた煎餅を取り上げた。
「ぁあ！？　なんで俺が届けて電車で帰ってこなきゃなんねーんだよ！」
「あら～いいじゃない。比奈ちゃんに会えて！」
「な、なんなんだよ、それ！」
「ほらほら、比奈ちゃん待ってるから！　とっとと行って来なさい！」
無理やり家からほうり出した。
「なんで、俺なんだよ…」
一人つぶやいては見るものの、足元軽やかにミニバンに乗り込み、エンジンをかける豊だ。

豊は、比奈子の家に前に着きチャイムを鳴らした。
「あ、ごめんね～わざわざ」
「ほんとに、わざわざだよ！！」
「あっ、ついでにちょっと手伝って」
比奈子に呼ばれ中に入ると、ダンボールが五つ、玄関に積まれている。

「豊くん、悪いわねぇ～、手伝ってもらっちゃって」
志乃が出てきて豊をポンポンと叩いた。
「どうも、お久しぶりです」
一応かしこまった挨拶をした。
「そんなあいさついいからさ、これバンに乗っけて！」
比奈子がダンボールを指さし、そのままバンに向かって腕を振った。
「人使い荒くね？」
「今に始まったことじゃないから！　私！」
自分のことはよくわかっているようだ。
「はいはい、がんばって～」と、何もしない比奈子と志乃の声援の中、荷物を積み終えた。

「ねぇ比奈子、豊くんに付いていってもらえば？」
「どうして？　私一人でも大丈夫だよ？」
「あっち行って荷物下ろすときどうするの？
　この時間じゃ、まだ昌也くんたち帰ってきてないじゃない？　男手あったほうがいいわよ」
「でも…」
困った表情の比奈子の顔を、豊は不思議に思ったが、
「どうせ、用事もないから一緒に行っても大丈夫」と、志乃に言い、比奈子に付き添っていくことにした。

行き先もわからない豊が運転をし、道案内は比奈子がする事になった。
「んで、どこ行くの？」
「まずは、二子多摩川方面に走っていって。近くなったら説明するから」
「はいはい」

しばらく車を走らせるが、黙ったまま比奈子は、窓の外を見ている。今日はやけに静かだ、と豊は感じていた。

「ごめんね、お休みの日なのに、用事頼んじゃって」
「べつに…いいよ。どうせ家に帰っても暇だし…」
素直な比奈子には調子が狂う。
どこに行くのかもわからない、ダンボールの中身が何なのかもわからない、そして静かな比奈子。
豊は、運転しながらチラチラと比奈子を気にした。

「おまえ、変なもんでも食った？　拾い食いしたとか？」
「何、それ」

「いや、今日は静かだから…腹でも壊してんのか、なんて…」
「はぁ？　いつもの私です」
「どこが！　あっ、ハチマキ撒いてないから本調子じゃないとかか？」
「ば～か……、あっ、次の交差点左～」
「そこ右～」「その信号の先左～」
豊は言われた通り車を走らせ、目的地に辿り着いた。
「そこの突き当たり～、はい、到着！」
突き当たり…んん？　幼稚園？
違うか…

スライド式の大きな鉄の門、広い土の中庭、その奥に大きな平屋が建っている。
幼稚園のような造りになっているその建物の脇に、豊は車を停めた。
車を降りた比奈子に続くように、豊も、門の横の木の板に書かれている「かえで学園」という文字を見ながら、中に入ると、三歳くらいの女の子が比奈子に向かって走って来た。

「ママー」

マ、ママ？　ママーーー！？
比奈子、おまえは子持ちなのか！！？？
豊は、体がすくみ、立ち止まった。
衝撃的な場面だ。

あ、相手は誰だ……、お、俺か！！　違う！　俺じゃないことは確かだ……
などと、豊はパニック寸前。

（26）かえで学園2

「真由、ちゃんと、おりこうさんにしてる？」
比奈子は、女の子を抱きかかると、軽く頬っぺたにキスをした。
振り向いた比奈子は、すぐ後ろで、半分体が斜めになり、倒れかけの豊を見ながら笑った。

「ほらほら、このおじちゃんにもキスしてあげなさい～」
お、おじ、おじさん？
頭が混乱する中、真由を渡され、抱きかかえると、真由がチュッと、豊の頬にキスをした。

や、やわらけ～～子供の唇って…って、俺はロリコンの趣味はないぞ！
「おじちゃん、ママのダーリン？」
えっ、だ、だ、ダーリンって、今の子はませすぎている…
それにまだ、おじちゃんじゃないし、俺。
子供の攻撃にたじろぐ大人の豊。

「ママのダーリン？」と、聞かれ、「比奈子が、この子のママなら、この子のパパは、比奈子のダーリンで、だけど、この子は、比奈子のダーリンは俺なのかと訊いた…。あれ？　えーと？　んーと？　わからねーーーー」
頭がこんがらがりすぎた豊は、比奈子を探したが、いつの間にか消えている。

ちびっ子をオレに預けて、俺を一人にしないでくれぇぇぇぇ！
真由を抱きながら、ひとまず玄関に向かおうとしたが、玄関入り口から、小さいのがわらわらと飛び出してきて、豊の周りに纏わり付

いてきた。
「お兄ちゃん、かわいい顔してんね？」
最近のくそガキは生意気だ。
なぜ大人に向かってタメ口なんだ。

「頭、天パー？」
「天パー」「天パー」「天パー」
一人の子が言い出すと、もっと小さい子たちがマネをし、「天パー」コールが起こる。
「天パーじゃなくて、天然パーマ！　と言いなさい！　天然パーマ！」
一応教育上、正しい日本語を教える。

「ほらほら～みんな、お部屋に入りなさ～い」
窓から女性が召集をかけると、みんな素直に玄関に吸い込まれるように入っていく。
玄関をみると比奈子が「こっちに来い」と手を振っている。
すでに豊は疲れていた。

比奈子のところまで行くと、この学園の園長先生という、やさしい顔をした６５歳くらいの女性と、２０歳位の若い女性を紹介された。
二人でこの学園を仕切っていて、他に数人、子供の面倒を見ている女性がいる。
部屋の中は広いフローリングの部屋を中心にいくつもの部屋が連なり、ちびっ子たちは日中、一番大きな部屋で過ごしている。
小学生・中学生もいるが今日は平日なので学校に行っていた。
親のいない子や家庭の事情で預けられている子たちが共同生活しているこの学園に比奈子は、たびたび訪れ、子供たちに洋服やおもちゃを運んでいる。
今日、もって来たダンボール５箱にも、おもちゃとお菓子が入って

いた。

昼ごはんの時間も近いので一緒に食べることになった豊は、長テーブルにみんなと行儀良く座り、ちゃんと「いただきます」をして食べ始めた。

豊は、なぜか女の子たちではなく、小僧たちに囲まれ、いそいそと小僧たちがお世話をしてくれていた。

たまに天パーをいじくられる。

食後の運動ということで、豊は小僧たちをぽんぽんと放り投げたりして構っていたが、ほんとうは豊が遊ばれていたのかもしれない。

疲れきった子供たちを寝かしつけ、ミニバンに積んであるダンボールを中に持ち運び、やっと一息つけた。

「ねぇねぇ、豊、ちょっと土手まで散歩に行かない？」

比奈子が、近くの川へ行こうと、豊を誘った。

（27）かえで学園3（前書き）

ものすごく、台詞多いです。

（27）かえで学園3

豊は、比奈子に誘われるまま、学園を出て近くの河川敷まで歩いた。
「んー、気持ちいいね～、暑くもなく寒くもなく、んで、秋の匂いがする」
比奈子が伸びをして、草の上に腰を下すと、豊も同じように腰をおろし並んだ。

園の中では訊くことができず、ずっと不安な気持ちの豊は、思い切って言ってみた。
「比奈子…、真由ちゃん…って…」
「ん？　真由？　んふふ、驚いた？」
「おまえの子供…じゃない、よな？」
比奈子の横顔をみながら、訊いた。

「違うよ、私の子供じゃない」
豊は肩の力が抜け、“ふぅ～”と音に出さずに息を吐いた。
比奈子は、川を見ながら話を続けた。

「あの子ね、三ヵ月くらい前に、かえで学園に預けられたの。
母親が“必ず迎えに来るからね”ってあの子に言い残して置いていったの。
だから門のところに女の人が見えると母親だと思っちゃうみたいで誰が来ても「ママー」って
駆け出していくの」
「うん…、そっか」
豊も川に目を向けた。
少し黙って、足元の草をもて遊んでいた比奈子が、「ふふ」と意味

のない笑いをしたあと、口を開いた。
「私ね……、あの学園に四歳までいたの」
「え？　あそこに預けられてたの？」
豊は比奈子の方を向いたが、比奈子は前を向いたままだ。

「小鳩の両親は、私の実の両親じゃない…」
比奈子は豊に顔を向けずに淡々と話し始めた。

母親に連れられ、かえで学園にきたのは、比奈子が二歳になる少し前。
本当の父親は誰かわからない。
だが、母親は誰だか知っている。
今の母・志乃の双子の妹が、比奈子の本当の母親だ。
志乃の妹は、未婚のまま妊娠、出産をしたが、もともと子供など欲しくはなかった彼女は、比奈子をかえで学園の門の前に置き去りにし、新しい男の元に走った。

「かえで学園の門の前で、じっと座ってたんだって、私。
園長先生が見つけてくれてね、私が握っていた紙を読んで捨て子ってわかったらしい。
それから、小鳩の両親がが迎えに来るまで、あそこで生活してた」

「私の本当の母親は、『必ず迎えに来るから待ってなさい』とは言わなかったけど、
私は、待ってたんだろうね。
真由みたいに女の人が門のところに見えると、走り出してたんだって。
本人記憶無しなんだけどね、あはは～。それに、大きくなるに連れ、わかってきたみたい。
あぁ、私のお母さんは、もうここには来ない、待っててもお母さ

んは迎えになんて来ない…って。
いつしか門に女の人が見えても飛び出さなくなって。
あっ、でも、真由の母親はちゃんと連絡もあるし、ちゃんと会いにも来るから大丈夫！」

昔から志乃と妹の仲は良くなく、自由奔放の妹は実家にも寄り付かない人間であったが、急に亡くなった父親の遺産手続のため、志乃は妹を探しだした。
子供を出産したことは聞いていた志乃が、尋ねて行った妹の所に、子供がいないことを不思議に思い、問いただした。
事実を知った志乃は、二十四歳の時、比奈子をかえで学園から引き取った。

当時、恒和と志乃はすでに付き合っており、恒和も自分の子として育てることを心に決め、婚姻届を出すと同時に、比奈子の籍も自分たちの所に入れた。
比奈子が四歳の時である。

「小鳩の両親が私を迎えに来た時、志乃さんが私を抱きしめてくれたんだぁ。
すんごく暖かくて、私、『お母さん…』って、言っちゃった。
本当の母親と同じ顔してたからかなぁ、それとも、待ってたのかな？
ん～、本当は待ってたのかもね、母親のこと…へへっ…」

学園生活から三人家族になった比奈子に、「比奈子が大人になり戸籍を見ればわかってしまうだろう」と、志乃も恒和もそれを隠そうとはせず、「本当の親子ではないが、そんなことは別に大切なことではない。人間の魂に血の繋がりなんて関係ない。私たちは三人で

一緒にいられることをしあわせに思いましょう」と、小さい子には意味がわからない言葉だが、比奈子は志乃にそう言われ、暮らしてきた。

「私さぁ、すごく感謝してる。本当はさぁ、小鳩の両親だって、自分の本当の子供作りたかったと

思うんだ。一度ね、言ったことがあるの、小学二年くらいのときかなぁ、妹か弟がほしい…って。

私ませてたのかもしれない、わかって言ったんだもん。

お母さんはまぁ、少なからず血縁関係はあるけど、お父さんは全くないわけじゃない？

そんな二人の間に自分がいていいのか、考えちゃった。

本当に血の繋がった子供がいた方がこの人たちは、しあわせなんじゃないかな、なんてね？

子供心に考えちゃった」

へへへ、と、おどけたように比奈子は笑ったが、その笑顔はすぐに消えた。

「だけど、両親にはね、バレてたんだなぁ、私の気持ちが。

自分たちのためにこの子は兄弟がほしいなんて嘘をついている…って。

『自分たちの子供は比奈子だけで充分だ、比奈子以外は娘じゃないから、他には要らない』

って、お父さんに言われた。良い両親でしょ？　うちのお父さんとお母さん…。

私はずっとしあわせを与えられてきたから、両親が歳をとっても幸せでいられるように、

今度は私が恩返ししていく番だ、って思ってる。

だからね、あの家をちゃんと継げるような人間になって、両親の気に入った人と結婚して、

婿養子に来てもらうの」

比奈子になんと声を掛ければ良いのかわからない豊は、そこまで話した比奈子の肩に腕を回し、頭をやさしくポンポンと叩いた。

比奈子の少しだけ震えた唇は、豊の手のぬくもりで微笑みに変わり、鼻をすすって比奈子は立ち上がり、豊は比奈子を見上げた。

「比奈子…」

「……なーんてね、こんな作り話、聞いててもしょうがないか。もう帰ろうっか、やっぱ夕方になると肌寒くなってくるね」

オレンジ色の夕日で街が染まり始める中、二人は並んで学園に戻り、子供たちに「また日曜日に来るから」と言い、車に乗り込んだ。

「日曜日って…」　豊が顔を比奈子に向け訊いた。

「ん？　毎週じゃないけど、日曜日にはここに来ることにしてるんだ、昼間だけだけど」

「デート…って…、若いピチピチの彼氏…って…」

そう訊ねた豊の顔は、少し、緩んだ。

「そう、ここの子たちのことよ。あはは～、私がモテるのは、ここのガキンチョくらいなものよ。

でもまぁ、あと１０年２０年すればね…いい男になるだろうし～私は選び放題というわけよ！」

「あはははは～、マジここのちびっ子たちが、彼氏？　だはははは」急に笑い出した豊に、助手席の比奈子は、ムッとした。

「なに？　なんかすんごい失礼な笑い方なんだけど？　彼氏がガキん子で悪いわけ！？

ちょっと、ちゃんと運転してよね。笑いながら運転するなんて危

ないでしょ？」
「わかってるって…うっせーな、おまえは。…ガキが…彼、氏か…。
ブッ…ははは～」
安堵感からくる豊の笑いは大きくなるばかりだが、いままで見えなかった比奈子の彼氏に対して嫉妬していたことに気がついた。

（２８）かえで学園４

比奈子を家まで送り届けると、志乃が出てきて、今日のお礼も兼ねて、夕食を食べるように誘われた。

豊は、遠慮しつつも初めて小鳩家の住まいの方へお邪魔した。
きれいな作りになっていて、小さい縫製工場の割には儲けているのか…と、装飾品や家具を見ながら思い、前田クリーニング店の百パーセント昭和的イメージの茶の間や自分の部屋と比べ、多少の落ち込みを抱いてしまった。

ダイニングテーブルに食事の支度ができるまで、ダイニングとコネクトになっているリビングに居るようにと、通されたが、ソファには恒和が、デンッと座っている。
向い合うように座らされた豊は、少しビビっていた。
たばこ屋のおばちゃんの「小鳩恒和情報！　競馬・競艇好きで、仕事をしないどうしようもない、だらしない男で、比奈子や志乃が苦労し泣かされている」と聞いていた豊は、初めて会う本人と自分が想像していた恒和のイメージとが大きく違い、戸惑った。

「競馬は紳士淑女の遊びだ」と、賭け事に行く時もスーツを着用、身だしなみは整え出かける男・恒和は、体格が良く、中々のいい男である。
もっとオヤジ臭い男だと思っていた。
見た目キリッとしたダンディと呼ぶにふさわしい見かけだ。
が、見かけだけで、これは表の顔だ。
家族大好き恒和の裏の顔は、比奈子にデレデレで頭が上がらず、志乃にデレデレで捨てられないように頑張っている。

普段人様に見せる仮の目つきで、豊に睨みを利かせた。
余所行きの顔の恒和に、比奈子が言った。
「お父さんさぁ、なに気取ってんの？　バレてっから、豊には」
「へっ？　そうなの？　なんで、なんで？」
比奈子にかわいらしく訊く恒和に、豊はあっけに取られた。
二重人格か…この人は。

比奈子に顔を向け、くずれだした恒和だったが、再び豊を睨みつけ、父親らしい声で言った。
「とりあえず、娘の比奈子は、おまえにはやらん！　わかったか！」
「「……」」

「あのさぁ、お父さん？　豊は、由美子の恋人なの、か・れ・し、なの！　わかる？」
比奈子は、呆れ顔で恒和に言った。
「え、由美子ちゃんの彼氏？　な～んだ、そうか！
由美子ちゃんの彼氏だったかぁ～、あーよかった！　お父さん心配しちゃったよぉ！
比奈子にはもっといいの見つけてあげるからな！」
ふふ～んと、鼻を鳴らし、比奈子を見た。

「……」
ひどい男である。
天然にもほどあると、娘ながらも恒和に呆れてしまった。
豊は豊で、怒りとかそう言うものは、沸いてこず、この人のことは何も考えたくない…と思った。
だけど、この人は、血の繋がらない比奈子を本当の娘のように大切にしていることはわかる。
もし自分だったら、どうなんだろう。
血が繋がらない子供を引き取って、娘のように可愛がれるのだろう

か。
この人はやさしい人なんだろうな。
豊は、初めて会った恒和の比奈子への愛情が感じ取れ、尊敬の眼差しを向けた。
「な、なんだ、なんか文句あるのか！　君は！」
豊のきらめく瞳に恒和は少し怯えた。

志乃に呼ばれ、ダイニングに行き、食卓に並べられた料理を見て、豊はまた自分の家と比べて軽くショックを受けた。
外食でしか見たことのない料理が並んでいる。
イタリアンやフレンチの洋食だ。
前田家のちゃぶ台の上は、いつも茶色の煮物が並ぶ。
鮮やかなニンジンのオレンジ色さえ、前田家では、煮物に変身しダークオレンジカラーだ。
比奈子の家は、緑や赤や黄色がならんでいる。
豊は感激していたが、今日は志乃が頑張っただけである。
仕事好きな志乃は、料理ほど面倒くさいものはないと思っている。
普段の小鳩家で主に食卓に並ぶ回数が多いのは、カレーやチャーハン、一番多いのは春夏秋冬問わず、ナベである。
冷蔵庫にあるものを鍋に入れ、最後にごはんかうどんを入れお腹を満たす。
恒和も比奈子も何も文句を言わない、味に無頓着で、口に入ればいいと思っている親子三人である。

「ごちそうさん、うまかった」
玄関前のミニバンの前で豊が比奈子に言った。
「こっちこそ、休み使わせちゃってごめん。…それに、変な話も、聞かせちゃって、ごめん。
　でも、ありがとう」
比奈子が笑顔で言った。
「ばーか。礼なんていらねーよ。んじゃ、俺は帰るとしますか！」
豊は車に乗り込み、エンジンをかけ、少し間を置いたあと、窓を開け比奈子に声を掛けた。
「比奈子…？」
「ん？　どうしたの？」
豊の真面目な顔を少し不思議に思った。

「あのさぁ、比奈子は…、小鳩のお父さんとお母さんに出会うために、愛を貰うために、
　本当のお母さんのお腹を借りて生まれて来たんだと…思う。捨てられたとかじゃなくて…」
「えっ？」
「人間って、たぶん、たぶんだけど、誰かに愛されたり、誰かを愛するために生まれて来るんじゃ、
　ないかと…思う……、って、何言ってんだろうな、俺、ははは～。じゃ、またな」
豊は、精一杯の言葉に苦笑いをしながら、頭をかいた。
「あ…、うん！　ありがとう、豊」
比奈子がうれしそうに笑った。

さんきゅぅ～、天然パーマ…

走り去る豊の車が見えなくなるまで比奈子は、見送った。

あぁ…胸がキュンキュンするんですけど俺……乙女ちっく…

……俺は乙女だったのかーーー、ちくしょーーー！

豊は比奈子が見えなくなるまでチラチラとバックミラーに映る比奈子を気にし、ハンドルを握りながら一人、車の中で叫んだ。

（29）比奈子、お見合いへ行く1

「うげっ！　僕よりカッコイイじゃないか！」
恒和は、ムッとし、見ていた写真をテーブルの上にバンッと、置いた。
「あら、あなたよりカッコよくていいじゃない」
志乃は、コーヒーカップを置き、換わりに写真を手にし、隣に座っている比奈子と見直した。

「まだ、比奈子に見合いなんて早いんじゃないのか？
それに、こんな男に「お父さん」と呼ばれたくはない！！　僕は反対だ！
だいたい比奈子の結婚相手は、お父さんみたいな――――」
万が一「お父さんみたいな男」が、この家にもう一人増えたら、この『小鳩縫製』はどうなるのか、
比奈子と志乃は考えただけで、気を失いそうになるというか、そうなったら笑うしかないと思った。

誰も聞いていないのに一人、「比奈子の未来の婿」について語る恒和を丸々無視し、比奈子は志乃に訊いた。
「何着ていけばいいの？」
「ん？　見合いって言えば、着物じゃないの？　成人式のあるじゃない、あれにしなさい」
志乃は、のん気に言った。

近くに住む、志乃と仲が良い、吉田のおばちゃんが、比奈子に見合い話を持ってきた。
比奈子が２０歳を超えると、いろいろと見合い写真を持ってきては、志乃を困らせている。

志乃も比奈子にはまだ結婚は早いと思っているし、比奈子には、自分で好きな人を見つけ恋愛してもらいたいと考えている。
比奈子は比奈子で、両親が気に入った人なら誰でもいいと思っているため、「吉田のおばちゃんがうるさいから、比奈子お見合いしてみる？　いやだったらいやでお断りするし」志乃に言われ、比奈子は一度お見合いをすることを決めた。

相手の男性は、菊池則政、２８歳。
有名私立大学を卒業し、有名広告代理店で働いている見た目もカッコイイ、頭も良い男だ。
実家は、父親と長男が建築のデザイン会社を経営しているが、次男の則政は跡を継ぐ必要もなく、自由に生きている。
小鳩家の条件、婿養子でも構わないと言う。

「比奈子、断りなさい。こんな男けしからん！　特に顔が…」
比奈子と志乃は、まだブツクサ言っている恒和をチラリと見たが、また無視した。
「でね、もしお見合いするなら、お会いする日なんだけど、
今月はこの菊池さん仕事で忙しいんだって、だから来月半ばの日曜日になるらしいわ」
「ふ～ん、いいよ、私はいつでも」

「おっ！　そうだ！　お父さんが付添い人で付いて行けばいいんじゃないか！
なんで気が付かなかったんだ」
「あなた、何考えてるの！
お見合いは二人だけで会うことになってるの、あなたが付いて行ってどうするのよ。
どうせ、ろくでもないことしでかすのわかってるんですからね！」
志乃に言われ、恒和は、むくれたまま静かになった。

話し終え、自分の部屋に戻った比奈子は、見合い写真をそのまま机の上に放り投げた。

（30）比奈子、お見合いへ行く2

「はい、できあがり」
恵子は、比奈子の帯紐を締め、ポンポンと帯を叩いた。
「ありがとう。あーでも着物って苦しい～」
比奈子はぐったりとした表情で首をもたげた。

お見合いの日、着物を着せられない志乃は、着付けの免許を持っている恵子に頼み、比奈子の着付けをお願いした。
「あっ、今日、由美子来るんでしょ？」
「今、豊が、車で由美子さんの家まで迎えに行ってる…」
「ごめんね、忙しいのに着付けお願いしちゃって」
「着付けくらいぜんぜん構わないんだけどね。
比奈ちゃんがお見合いなんて、おばちゃん、なんか淋しいわ…」
しょぼんと肩の力を落す恵子である。

比奈子と恵子が茶の間に現れると、寝転がりながらテレビを見ていた五郎太が、体を起した。
「おいおいおーい、比奈ちゃん綺麗じゃないか。どこのベッピンさんかと思ったよ」
「っていうか、おっちゃん、なにのん気に寝転がってんのよ。
これから豊が彼女連れてくるっていうのに」
比奈子は笑いながら、ちゃぶ台の上のかりんとうを口に入れた。

「はぁ…なんか、オレ、比奈ちゃんが見合いするの淋しいなぁ…」
恵子と同じことを言った。
「でしょう？　あっ、このまま比奈ちゃんがここにお嫁に来ちゃうとか？」
「ぉぉおお、それ、いいねぇ。

一男は仕事命っぽいしなぁ、浩司は高校生で彼女持ちだから、豊がいいんじゃないか！？」
冗談でも盛り上がる二人を見て、少しうれしくて比奈子は笑ったが、豊への思いなんて有って無いようなもの！　と自分に言い聞かせ、五郎太に言った。
「おっちゃん、何言ってんの！　豊には彼女がいるでしょ！？
由美子は、良い子だからお嫁さんにはお薦めだよ？
胸大きいし…きゃはは～、豊は見る目あると思うよ」

「「……はぁ…」」
これから由美子さんが来るんだった……、五郎太と恵子は、肩を思い切り落として、溜息を吐いた。

チラリと掛け時計に目をやった比奈子は、慌てた。
「うわっ！　こんな時間だ。じゃ、私はお見合いに行ってきま～す。
あっ、着てきた洋服、明日にでも取りに来るから、おいといてね」
恵子に着付けのお礼をいい、かりんとうを一つ摘み、比奈子は玄関を出た。

「まったく、苦しいったらありゃしない。どこの何人だよ、着物なんて考えたの…」
ブツブツ言いながら、一歩道路に出た時、声を掛けられた。
「比奈子？」
「あっ、由美子」
由美子は、豊が駐車を終えるのを門の前で待っていた。
車から降りてきた豊は、比奈子が来ていたことなど知らず、比奈子の着物姿に驚いた。

「な、なにおまえ…着物…？　十一月だからって、七五三…のわけねーよな」

豊のびっくりした顔に比奈子は笑った。
「へへへ～、似合うでしょ？　おばちゃんに着付けてもらったんだ。
あ～二人共見惚れない見惚れない。かわいい比奈ちゃんにっ！」
袂を持っておどけた。

「あっ、今日だったっけ？　お見合い」
由美子が思い出したように訊いた。
「うん、これから行ってくる」
「み、あい？　見合い…って、おまえ見合いする、の！？」
豊が険しい表情をし、おもわず持っていた車のキーを落とすと、比奈子と由美子の目線がキーにいったが、比奈子はすぐに顔をあげ、豊を見た。
「そうだよ？　なんかすごいイケメンなのよ、これが！　がはっ！」
ピースを作りながらニッと笑った。
「俺、聞いて、ねーぞ…」
「…なんで豊に言わなきゃなんないのよ」
比奈子が怪訝な顔をした。

「まっ、とりあえず、私はこんなところで時間潰してる暇はないんだわ。
おっちゃんもおばちゃんも二人が帰って来るの楽しみに待ってるから、早く家の中入りなよ。
んじゃ、私は失礼しま～す」
ペコリと頭を下げた。

「比奈子、頑張ってね！　お見合い～」
「うん、由美子も、がんばれ！　おっちゃんとおばちゃんに気に入られるようにね！」
二人でガッツポーズをし合ったあと、比奈子は背を向け歩き始めた。
豊は奥歯を噛んだまま、少しの間、比奈子の後姿を見ていたが、

「どうしたの？」と訊く由美子の声に、口元だけの笑みを作り、家の中へ通した。

数件先の曲がり角に来た時、比奈子は、豊の家の方を少し振り返った。

すでに豊と由美子の姿はなく、青い空を見上げ溜息を吐いて、笑顔を作り、かわいらしい茶巾型のバックを振り回しながら「頑張るぞー、お見合い！」と着物にも関わらず大通りまで走り、タクシーを拾い、待ち合わせ場所へ向かった。

＊　空は、いつも何も言ってくれないけど、空は、いつも見ていてくれる　＊

（31）比奈子、お見合いへ行く3

「ただいま…」
豊が玄関を開けると、その音に、バタバタと恵子がやって来た。
豊が由美子を紹介し、五郎太の待つ茶の間へと案内した。
「いつもいつもこのバカ息子がお世話になっております」
と、五郎太は頭を下げ、顔をあげつつ、視線は由美子の胸にいった。
豊かと同じ血の通った親子である。

ちゃぶ台を真ん中に、かしこまって座ってしまう四人。
豊が過去に連れてきた彼女はいたが、そのころはまだ学生でそれなりの付き合いだろうという思いで紹介されていたため、緊張も何もなかったが、
すでに社会人の二人は、『付き合う＝両親に紹介する＝結婚』を前提、という構図がおのずと考えられるので、五郎太と恵子は、妙に構え、今までに味わったことのない緊張感の中、体が固まってしまっている。
正座などめったにしない恵子は、もぞもぞ動き、顔が引きつる。
シーンとしてしまい、いつもの前田家ではありえない静けさだった。

最初に口を開いたのは由美子だ。
「あっ、さっき、そこで比奈子に会ったんですよ」
比奈子…
比奈子と言う名に、3人は、肩を落した。
「……えーと、比奈子のお見合い相手、イケメンって言ってました！」
由美子が元気よく言った。

比奈子、見合い、イケメン……
「「「……」」」
由美子は、俯いている三人を見渡し、声にはせず下を向いて、少し笑った。

「あっ、そうだわ、お茶、お茶。私ったらボーっとしちゃって、ごめんなさいね、由美子さん」
恵子が思い出したかのように立ち上がったが、足が痺れてヨロヨロとし、五郎太に体をあずけるように倒れ、一緒に倒れた五郎太の顔に恵子のお尻が乗っかった。
「か、母さん…重い…苦しい…」
「なにやってんだよ、おふくろ」
「だ、だって足が痺れて動けないのよ…」
「た、すけ…ろ、豊…」
苦しがる五郎太の上から退こうとしない恵子に、豊が立ち上がり、恵子をどかした。
その光景にいきなり由美子は笑い出し、止まらなくなった。
由美子の笑い声に三人とも笑い、いつの間にか緊張は、ほぐれていった。

☆☆☆☆☆

比奈子がお見合い場所である美術館内のカフェに着くと、菊池はすでに座っていた。
スーツを着たスマートな出で立ちで足を組み、中庭を眺め、コーヒーを飲んでいる。
確かにカッコイイ。
菊地らしき男を見つけた比奈子は一瞬足を止めたが、すぐに歩き始

め、声を掛けた。
「菊池さんでいらっしゃいますか？」
「ええ、菊地です。比奈子さんですか？」
菊池は比奈子を見上げ、きれいな微笑みを見せた。

☆☆☆☆☆

前田家の茶の間には、笑い声が渦巻いていた。
「――そしたら比奈子が、その男に蹴りを入れて、人に迷惑かけんじゃねー、
　って怒鳴ったんです～きゃはは～」
由美子はなぜか、比奈子の武勇伝を次から次へと語り、その話に前田一家はお腹を抱えるほど笑っていた。

そして、由美子はまた思った。
「なんで比奈子の話は盛り上がるんだろう……？」

（32）比奈子、お見合いへ行く4

小鳩家から少し離れたところでタクシーを降りた比奈子は、振袖を着たまま、忍者のように辺りを見回し、吉田のおばちゃんに見つからないように、コソコソとご近所の塀に引っ付くように小走りで自宅へ入った。

「ただいま…、つかれた…」

リビングのドアを開けると、ソファに志乃が座っていて、声に疲れがハッキリと出ている比奈子は、そのまま志乃の横に倒れこんだ。

「あれ！？　もう帰ってきたの？　まだ五時前よ？　ディナーしてくんじゃなかったの？」

志乃は、やつれかけている比奈子の顔に驚いた。

見合いの待ち合わせ時間は、午後二時だったはず、往復の交通時間を入れて計算すると、菊池と会っていた時間は一時間半にも満たない。

リビング続きの畳部屋にいた恒和が飛んできた。

「比奈子！　よく無事に！！」　涙目だ。

「あれ、お父さん、今日競馬じゃないの？　最終日じゃん？」

ソファの上で、ダレたまま訊いた。

恒和は、比奈子のことが心配で競馬どころではなく、比奈子が出て行ってから部屋の中をうろうろ歩きまわり、志乃に「目障り」と畳部屋に押し込まれていた。

「ちょっと、もう、聞いてよ～」

ソファの上に寝転がった上体で、手足をバタつかせ、比奈子は見合

い相手菊池の話を始めた。

カフェで菊池を確認した比奈子は、一瞬足を止めた。
なぜなら、コーヒーカップを持つ手の小指だけが「ピッ」ときれいに上を向いていた。
気にはなったが、別に大したことでは無いと、気を取り直し、声を掛けた。
ニッコリを微笑む菊池は、紳士的なステキな男性。
向い合うように座った二人はお互い自己紹介をし、菊池の趣味がスキーやスノボーなどウインタースポーツということがわかると、意気投合したかのように見えたが、比奈子がスキー場で失敗した面白い話をしたとき、菊池が笑ってくれた。
愛想笑いではなく、ありがたいことに、心の底から笑ってくれた……。

「んでね、お母さん。笑ってくれたんだ、菊池。でもね、それがね」
すでに菊地と呼び捨てなのだが、そのまま話し続けた。
「それがさぁ…」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「――――ってなわけなんですよ～、菊地さん」
比奈子は、菊地に、楽しそうに言った。

「おーーっほっほっほっほぉっぉ～、おもしろいぃ～」
手を口の横に当て、大笑いをする菊地に比奈子の顔が固まり引きつった。
……ぇ？　おほほ？　……おほほ、って…？　…きくち、さん…

そして菊地は、ポケットから白いレースがついたハンカチをだし、
また口に当て、うふふと笑った。
う、うふふ～…って…？

そして比奈子は、見てしまった。
ハンカチの端にピンクの糸で刺繍されていた、「のりまさ」という
文字とハートマーク。
「……え？」
この人……

人様の趣味趣向にとやかく言うつもりはないが、比奈子は、大打撃
な眩暈に襲われつつも、頑張って相手に合わせていた。
が、時間が経つにつれ、無理だった。

なぜか常に小指を立てている。
静かな美術館のカフェにこだまする「おっほっほほ～」という高笑
い。
他のお客の視線が痛い。
口元を隠すようにあてるレース使いの白いハンカチ。
組まれた足は、少し横に傾けている。

見かけは美男子なのだが、比奈子には、この菊地則政は、もう、ホ
モオ田ホモ男にしか見えない。
ホモオ田ホモ男が悪いんじゃない。
よく言えば、彼は繊細な人なのだ。
心が素直なだけなのだ。

極めつけに自慢された。
『世界一、いや、この世の人とは思えないくらい、美しくて素晴ら

しい女性を僕は知っている』
それは、菊地ノリコ、菊地の母親、その人らしいことが、わかった。

この人は、母親思いなんだ。
そうなんだ、そうに決まっている…
自分の母親なんだもん、愛していて当たり前だよね？
私だって、あんな父・恒和だけど、好きだもん。
きっと、菊地さんってやさしい人なんだ。

そう思おうと、努力した。
比奈子は頑張った、よく頑張った。
だけど…
もう、無理です…私には無理です…吉田のおばちゃん、ごめんなさい。
心の中であやまった。

お茶をしたあと、絵を見ることになり、広いロビーに出たが、菊地が母親に報告すると言い、携帯を掛けだした。
「あ、ママ、うん、大丈夫だよ？　かわいらしい人だよ。
うん、え？　ん～、でもママはかわいいんじゃなくて、綺麗なんでしょ？
そんなの比べられないよぉ」
「……（なんなんですか…その会話は…）」
少しだけ離れたところで耳をダンボにしていた比奈子は、聞こえてくる菊地の口調と内容に、自分の顔がハニワになった感じがした。
感情もなにも今の私には残っていない…
魂が離れていく感じがするんですけど…

「うん、わかってる。ちゃんと寄り道しないで帰るから、うん、じゃぁねママ」

電話を終えた菊地は、比奈子のところに来た。

「では、比奈子さん、絵画の鑑賞でも参りましょうか」

静かな美術館だが、日曜日ということで、結構な入場者があり、みなじっくりと絵を楽しんでいる。

比奈子は、菊地の後ろに付いて、第一コーナー辺りから、三歩進んで二歩下がる作戦で、菊地との距離を少しつづ離した。

菊地は絵に夢中で、比奈子の存在を忘れたかのように、一点一点の作品を自分のペースで見て行く。

菊地が第二コーナーを回った辺りで、比奈子は姿をくらまし、急いで美術館を出て走った。

走りづらいので着物の裾を捲って、大股で美術館からなるべく遠くまで離れた。

吉田のおばちゃんには、いろいろと言い訳して断ろう…。

豊のお母さんにもせっかく振袖着せてもらったのに…。

比奈子は、一人ゲームセンターに入り、振袖を着た記念にプリクラを撮った。

一応笑顔でピースサインのポーズ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「……と言うわけなので、吉田のおばちゃんに適当に断ってぇ～、おかあさーん」

比奈子は志乃に拝み頼んだ。

「んがっはっはっはっはぁあああ～～～」

見合いがうまくいかなかったことに大喜びの恒和は、一人ご陽気に

大笑いをしたが、
比奈子が嫌な思いをして、疲れてヨレヨレで帰って来たのに、「不謹慎だ」と、志乃にベランダに追い出され、内側からカギを掛けられ、しばらくの間、中には入れてもらえなかった。

ちなみに、この日の小鳩家の夕食は、顔から笑いが取れない恒和が「祝い寿司」と称し、三人で行きつけの高級すし屋に足を運んだ。

☆☆☆☆☆

前田家は、由美子を含め、一男、浩司も揃い、６人で店屋物で食卓を囲んだあと、
豊が、由美子を車で送りとどけ、家に戻って来たのは、１０時を回っていた。

ベッドの上に寝転び、携帯を開いた。
発着信履歴から比奈子の名前を押すが、コールボタンは押せず、携帯を閉じた。
が、また開き、閉じた。
パタパタと幾度となく繰り返し、もう一度携帯を開き、少し澄ました顔の比奈子の顔写真をジッと見て、呟いた。

俺、何やってんだ？
俺には由美子ちゃんがいるのに…

＊　切ない気持ちに気がつくと、もっと切なくなってどうしようもなくなる　＊

（33）切ない苛立ち1

「いよっ！　おっちゃん、豊！　ちゃんと働いてる？」
「おう、比奈ちゃん、久しぶりじゃないか」
「うん、ちょっと忙しかった」
比奈子はいつも作業場の出入り口で二人に声をかけ、中には入らず、その場で二人の背中を見ながら会話をする。

「豊、由美子がここに遊びに来てから、会ってないんだって？　由美子が言ってた」
「ん、ん…、小鳩縫製さんのプレスが山のように入って…時間がねーんだよ！」
手を休めることなく、豊は比奈子に背を向けたまま答えた。
「悪いねぇ～、でもさぁ、クリスマスとかどっか連れて行ってあげなよね、
　クリスマスなんて女の子にとっては最高のイベントだよ？」
「わかってるよ、そんなことおまえに言われなくても。
　俺と由美子ちゃんのことだ、関係ねーよ、比奈子には！」
豊は声を少し荒げた。

「ぅん…ごめん」
豊は、比奈子の「ごめん」と言う言葉を何度か聞いているが、普段の比奈子からは想像できないくらい素直な声になる。
そのたびに豊の心は切なくなる。
下を向いたまま、アイロンを持つ手に力が入った。

五郎太は、比奈子に対していつもと違う棘のある言い方をする豊を、ふと見たが、さっきから同じ服の袖の部分だけに蒸気を当ててはアイロンをかけ、蒸気をあててはアイロンをかけ、を繰り返している。

このままでは、服がテカテカになってしまう。
「おい、豊？」
五郎太に指摘され、気がついた豊は無言のまま次のプレスに入った。
「比奈ちゃん、お見合い相手とはどうなってんだ？」
五郎太が比奈子に投げた問いに、豊の手は止まり、アイロンはシャツの上に乗せられたままだ。
「ん？　お見合い相手？　んふふ…まぁね、いい感じかな？」
言えるわけがない、話したくもない…菊地則政のことなど。
引きつった顔の比奈子は、笑ってごまかした。

五郎太の手が豊の手を叩いた。
もう少しでシャツを焦がすところだった。
お客さまのシャツを焦がすなど、クリーニングのプロとしてあってはならないことだ。

「そうかぁ…結婚とかしちゃうのかぁ、比奈ちゃん…」
五郎太が淋しそうな声で言った。
「結婚？　あはは、結婚は、豊と由美子のほうが先なんじゃない？」
「由美子さんは、いい人だったが、クリーニング屋の嫁って感じじゃないわな」
「どうして？　働き者だよ、由美子は。あっ、料理も上手！」
「ん、由美子さんに店番してもらったら、大変だろうなぁ、男性客増えちゃって」
五郎太がニンマリ笑って振り返り、比奈子を見た。
「あっ、おっちゃん、やらし～。由美子の胸のこと言ってんでしょ！
この家にお嫁に来たら四人の男の視線を毎日気にして生活しなきゃなんないのか、
それはそれで大変だ、由美子」

あはは、と五郎太と比奈子が笑い合っていると、豊が突っかかるように、比奈子に言った。
「おまえ、今日何しに来たの？　お茶飲むならとっとと茶の間行けよ」
「ん？　今日はね、クリーニングお願いした着物取りに来ただけ。もう、帰るから…」
「あの着物、いい着物だったね～。お母さんのお見立てか？」
五郎太が褒め称えた。
「うん、成人式の時、買ってもらった」
志乃が知り合いの着物デザイナーに頼み、金沢で特注した一点ものだ。

「毎度～、って、比奈子ちゃん、来てたんだ」
慎太郎が配達途中の暇つぶしにやって来た。
「おもてのＢＭＷ比奈子ちゃんの？」
「お母さんのだけど、ちょっと借りてきた。じゃ、私は帰りま～す」
「え？　もう帰っちゃうの？」
慎太郎が残念そうに言う。
「うん、このあとちょっと行くとこあるから。じゃ、また来るね」
比奈子の言葉に豊は振り向いたが、もう比奈子の後姿しか見れなかった。

「すっげーな、比奈子ちゃんち、あのＢＭＷ一千万以上するやつだぜ！」
慎太郎は外で見た比奈子のＢＭＷの話をした。
「自転車だろ？　なんで一千万もすんだよ」
「自転車じゃねーよ。車だよ、外にあったの車！
比奈子ちゃんの家って、ちっせー縫製工場なんじゃないの？　豊言ってじゃん？」

「無理して買ってんじゃねーの？」
「そうなのかなぁ…、にしては、すげーよなぁ」
腕を組みをしたまま慎太郎は考えたが、今日来た目的を思い出し豊に話した。

「そうだ！　さと兄が、クリスマスパーティやろうって」
「ぁあ！？　いい歳してクリスマスパーティもねーだろ。
毎年、さと兄を除いた俺たちは「お春」で集まってたじゃん？」
毎年イブには代わり映えのしない面子、男四人で地元商店街の「お春」で飲み明かしていた。
さと兄は、毎年２４、２５日と違う女と二日間を過ごしていたが、今年は本命中の本命、絹子がいる。

「あっ、比奈子ちゃんにも言っとけばよかった、まっ、絹子ちゃんから連絡いくだろうけど」
「比奈子も、比奈子たちも呼ぶの？」
「うん、さと兄が――――――――」
さと兄は、２５日、夜景の見えるホテルをキープしてあり、絹子と過ごすつもりだ。
２４日も絹子と一緒にと考えていたが、絹子に、イブはみんなとパーッと盛り上がったら楽しいんじゃない？　と言われ、２４日の夜は、例の１０人でクリスマスをやる企画を考えた。さと兄は絹子のいいなりだ。
クリスマスパーティーの場所は「お春」。

「豊、２４日とか由美子ちゃんと約束してたのか？」
「ん？　別に？」
「おまえなぁ、クリスマスだよ？　彼女がいるのにクリスマスイベント無視すんなよ。
じゃ、さと兄みたいに、２４日はみんなと過ごして、２５日に由

美子ちゃんと二人っきりで過ごせ」
慎太郎が壁に掛かっているカレンダーの数字を押さえながら言った。

「なんで慎太郎が、俺のクリスマスを仕切る？」
「あっ、おまえプレゼントとかも考えてないだろ！　男としてサイテーだよ、それ。
　ちゃんと由美子ちゃんに、何がほしいか聞いて用意しろよ？」
一人でさんざんクリスマスの日にあるべき男と女を語ったが、配達途中であったことを思い出し、由美子に連絡しておけと言い残し、すっとんで出て行った。
こんな慎太郎は、女性と二人でクリスマスを過ごしたことが、残念ながらない。
耳年増の男バージョンである。

「なにがクリスマスだよ…」
ボソッとつぶやく豊に、ワイシャツを入れるビニールをいじくりながら、五郎太が言った。
「おまえ、最近変だぞ？　由美子さんが来た日くらいからか？
　そういえば、あの日は、比奈ちゃんの見合いの日でもあったなぁ、
　ほんとに見合い結婚しちゃうのかな、比奈ちゃん…」
豊は何も答えず、ただアイロンを掛け続けた。

（３４）切ない苛立ち２

「さっき、絹子からも電話来たけど、私はパス」
「２４日は毎年かえで学園でクリスマスだもんね、比奈子は」
「うん、お父さんもお母さんも行くし、子供たちも楽しみにしてるから」
豊から２４日のクリスマスパーティの連絡をもらった由美子は、比奈子に電話をした。

比奈子は毎年１２月２４日は、「かえで学園」のみんなとクリスマス会を開いている。
恒和と志乃も、沢山のクリスマスプレゼントを持って一緒に参加していた。
恒例になっているのは、志乃がサンタクロースのコスプレで、恒和はトナカイの着ぐるみを着て「かえで学園」に登場することだ。
大概の子供たちは、プレゼントを持っているであろうサンタクロースの志乃に人気が集まり、トナカイの着ぐるみの恒和は、幼稚園児までの小さい子供たちにいじめられてクリスマス会を終える。
「来年こそは、かえで学園でサンタクロースになる！」という思いを抱いたまま数年経っている。
この先も、サンタクロース役を恒和に譲る気は、全くない志乃の心を、恒和は知らない。

「ねぇ、比奈子、２５日はどうするの？」
「家にいるよ。家族でクリスマス会よ…。お父さん、サンタクロースになるんだもん、毎年…」
「きゃっははは～、園でサンタクロースになれないからって、おじさん、おもしろすぎ！
　でもさぁ、比奈子？　いいお父さんとお母さんでよかったね」

由美子がやさしく言った。
「うん！　ありがとう。あっ、由美子は２５日は豊とでしょ？」
「ん？　あぁ、まぁね、なんかレストラン予約したって、さっき言われた」
「そっか、ちゃんと考えてんじゃん？　天パーも！
あ～、私も来年は、男と二人でクリスマス過ごした～い」
と、言っては見たものの、恒和がいる限り無理なような気もする…
と、比奈子も由美子も思った。
「またお見合いでもする？　でもさ、何回聞いても笑えるよね、あのお見合い話」
由美子が比奈子の見合い話に笑い転げる。
「もう、お見合いって聞いただけでトラウマになってる…」

比奈子は、由美子との電話を切り、携帯を開き直し、「天パー」の名前を探す。
「別に用事もないのに掛けたらおかしいよね…何やってんのよ、私…」
「天パー」の文字を見ながら、一人言を言っていたら、急に携帯が鳴り、驚いた比奈子は、携帯を放り投げた。
「うわっ、うわぁ～びっくりしたぁ」
コールの続く携帯を拾い上げ、表示を見ると、「天パー」と出ている。
ドキドキしながら、ＯＮを押した。

「もしもし…？」
心臓の動きとは逆に、静かに声を出した。
「あっ…比奈子？」
「う、うん。どうしたの？」

クリスマスパーティーの話だった。
人数確認で、さと兄に報告するために電話をしたと豊は言った。
が、本当は嘘だ。
口実を作って比奈子の声を聞きたかっただけだ。
比奈子は、２４日は「かえで学園」に行くので、パーティには参加できないと伝えた。

「ねぇ、２５日、由美子と過ごすんだって？　由美子喜んでたよ？　ふふふ」
「…ん、今日の夕方レストランに予約入れたんだ。まだ席少しだけ残ってた…」
「そっかぁ～、うらやましいなぁ、恋人とクリスマス！　あっ、ねぇねぇ、知ってる？
イブから２５日に日付が変わって、一番最初に『メリークリスマス』って言い合った二人は、
仲良しになれるんだって！」
比奈子は元気に言った。
「ははは、仲良しって…子供じゃねーんだからさぁ。『恋人同士になる』くらい言えよ」
「それだと、恋人同士が言い合ったら、意味ないじゃん？」

豊が、少し弱い声で訊いた。
「おまえ、見合い相手…と？　２５日…」
「ん、んー、ご想像におまかせします！」
「なんだよ、それ。あっ、イケメンなんだろ、そいつ」
げっ、菊地政則の話はしたくない…。
質問しないでほしい。
思い出したくない。
絶対笑われる…きっと豊は死ぬほど笑うに決まっている。

「あっ、忘年会やろうよ！　ぼーねんかい！」
比奈子は話題をかえようとした。
「なに、話ハグらかしてんだよ！　どんな、ヤツ…だった？」
「……ぇーと、」
比奈子はしぶしぶ菊地則政の容姿と経歴を話したが、中身は、自分の好きな俳優を想像し、話を作った。

「で、雨で水溜りがあったのね、そしたら、着物着てるからって、私をヒョイッて持ち上げて…
　くれた…」
「へぇ…そう、なんだぁ…」
あの日の前日も、当日の朝も昼も雨など降っていない、さわやかな青空の日だったはずだ。
にも、関わらず、豊はベッドに寄りかかったまま声を落した。
気づいていない。

「なんか、おまえにもったいなくない？」
「ちょっと、それどういう意味よ！　私にぴったりじゃない！」
「はっ、比奈子おまえ猫かぶってたんだろ、見合いで。
　じゃなきゃ相手が逃げてくって、比奈子相手にすんの大変だもんなぁ」
「はぁ？　なんかそれムカつくんですけど！
　相手の人なんて私に夢中で、ぜひお付き合いを！　って、向こうから言ってんだからね！」
想像の中の見合い相手は、好きな俳優だ。
妄想は膨らんでいく。

「……じゃぁ、付き合うんだ…？」
「そうよ！　お父さんもお母さんも気に入ってるし！
　婿養子で構わないって言ってくれてるし。最高でしょ？　条件ぴ

ったり！」
「…よかった、じゃん……、…、…、…あっ、キャッチ入った」
「あ、じゃぁ、私、切るね」
別に構わないと、豊はあせって言ったが、比奈子は、先ほど由美子が言っていたことを思い出した。
「２４日は比奈子は来れない」ということを、シャワーから出たら豊に電話すると言っていた。
「もしかして、由美子じゃないの？　キャッチ」
「ぇ？　そう、だけど」
「じゃ、出なさいよ。んじゃ、私は切るからね！　バイバイ！」
プチッと比奈子の電話の切れた音がした。

すでにキャッチで入っていた電話も切れていたが、由美子に折り返してかける気にもなれず、豊はストラップの部分を握ったまま、携帯をぶら下げ、ボーっとした。

＊　好きな人の声は、受話器の向こうにいても暖かくを感じる　＊

（35）女四人の思い

日曜の昼、「かえで学園に行くから」と、来なかった比奈子を除いた女四人は、渋谷のカフェでランチをしていた。

「由美子、豊くんの家族に紹介されたんだって？」
晶子が訊いた。
「そうよ。その日さぁ、比奈子のお見合いの日で、豊くんのお母さんに着物着付けてもらってた
比奈子と偶然あったんだけど、お見合いのこと豊くん全然知らなかったみたいで、びっくしりて
た」
由美子は、サラダのレタスにパクついた。

「それで？　由美子は、真剣に付き合ってんだ、豊くんと」
澄江に訊かれた。
「んなわけないじゃん。私に興味ない人とどうして付き合うのよ」
眉間にしわを寄せ、唇を尖らせ由美子は三人を見た。

「ぇえ！？　じゃぁ、遊びなの！？」
「どういうこと？」
「豊くんが由美子に興味がないって？」
矢継ぎ早に三人に言われた由美子は、ほくそえんだ顔で問い返した。
「ねぇ、みんなは、何も思わないの？」

「「「何を？」」」
「比奈子と豊くん見てて！」
四人は顔を突合せた。

「思う…すんごく思う！」
絹子が手を上げて言った。

「私もわかってる！　でも由美子が豊と付き合い始めたから、それでいいのかと思ってた」
晶子が、言った。

「私も気がついてる。比奈子、いっつも普通に、由美子と豊くんに接してるけど、
　時々せつない顔すんだもん…こっちまで悲しくなっちゃうくらい」
澄江はそう言うと、食事の手を休めた。

「本当はね、私も――――――――」
由美子が、姿勢を正し三人に話しだした。

コンパで初めて会ったとき、由美子が豊を気に入ったのは事実だ。
比奈子に確認をとると、「自分は豊のことなんて好きじゃない」と言った言葉を信じ、
比奈子にキューピット役を頼んだ。
とりあえず、豊と付き合うようになった由美子は、デートを重ねていくうちに、豊の心が自分にないことに気がついた。
男経験豊富な由美子の直感だ。

『なぜ、豊くんは自分と付き合っているのか』疑問だった。
目的は私の胸？　とも思ったが、体の要求もない。
毎回会うたびに、比奈子の話をすると豊は、楽しそうに笑うが、由美子の身に起こったことを話すと普通に受け答えをしてくれる。けど、本当に普通に世間話を聞いている感じだった。
豊自身も話すことといえば、比奈子が前田クリーニング店に来たと

きの話をする。
由美子も比奈子の話をすること自体、億劫でも面倒臭いとも思わない、楽しく話せるが、比奈子を語る豊のうれしそうな姿を見ていると可笑しくなった。
由美子は気がついた。

『豊くん、比奈子のことが好きなんだ』
『豊くん、比奈子への自分の気持ちに気がつかないまま、私が「付き合ってほしい」と言ったことで、「とりあえず」的に付き合ってしまったのね…豊くんのお馬鹿…』

由美子は、会うたびに比奈子の話しばかりをし、豊の反応が面白く、遊んでいたのもあるが、
「早く気づけよ！　鈍感豊！」と、苛立ってしまうこともあった。
最近、比奈子の見合い話で落ち込み、自分の気持ちに気づき始めている豊だが、
勇気がないのか、突っ走れない。

由美子は、比奈子の気持ちも確認しようと、遠まわしに豊の話をふったり、メールでデートの結果報告をしたりして様子を見ていた。
メールの返事も、会話の中の言葉も、由美子と豊の恋を応援している内容だった。
比奈子も豊を気になっていると確信したのは、豊をかえで学園に連れて行き、比奈子の出生のことを話したと聞いた時だ。
かえで学園のことを知っているのは、友人でも由美子たち４人とわずかな人だけ。
そんな簡単な話でもないし、何年も付き合いのある人間でもない豊に話すということは、余程、豊のことを信用しているんだと、思った。

「豊くんは、たぶん、私にも悪いと思ってると思うんだ。
比奈子のことが好きと気がついたから私と別れたい、なんて言える性格じゃないし」
由美子は、困った顔をした。
「じゃ、由美子が豊くんを、振ってあげるとか？　一番簡単じゃない？」
澄江が言ったが、由美子が首を振った。
興味もない自分と付き合っている豊をいっそのことフッてしまおうかと由美子も最初考えたが、
振られたからといって、すぐに比奈子に告白するような豊でもない。
へたをすれば、一生言い出さない可能性も無きにしもあらず。
比奈子も「由美子のことが好きなのに振られた豊」と考えてしまい、豊の本当の気持ちなんて知る事もないだろう。

「だからね、比奈子のことを考えると、私が振られなきゃ、意味がないのよ！」
わかってくれるかしら、みなさん…と、腕の上に胸を乗せるような感じで腕を組み、由美子は、三人の顔を見ていったが、三人の視線は、うらやましげに、胸にいく。

「それで、いつくらいに振られそうなの？　由美子は」
「あと、もうちょっとなんだけどね」
絹子に訊かれ、由美子が問い返したが、澄江が眉をゆがめて訊いた。
「でもさぁ、もしも、豊くんが由美子を振らなくて、ズルズルこのまま付き合っていくようなことに
なったら？」
他の二人も心配そうな顔で由美子を見た。

「んん？　まぁそれはないと思うの。豊くんが比奈子への募る想いを我慢しきれなくなって、
私を振るのは、クリスマスあたりかな？　作戦は一応考えてあるし。
だいたいさぁ、この由美子さまのバストを見ててもホテルにも誘わないんだよ？　豊くん！
今までの男では考えられない人種よ、ちょっとおかしんじゃないの？」
ぐふふ…と笑った。

「豊くん、それだけ比奈子が好きってことかな？」
「比奈子もさぁ、恋には奥手だからねぇ。まぁ、そこがかわいいんだけどね」
「じゃぁ、比奈子の恋の行方は、由美子にまかして、私たちは見守りましょう～」

「任せてちょーだい！」
四人でアイスティーのグラスを持ち上げ、乾杯した。

＊　女同士、本当の友情は、仲間がしあわせなら、自分もしあわせになる　＊

（36）カレーとお粥1

ピロリロリ～ン、ピロリロリ～ンと店先のチャイム音を鳴らし、比奈子が前田クリーニング店に足を踏み入れた。

「いらっしゃ、」

「あれ、由美子…？」

受け渡しのカウンターに由美子が立っていた。

「比奈子！」

「どうしたの？　由美子手伝いに来てんの？」

比奈子が驚いたように訊いた。

土曜日の今日、２４日のクリスマスのことで午前中に豊に電話を入れた由美子は、恵子が風邪で寝込んでいることを知らされ、パートの女性も休みのため、店番と作業場と両方の仕事で忙しく、夜電話すると豊かに言われ、今日は仕事が休みなので、自分でよければ手伝いに行くと言い、午後から来ていた。

「え、おばちゃん風邪なの？」

驚いた比奈子は、由美子との話半ばで、豊たちの作業場を通り越し、勝手に恵子が休んでいる部屋に向かった。

ふすまをバーンッと、開けると恵子が額に冷却シートを張り、赤い顔をしていた。

「大丈夫！？　おばちゃん！？」

比奈子は駆け寄り、枕元に座った。

「あ、比奈…ちゃん…ゲホッゲホッ」

と、咳をしながら、体を起そうとした。

「ダメだよ！　寝てなきゃ！」

バンッと、力づくで恵子のことを押し倒し、寝かせた。
「……ボ…ソッ…」
「え？　何？　おばちゃん！」
耳を近づけると、恵子が言った。
「頭がね…クラ…クラ」
「ええー！　クラクラするの！？　じゃ、ちゃんと寝てて！
お店は由美子が見てるから大丈夫だよ！　私は夕飯とか作るね！
おばちゃんには、お粥作るから！　家のことは心配いらないからね！」
「…あ、ひな…ちゃ…」
一方的に喋り、あせり、恵子の呼ぶ声など聞かず、比奈子は、バタバタと部屋を出て、
茶の間に行った。
恵子の頭がクラクラしたのは、風邪のせいではなく、比奈子が押し倒した衝撃の所為だ。

時間は、まだ午後三時を過ぎたばかりである。
比奈子は茶の間に突っ立ったまま、腕組みし考えた。
「夕飯、何作ろう…」
料理などしたことなど無いに等しい比奈子は、夕食メニューを考えた。
一番簡単なもの…
「よし！　カレーだ！　キャンプで作ったことがある！」
気合は入るが、キャンプに行ったとき、比奈子は「蒔き拾い係」で、カレーなど作ってはいない。
冷蔵庫の中を見ると、なんとなくカレーに入れても良いような食材があった。

が、カレールーがどこにあるか、わからず、買い物に行くことにした。
また作業場を素通りし、店にいる由美子に「夕食作るからカレー粉買って来るね～」と、由美子が呼び止める間もなく出て行き、「ただいま～」と、由美子が呼び止める間もなく、作業場を素通りし、台所に行った。

6時を過ぎる頃、豊が由美子の所に来た。
「由美子ちゃん、ごめんね。土曜日って、受け渡し忙しいだろ？慣れてないのにごめん。
もう少しで店閉めるから、そしたら、店屋物取るからご飯食べてってよ」
「ううん、全然構わないんだけど、比奈子大丈夫かな？」
「比奈子？」
豊が不思議な顔をした。
「3時ごろ比奈子が来て、夕食作るって今、キッチンにいるはずなんだけど？
会ってない？」
「はぁああ！？」
目を丸くした豊は、急いで台所に向かった。

（37）カレーとお粥2

「比奈、……」
台所の入り口で豊は立ち止まった。
比奈子は、ゴム手袋をはめたまま包丁を持ち、まな板近くに顔を寄せ、猫背な体勢でニンジンを切っていた。
作り始めたのは、四時ごろだが、まもなく六時半、いまだ野菜を切っている。

「あ、豊…」
比奈子が振り向いた。

豊はシンクのところまで来て、眩暈がした。
シンクの上も、流しのところもグチャグチャである。

「今日ね、カレー～」
陽気に言った比奈子の切ったであろうジャガイモを、豊はつまみあげた。
「……これ、なに？」
「ジャガイモ～、今、ニンジン切ってる」
一生懸命、皮も剥かずに分厚く丸のままニンジンを切る。
ジャガイモは、極小サイズになっており、三角コーナーには、身が沢山ついたままのじゃがいもが、捨てられていた。
「このジャガイモ、北海道の親戚から送られてきて、スンゲーうまいヤツなんだけど」
「そうなの？　っていうか、話かけないで。料理中だから」
ニンジンを丁寧に丁寧にゆっくりと輪切りにしている。
野菜の入ったボールの中には、ピーマンや皮を削いでいないゴボウのブツ切りもある。

カレーの具材ではないような気がするものが、たくさん入っていた。
「……あのさ、」
「なにっ！　うるさいなぁ、話しかけないでよ、手元が狂うから！」
「じゃ、ちょっと手休めて」
豊に言われ、包丁を置くと、面倒くさそうな顔で豊を見た。
「な～に？」
「おまえさぁ、何時から作ってんの？　で、なんでゴム手袋して野菜切ってんの？」
「四時くらいから！　で、手袋は包丁が危ないから！　もういい？　邪魔だからどいてよ」
比奈子はそう言うと、また包丁を握ろうとしたが、豊が比奈子の手を掴んだ。
「比奈子…俺が作るから、カレー。おまえはそこで見てろ！」
「いいわよ、私が作るんだってば！　豊、まだ仕事中でしょ？」
「おまえのカレー待ってたら明日になるよ、いいからどいてろ」
豊は、比奈子を横に退かし、手を洗い、包丁を握った。

「ふ～ん、上手なんだね？　豊って」
起用に手際よく野菜を切っていく豊に感心していた。
「普通だろ？　これくらい」
「普通かぁ…」

自分の出番はなさそうなので比奈子は、「じゃぁ、ちょっとおばちゃんの様子見てくる」といい、
ゴム手袋を外した。
「……な、なんだぁ？　おまえ、その手！」
比奈子の手を見た豊は、包丁を置き、比奈子の両手を掴んだ。
両方の指のほとんどに、絆創膏が巻かれている。
「だから、包丁危ないんだって。あっ、血が付いた野菜はちゃんと

洗ったから大丈夫だよ？」
「……いや、そういう問題じゃなくて、なんで右手も怪我してんだ？
どーゆー切り方したら、そーなる！？」
「普通に切ってたらこうなったんだけど…、まぁ、とりあえず、おばちゃんの様子見てくるね！」
豊は溜息をついて、呆れた顔のまま台所を離れる比奈子を見送った。

バタバタと恵子の所へ向かう比奈子を見て、可笑しくなり、肩を揺すり笑ったあと、野菜を切り始めたが、ガス台の上に、白いドロドロのものが溢れた跡がある鍋に目をやり、蓋を取った。
「なん、なん、なんなんだぁ！　このドロドロの液体は、毒薬か…あいつは魔女か」
少し焦がしてしまい黄ばんだお粥だ。
恵子のために作ったのだろうが、こんなモノを食べたら余計熱が出てしまう。
「はぁ…ったく、しょうがねーなぁ」
鼻で笑いながら、豊は鍋の蓋を閉じた。

（38）カレーとお粥3

「あれ？　豊くん？　比奈子は？」
「もう、上がっていいよ」と、五郎太に言われた由美子が、比奈子の様子を見に来たが、台所にいたのは豊だ。

「比奈子、今、おふくろのところ行ってる」
「あっ、じゃぁ、私が作る……」
と言いかけた由美子は、シンクを見て溜息をついた。
「もしかして、これ……比奈子…？」
「あぁ、まだ野菜切ってる段階だった」
二人で大笑いし、由美子と作ることになった。

由美子は少しホッとしたと、豊に言った。
比奈子の手料理を食べなくて済む。
高校の家庭科の授業で、日本食を作った時、比奈子がいたグループは、腹痛を起こし、翌日、そのグループが全員休んだことがあった。
素材が悪かったとか、菌があったとかではなく、比奈子がオリジナルで作ったと言う煮物が原因であった……と、比奈子以外のクラスメイト&先生は思い、それ以降の調理実習の比奈子は、洗い物担当になったという。
その話に爆笑した豊だが、由美子同様、比奈子に作らせないでよかった…と、心から思った。

台所に戻ってきた比奈子は、二人が仲良く並んで、笑い合っている姿に声をかけず、少しだけ目を伏せ、作った微笑みはすぐに壊れ、そのまま五郎太の所に行った。
自分の昔話で笑い合っているなどと、知る由もない。

「おっちゃ～ん」
「うぉっ、なんだ比奈ちゃん！　来てたのか？」
比奈子が来ていたことなど、全く知らなかった五郎太は、驚いたが、うれしそうに笑った。
「うん、おばちゃんの様子見に来た。でももう熱も下がってきたし、今、由美子がカレー作ってくれてるから……私、帰るね～」
「由美子さんが？　夕食？」
「うん、豊と作ってる！　新婚さんみたいだったぁ！」
元気よく、笑顔で言った。

「えっ？　あー、比奈ちゃんも食べて行くだろ？　晩ご飯」
「ううん、私は、家に帰んなきゃ、お母さんたち待ってるから。また来週来るね」
「比奈ちゃん……？」
五郎太が引き止めようとしたが、足早に前田家をあとにした。

「冬場の自転車は、寒くて辛いなぁ～鼻水まで出てくるんだもんなぁ～」
寒さから来たものなのか、別の思いから来たものなのか、比奈子は、少し赤くなった鼻をすすりながら、自転車をこいだ。
寒いからではないことは、自分でよくわかっている、見えるモノ全部が涙で歪んで見えていた。

そして、家の近くのコンビニに寄り、から揚げ弁当を買い、明かりの点いていない家に帰った。
恒和と志乃は、パーティに行っているため、今日は一人での夕食だ。

五郎太が店を閉め、茶の間を通り台所にいる由美子に声を掛けた。
「由美子さん、すみませんね、店を手伝ってもらった上に、夕食の仕度まで」
「あ、いえ、比奈子が、途中まで作ってくれてたから、…比奈子…は？」
由美子は豊に訊いた。
「あれ？　あいつ、おふくろの様子見に行くって、ぜんぜん戻って来ねーじゃん？」
「比奈ちゃんなら、帰ったぞ？」
「どうして！？」
五郎太の言葉に豊が眉をしかめた。

「おばちゃんの熱も下がってきたし、お母さんたちが待ってるから、って」
「ええ？　あいつ一緒に飯食ってくんじゃなかったのかよ…」
豊の気落ちしているような声に、由美子は、チラリと見て、お皿の上にご飯をよそい始めた。

三皿目にご飯をよそおうとした由美子に、豊が言った。
「あ、俺、これにカレーかけて食べるから…」
黄ばんだドロドロのお粥みたいなモノを指差した。
「な、な、なに、それ！」
眉をしかめたまま、思わず由美子が声を張った。
比奈子が作ったお粥らしきみたいなものは、恵子には食べさせられないので、豊が別に作り直した新しいお粥を、「比奈子が作った」と言って恵子に持って行こうとおもっていた。
比奈子が作ったものは、自分が食べる予定だ。

皿を受け取った豊は、小笑いしながら皿に入れた。
「これ、比奈子が作ったお粥…、捨てるの勿体ないから…俺が食う」
「ふ～ん、そっか！」
由美子は、豊が持っているお皿に目をやり、微笑んだ。

「や、やっぱり、あれは、毒入り…か…？」
……その日の夜中、豊は腹痛に見舞われ、朝方までトイレの便座を暖めた。

＊　好きな女が作った料理は、どんなに無理をしてでも食べたいものである　＊

（３９）イブに集う１

２４日、比奈子は「かえで学園」で、豊は「居酒屋・お春」で、それぞれクリスマスパーティをしていた。
かえで学園は小さい子供が多いため、５時からクリスマス会が始まった。
案の定、人気は志乃扮するサンタクロースに集中し、トナカイの恒和は、男の子たちにいじくられていたが、それなりに楽しんでいた。
子供たちが寝静まり、大人が後片付けを全て終えると１０時近くになり、小鳩家三人が自宅に着くころには、１１時を回っていた。

「明日の夜は、親子三人のクリスマスパーティーだ！　楽しみだなぁ」
恒和は、サンタクロースの衣装が入った袋を、横目で見て言った。
衣装を着て、志乃と比奈子に毎年プレゼントを渡す。
去年は、志乃にブランドバックを、比奈子には、大きなキリンのぬいぐるみだった。
そのキリンは部屋に飾ってあり、遊びに来る友達は１００％の確率で驚く。
恒和はお給料を貯めるのではなく、賭け事で儲けたときの分はみんな貯金し、クリスマスとお誕生日には、そのお金で二人にプレゼントしていた。
よって、プレゼント格差は年毎に変わる。
一番ひどい年のクリスマスプレゼントは、志乃には洗物をするときのゴム手袋、比奈子にはクマのマスコットが付いたヘアピンだった。
比奈子が小学三年生の時である。
この年「僕は厄年だったからしかたがない…」と言い訳したが、当時、恒和は３３歳であったが、３３歳は女の厄年である。
何につけても適当に生きている男・恒和である。

だが、今年は、すごい。
秋に当てた万馬券、人生最高の額だった。
志乃には、カシミヤのコートとイタリア製のスカートスーツ。
比奈子には、ブランド物の高級腕時計。
もちろん二人には、２５日までプレゼントの中身は内緒だ。
恒和は２５日を待ち望んでいる。

☆☆☆☆☆

クリスマス・イブだと言うのに、全然クリスマスらしくない居酒屋
「お春」の座敷では、比奈子を除いた９人が集まっていた。
「比奈子ちゃん、別のパーティ行ってんの？　抜け出して来ればいいのに」
さと兄が言った。
「比奈子はね、毎年の恒例のパーティでご両親と一緒だし、大勢が集まる大切なパーティだから抜け出すわけには行かないの。終わったら、こっちに来るようには言ってあるけど」
絹子が落ち着いた声でさと兄に言うと、さと兄は、「はい、わかりました」と小さく答えた。
女子４人と豊以外は、「かえで学園」のことを知らない。

時間が経つにつれ、酒の量も増えていく。
「豊と由美子ちゃんて、一ヶ月に何回くらいしてんのぉ？　エッチ！」
さと兄の質問に、豊は、飲んでいた焼酎を噴出しかけた。

「さとる、あんた何訊いてんのよ！　ばか！」
絹子に頭をひっぱたかれた。
「さと兄、下ネタやめろって、いつも言ってるだろ？　女の子もいるのに」
花ちゃんにも言われ、大人しくなった。
豊も由美子も笑っていたが、この二人に男と女の関係などあるはずがない。

「豊って、比奈子ちゃん以外の女の子と話す時って、静かに話すよな？」
慎太郎の言葉に男子みんながうなづいた。
「そうだよね、比奈子ちゃんとはケンカみたいな、っていうか、
オレたちとつるんでるときと同じ感じだけどさ、由美子ちゃんたちといる時って、
ボソボソって感じか？」
豊自身、自分では全く気が付いていなかった。
「由美子ちゃんたちといる時が普通なんだよ！
比奈子は、あいつは、女じゃなくて男に近いだろ！？　おまえらと一緒みたいなもんだし」
ぶっきらぼうに言ったが、内心はあせっていた。

「由美子ちゃんの前では覆面か！　クールに決めちゃってさ、あははは」
「じゃ、比奈子ちゃんの前では、素　なんだ？　そのままの豊か」
慎太郎とさと兄に言われた。

「素が一番いいよ…」
小窪ちゃんがやっとつぶやくように喋った。

「でも異性の前では、気取っちゃうっていうのがあるからさぁ、

由美子ちゃんもこいつの本性見抜いておいた方がいいぜ。
変なやろうだから、早めに他の男に乗り換えた方が良いかもよ～」
さと兄が、由美子に向かって言うと、「おまえがいうな！」と言う感じで、みんながさと兄を見た。
由美子はニッコリ微笑んで言った。
「女の子も同じかも、でも仮面を被るのは女の子の方が上手かもよ？」
「そうね、時に仮面は大切だけど、ありのままの自分を出せる異性って、
赤い糸で結ばれてるのかもしれない！」
晶子がチラリと豊を見た。

「赤い糸かぁ～、私の糸は誰と繋がってるのかしらぁ」
絹子が誰を見るわけでもなく、どこを見るわけでもなく溜息交じりに言った。
「ぁあ！？　ちょっと、待って、絹子ちゃん！　オレだろ？　オレとの赤い糸」
さと兄が真剣に言ったが、絹子は、シラけた顔をした。
「さとると私は、おうど色の糸よ！」
「おうど…？　黄色い土と書いて黄土色と読む、あのおうど色か！？　き、汚い色じゃないか！」
おうど色に対して失礼な、そんなどうでもいい説明をし、ギャーギャー騒ぐさと兄の話など聞かず、豊は一口チューハイを口にし、考えていた。

俺…、比奈子と言い争ってあいつが憎まれ口たたいても、全然憎くなくて、
「天パー」って、仕事場に来てくれるのが楽しみで…待ち遠しくて…
今日は、かえで学園だ、ってわかってるけど、それでも……いつも

みんなが集まってるのに、
あいつだけいないと、誰と一緒にいるのか、すごい気になるし…
なのに俺は、由美子ちゃんと付き合ってる…
何フラフラしてんだよ、俺！！

「うわぁぁああ！　くそっ！！　ちょっと、酔い覚ましてくる！」
いきなり大きい声をあげ、立ち上がり、みんなが見守る中、店を出た。

「どうしたんだ？　あいつ…」
男四人が心配そうに顔を見合すが、女四人は、目配せをし、お互い軽くうなづきあった。

絹子の携帯が鳴り、出ると比奈子だった。
家に戻って来たが、まだみんな居るようなら、「これから行く」と言うと、「比奈子ちゃんが来るまで待っています！」と、絹子から携帯を取り上げたさと兄が言い、電話を切った。

「おい、早く豊に知らせ……なくても…いいよな…うんうん、関係ねーよな」
慎太郎が、店を出て行った豊に知らせようとしたが、由美子がいることに気が付き、慌てた。
「そーだよ、なんで豊くんに知らせんだよ～、あはは～あは……ハァ…」
「よ、酔っ払っちゃってんじゃねーぞ、慎太郎～、バカだなぁ～」
花ちゃんとさと兄がカラ笑いをしたが、脇の下は汗をかいている。

「豊へのクリスマス・プレゼントだよな、サンタさんからの……」
ボソボソっと言う小窪ちゃんの口を、慎太郎の手が塞いだ。

だが、聞こえていた女四人は思った。
『小窪くん、ロマンチストなのね…ステキ！』

＊　無口な男がたまに喋る…、これほどかっこいいことはない　＊

（40）イブに集う2

豊は、よけいに寒さを増すような蛍光灯の青白さの下、静まり返っている地元商店街を、
自分の靴先だけを見ながらトボトボ歩き、端まで行くと折り返し、また端に向い歩いていた。

「前田クリーニング店」を過ぎ、「さと兄の米屋」を過ぎ、「慎太郎の酒屋」を過ぎ、
「花ちゃんの花屋」を過ぎ、「小窪青果店」の前に来ると、豊の足元に、自転車のタイヤがギリギリで止まり、驚いて顔を上げた。

「な、なにすんだ……よ……、って、ひな、こ？」
毛糸の帽子を被り、耳当てをし、マフラーで顔半分を隠し目だけを出した比奈子がいた。

「よっ、天パァ～、なにしてんの？　一人で」
「パ、パ、パァ～じゃねーって言ってんだろう！　パーだよ！」
「じゃ、パー、一人でお散歩？」
「天を付けろ！　天を！　パーだけっつーのは、止めろ…」

「みんなは？」
「店に、いる。俺は、ちょっと、酔い冷まし…」
突然現れた比奈子に驚いたが、どことなく嬉しくてほころびそうになった顔を「寒いな～」などと言い、擦ってごまかした。

「かえで学園の方、終わったの？　クリスマス会」
「うん、子供たちは、とっくに寝ちゃって、片づけしてたらこんな時間になっちゃって、

さっき絹子に電話したらまだみんないるっていうから、ちょっと顔出しに来た」
「そっか、あ、子供たち喜んでた？　プレゼントとかあげたんでしょ？」
「うん、お母さんがサンタクロースになってね、あはは～」
比奈子は自転車のペダルは漕がず、足で地面をけりながら、豊と並んで「お春」に向かった。

豊がダウンの袖口を少し上げ、腕時計を見た。
「イブももうすぐ終わりだな？」
「なに大晦日みたいなこと言ってんのよ。クリスマスのメインは、イブじゃなくて、
二十五日のクリスマス！　豊だって、明日は、由美子とクリスマスデートじゃない」
比奈子は、ニットの帽子とマフラーの間から覗かせた目を細めて言った。

「あ…、ん、まぁ、そうだけど…」
「なぁに、もしかして緊張しちゃってるの？
あっ！　すでに、食事のあとのことなんて考えちゃって…？
『食後のデザートは君だよ、由美子！』なんて思っちゃったりしてるわけ？
きゃ～、豊のドスケベ！　変態！」
比奈子は声色を変え、一人芝居をした後、地面を思い切り蹴り、豊より少し前に出た。

「おまは、アホか！」
後ろで聞こえる豊の声に、マフラーの下に隠されている口元が動いた。
「私は、アホですぅ…」

声にもならない一人言だった。

「お春」の店に着くと、比奈子は自転車を、「お春」の看板に太いチェーンでくくりつけた。

「おまえ、看板にくくりつけんなよ」

「大丈夫だって！　ここのりっぱだよ？　儲かってんのかねぇ。前田クリーニング店の看板とは豆腐とヌリカベくらいの差があるよ」

「……うっせーんだよ、おまえは」

店の引き戸に手をかけようとした比奈子の後から、マフラーの両端を持って軽く締めるマネをしていた豊が小さい声で、ぶっきらぼうに言った。

「比奈子……、メリー・クリスマス」

「えっ？」

「もう、二十五日に、なった…。俺の最初の『メリークリスマス』、比奈子にやるよ」

比奈子は、豊の方を振り向かず、ほんの一瞬だけ唇をギュッと閉じ、涙が出そうになったのを我慢して、明るい声を出した。

「うん！　メリークリスマス！　天パァ～」

「……パァ～は止めろって言ってんだろーが！」

頭を小突かれた比奈子は、笑いながら、引き戸を開けた。

＊　比奈子が前に言った言葉……

『イブから二十五日になって、最初に『メリークリスマス』を言い合った二人は、

仲良しになれる』

本当は……

『イブから二十五日になり、好きな人に最初の「メリークリスマス」を送ると

両思いになれる』

（41）イブに集う3

みんなが集まっている店の一番奥まで行き、比奈子が帽子のボンボンを掴み、スポッとニット帽を脱いだ。
「メリークリスマス！　みんな、盛り上がってる？」

「誰かと思ったわよ、そのコロコロの完全防備」
晶子に言われ、小笑いしながら、絹子の隣に座った。
「比奈子、髪の毛ペッチャンコになってるじゃない！　もう！」
絹子に髪の毛を直してもらっている比奈子の姿を見て、豊は優しい笑顔のまま、自分が座っていた由美子の隣の席に腰を下ろした。

「比奈子ちゃんと一緒に戻って来たからびっくりしたぜ」
「ん？　ん…、途中で偶然、会ったんだ」
慎太郎が言うと、少し照れたように鼻の上をかきながら豊が答えた。

「ハッピークリスマス…。神様、ありがとう…」
二人が一緒に現れた姿を見て小窪ちゃんが、ボソッと言った。
四人の女は、瞳を潤し思った。
『小窪くん、私があなたにハッピークリスマスをあげたい！』

結局、午前三時過ぎまで「お春」で騒ぎ、自転車の比奈子を除く女四人はタクシーの相乗りで帰って行った。
さと兄は、絹子に自分の家に泊まるように言ったが、拒否され、「今日の夜六時に家に迎えに来い」とだけ言われ、悲しさからくる鼻水をすすり、タクシーを見送った。
タクシーの中の女四人は、比奈子と豊の話をしていたが、途中から晶子が「小窪ちゃんがステキ！」と言い出し、全員同じ意見で盛り

上がった。

「んじゃ！　みんな、次は忘年会で！」
四人を見送ると比奈子も自転車に跨り、片手をあげた。

「比奈子ちゃん、待って。こんな夜中、一人じゃ危ないよ」
花ちゃんが言うと、さと兄があとにつくように言った。
「そうだよ、女の子一人なんて。豊、おまえ自分の自転車持ってきて、送っていってやれ！
酒入ってから車はダメだから、自転車だ」

「え、あ、うん…じゃ、今、自転車持っ」
「ううん。本当に大丈夫！　車も少ないし、すっ飛ばして帰れば、十分もかからないから！
んじゃ、みんなまた！」
比奈子は、みんなに笑顔で言うと、背を向け、片手を挙げて、バイバイをした。
「え、比奈子！　おい、ちょっ、待てよ！」
豊の声は聞こえていたが、比奈子は振り向かずにペダルを漕ぎ続けた。

「なんだよ、あいつ。俺がせっかく、送っていっ……、うぉっ！
なんだ！」
比奈子の去っていく姿が見えなくなり、振り向いた豊は、自分の真後ろで、きれいに並んで豊をみていた男四人に驚いた。

「いや、別に…」
「寒いね…」
「息がこんなに白いよ、ハァ～」

「……ボソッ」

「……じゃぁ、帰ろう…か…」

首をかしげ、豊が歩き始め、四人もバラバラとあとに続いた。

前田クリーニング店の近くに来ると、慎太郎が口を開いた。

「豊ぁ、いいのか？」

「ん？　なにが？」

「……本当は比奈子ちゃんのこと好きなんだろ？」

「え、何言ってんの…慎太郎。どうして俺が、」

「あのさ、おまえ自分に嘘いてどうすんだよ」

呆れた顔で豊を見た。

「嘘なんてついて、ない…」

否定の言葉に気が入っていないことがわかるほど弱い声の豊に慎太郎はイラついた。

「って、言ってる顔が、嘘ついてんだよ！

比奈子ちゃんの気持ちはわかんないけど、オレら、豊のこと見てるとわかんだよ、

おまえが比奈子ちゃんのこと好きなことくらい！」

「比奈子は、見合いして、そいつと仲良くやってんだ！　俺には関係ないんだよ！」

慎太郎が声を張り上げると、豊も怒鳴り返した。

「関係ないんだったら、切ない顔して比奈子ちゃんを目で追うの止めろ。

豊がそんなんじゃ、由美子ちゃんにも失礼だし、かわいそうだろ！？」

「うるせーんだよ、慎太郎！」

豊が慎太郎の胸倉を掴むと、三人が止めに入った。

「止めろって、豊！」
さと兄が、豊を抑えると、散髪屋の二階の窓が開いた。
「ごりゃー！　酒屋の慎太郎！　クリーニング屋の豊！　米屋のさとる！
　夜中に何騒いどる！　静かにせい！」
吉田吉左衛門・八十二歳が怒鳴った。
「はいっ！　すいません！」
花ちゃんが、二階を見上げ、敬礼をし謝ると、バシッっと窓が閉まった。
小窪ちゃんは敬礼だけをしている。
元警部の吉左衛門は、声を聞いただけで、どこの店の子供かわかってしまい、昔から悪さをすると、よく怒られていて、豊たちが、「頭の上がらない爺さんベスト1」だ。

「……」
豊は手の力を抜き、慎太郎を放した。
「…ごめん…慎太郎。……みんな、おやすみ……」
そう言うと、溜息を吐き、頭を両手でかきながら、自宅の玄関へ繋がるわき道を入って入った。
四人は、豊の姿が消えると、黙ったまま歩き出し、順番に自分の家の前に着くと、
「おやすみ」と言いながら、一人づつ消えて行った。
最後に小窪ちゃんが一人になり、「小窪青果店」の前に着き、空を見上げた。
「みんなに…幸あれ……」

胸に手をあて呟くと、一つの流れ星が、スーっと、流れた。
流れ星に願い事を三回言うと叶う。
小窪ちゃんは、とっさに言った。
「小窪青果店商売繁盛小窪青果店商売繁盛小窪青果店商売繁盛！」
小窪ちゃんとは思えないほどの早口。
とりあえず、一番の願いは、自分の店の売り上げアップだ。

比奈子は、寒さの中、自転車を漕ぎまくり、自分の家の近くの長い上り坂にさしかかると、
少しペースダウンし、立ち漕ぎのまま、声を出しながら自分に言った。
「頑張れ、比奈子！　ここを登れば楽になる！　恋だって、同じだよ？
　この坂登ったら忘れちゃうよ～、頑張れ～比奈子！」

坂を登りきり、自転車のペダルから足を下ろし鼻をズズッとすすり、切れている息のまま空を見上げた。
「もう大丈夫だ、比奈子！　豊なんて、もう忘れたから…涙なんてもう出てこない！」

空を見ながら、もう一度鼻をすすると、流れ星が流れた。

「あっ、願い事！　小鳩縫製万歳小鳩縫製万歳小鳩縫製万歳」
全然願い事ではない。

＊　女が涙を我慢するのは、男が涙を流すより、たいへんなことである　＊

（42）それぞれのクリスマス1

クリスマス25日は、店の定休日と重なっていたが、年末の忙しさで、店は開けていた。
豊は、6時に由美子と約束をしているため、5時前、仕事を先に上がり、支度を始めたが、
ワイシャツを着ては溜息を一つ。
ワイシャツのボタンを一つ留めては溜息一つ。
ズボンに足を片方突っ込んでは溜息一つ。
もう片方に足を突っ込んでは溜息一つ。
ファスナーを上げては溜息一つ。
最後のスーツのジャケットを着るまでに、部屋中が溜息吐息に包まれた。

「兄ちゃんさぁ、鬱陶しいから、その溜息止めてくんない？　ボクの運気まで下がるよ」
豊の部屋でエロ本を物色していた浩司に言われた。

「あれ？　なんで浩司がここにいんの？　おまえ、彼女とデートじゃなかったの？」
まったく気の入っていない声で訊いた。
「ボク、さっきからずっとここにいたぜ？　っつーか、ボクは　後で、彼女迎えに行って、
　うちでおやじとおふくろと四人でクリスマスすんだ」
「はぁ？　おやじたちと！？」
「うん、特別な彼女だから」
浩司は前に比奈子に恋の相談をし、彼女には「君は特別だ！」ということをアピールしろとアドバイスを受け、その後、何かにつけて、彼女を特別扱いしてきた。

よって、少し違うような気もするが、クリスマスは特別に彼女だけを前田家に招待したら、思いのほか、彼女は喜び、五郎太と恵子と四人で食事をすることになった。

「いいなぁ、おまえ…しあわせそうでな…」

「ぁあ？　兄ちゃんだってこれからデートだろ？　何言っちゃってんのぉ～？」

陽気に言う浩司を見て、豊はまた溜息を吐き、机の引き出しを開けた。

リボンの付いた箱が二つ並んでいる。

一つだけ手にとり、そのままポケットに入れ、残された箱をそっと指でなで、溜息を吐き、引き出しを閉めた。

待ち合わせの時間に間に合うように玄関を出ると、冷たい風が当たる顔を、バンバンと叩き、自分に気合を入れ、駅に向かった。

小鳩家では、志乃がクリスマスだから特別にと……本当は料理を作るのが面倒くさいからであるが、ホテルのケータリングサービスの食事をテーブルに並べ、親子三人の楽しい…特に、恒和が浮かれているのだが……、クリスマス会を開いていた。

「うっきょ～、すごいじゃん！　お父さん、今年のプレゼント！」

比奈子の喜びに、サンタクロース姿の恒和は、ニンマリ微笑み、満足そうな顔でうなずいた。

「ほんと、大昔のゴム手袋とは大違いだわ。ねぇねぇ、似合う？　比奈子」

志乃はカシミヤコートに腕を通し、言った。

「見たか！　父の実力を！！」
天を向いて高笑いだ。
「でもぉ、働いたお金で買ったんじゃないんだよね？　これ」
「ぇぇ？」
比奈子に言われた恒和は、少し首を横にした。

「このカシミヤコートにたどり着くまで、いったいいくらかかったのかしら、ね？」
「ぇぇ？」
志乃に言われ、恒和は首を九十度に倒した。

「随分高いカシミヤコートになってるよね、、家一軒買えてたりして…」
「うわぁ～、大切に着なきゃ」
「うん、私も大切に使お～っと、この腕時計！　また来年はクマのヘアピンだったりしてね？
　この歳でクマのヘアピンはちょっと辛いわ…」
きゃっはは、と笑い合う母と娘を見ながら、複雑な心境の父・恒和であるが、笑顔の二人を見ながら、しあわせを感じている。

（43）それぞれのクリスマス2

「よく予約取れたね、このレストラン」
豊が由美子を連れて来た店は、さと兄に頼んで予約を取ったお洒落なフレンチレストランで、女性に人気店だった。
クリスマス当日とあって、周りはすべてカップル。
食事もコースディナーの一種類。
オーダーであれこれ選ぶのが面倒くさい豊には、好都合だ。
ワインを飲みながら、いつものように他愛ない話をしながら、アペタイザーから食事をこなしていった。

「食事終わったら、どうするの？」
「へ？」
急に由美子から訊かれた豊は、言葉に詰まった。
「え～、クリスマスだよ？　豊くん、まさか、いつものようにご飯食べたら、帰るつもりだったの？」
由美子の読みは正しい。
豊は「そのつもり」だった。

「あ、じゃぁ、飲みに…行く？」
豊が言うと、由美子が軽く笑い、「そうだね？」と、言ってくれたことに豊は、少しホッとした。

メイン料理が終わり、デザートが二人の目の前に運ばれてきた時、由美子がデザートから目を離し、豊を見た。
「あっ、そうだ。比奈子ね？　結婚決まったみたいよ？　昼間連絡来たの」
「えっ？」
寝耳に水の豊は、フォークを持ったまま由美子を見て動かなくなっ

た。
由美子は、ケーキ横に添えられてあるシャーベットを口に入れ、飲み込んだあと、続けた。
「ご両親が相手のこと気にいったらしくて、話を進めたてたらしいのよ。
ほらっ、比奈子、両親思いじゃない？　自分の気持ちより、両親のことを考えてしまうでしょ？
だから本当はこの結婚の話、比奈子イヤなんだけど……」
「えっ…？」
「でも相手の人は、婿養子でも良いって言ってて、小鳩縫製を継いでも問題ないらしいし。
でもなんか、比奈子の気持ち考えると…無理に好きでもない人と一緒になるなんて…。
こういうの政略結婚っていうのかなぁ。比奈子、元気を装っていたけど、涙声っぽかったしぃ」
由美子は一度デザート皿に目を向け、同情するような、悲しそうな表情でチラッと、豊を見た。

黙っていた豊は、フォークを皿の上に置き、立ち上がり、膝の上のナプキンをテーブルに置いた。
「ごめん、由美子ちゃん、俺…、俺と別れてください。
ずっと言わなきゃって思ってたのに、俺、優柔不断で…、
由美子ちゃんにもちゃんと言わないで、ズルズル来ちゃって、本当にごめんなさい」
体を直角に倒し、豊が頭を下げた。
周りのお客は何事か見ていたが、由美子は微笑みながら言った。
「ハァ～、やっと振られた」
力を抜いた由美子は、椅子の背にもたれた。
「？」
豊が顔を上げた。

「待ってたんだ、この日」
ニッと笑った由美子だが、豊は意味がわからない顔だ。
「豊くんが、自分の気持ちに素直になるの待ってた。比奈子のことが好きなんでしょ？
本当は、豊くんと付き合いはじめてすぐわかってたんだよ？
私が豊くんを振っても良かったんだけど？　ほんとうは」
「どうして…？」
「前に言ったじゃない？　私も比奈子のことは大好きで、大切な友達だ、って」
「うん…」
「私は、豊くんも好きだけど、比奈子のことはもっと大好きで、好きな二人が幸せになることは、
私にとっても幸せなことなの！　豊くんが私にちゃんと別れを言って、
自分の思いを握り締めて比奈子に告白する、それが理想。
比奈子も豊くんのこと好きなはずよ？
あの子、私に遠慮して言わないでいると思うの、豊くんが好きってこと。
今日は、家にいるわよ、比奈子。親子三人での最後のクリスマスを過ごすって言ってたから、
無理やりでも奪いに行かないと、見合い相手に取られちゃうわよ？」
「由美子ちゃん、ごめん、ありがとう」
そう言うと、豊かは出口まで走った。
が、また走って戻って来た。
一人、デザートに再び手をつけようとした由美子は、不可解な顔だ。
「どうしたの？」

「こ、これ、忘れてた」
豊が差し出したのは、リボンがついたクリスマスプレゼント。
事前に由美子にほしいものを聞いており、おとといに行った物だ。

「あはっ、それ、比奈子にあげて？」
「え？」
「私がお願いしたそれは、比奈子が欲しがってたものなの。
だから、それは、比奈子の物、わかる？」
「あ、うん…ありがとう、由美子ちゃん…」
ペコッと頭を下げ、再び走って出て行った。

「もう戻って来ないわよね？」
由美子はドアの方を確認し、ふぅ、っと体の力を抜き、デザートを口に運んだ。
「……ちょっと、待って…ここのお勘定は…？　ちょっと、勘弁してよー」
頭をかきながら、由美子は携帯を開き、晶子と絹子と澄江にメールを打った。

『ミッションクリア。豊くんは弾丸のごとく小鳩家へ向いました！』

「あっ、そうだ！」
みんなにメールを送信したあと、もう一人にメールをした。
『町雄く～ん。由美子一人で淋しいんだけど…クスン…』
先月逆ナンした男「出坂町雄（でばんまちお）」くんにメールをすると、一分も経たないうちに返信が来た。
『すぐに迎えに行く！　どこにいるの！？』

（44）聖なる…夜？1

豊はタクシーに乗り込み、比奈子の家の向かったが、途中で行き先を自分の家に替え、タクシーを降り、玄関のドアを勢いよく開け、茶の間をドタドタ走り、二階上がり、自分の部屋の机の中からラッピングされ、リボンがついた長細い箱を手にした。

「ハァ…」

渡せるはずがないと思いながらも、比奈子のために買っておいたクリスマスプレゼント。

茶の間でケーキを食べていた五郎太と恵子、浩司と浩司の彼女は、豊の様子に何事かと、階段の下で二階を見上げていたが、またバタバタと豊が急いで降りてきた。

「どうしたんだ！？　豊」

五郎太たちの目の前を通りすぎ、玄関へ一目散の豊。

「おやじ、ごめん！　俺、前田クリーニング店を捨てるかもしれない！　ごめん！」

振り向きもせず、そう言いながら豊は、慌てて家を出て行った。

「なんなの？　あの子…」

「いや、わからん…家出するのか！？　あいつ！」

「兄ちゃんが前田クリーニング店継がないんなら、ボク、継いでもいいよ？　アイロン好きだし」

「私もクリーニング屋さんの匂い好き！」

浩司と浩司の彼女の言葉に、五郎太と恵子は顔を見合わせ、笑顔になり、豊かのことはさほど心配もせず、四人でまたこたつに入り、ケーキを食べ始めた。

豊は大通りまで出て、タクシーで比奈子の家に向かった。
小鳩家のチャイムをピポピポ押しまくると、インタホーンから志乃の声が聞こえた。
カメラに映っている豊にちょっと待つように言い、志乃が玄関のカギを開けた。
「どうしたの？　豊くん、今日は由美子ちゃ、」
「比奈子！　比奈子いますか！？」
豊に体をブンブン揺さぶられながら、そう訊かれた志乃は軽い眩暈の中、二階を指差した。
豊は、急いで駆け上がり、志乃もふらつきながら、あとに付いた。
リビングのドアを開けると、まだサンタクロースの衣装のままの恒和が、皮と白いスジを丁寧に綺麗に取ったみかんを、口に入れようとしているところだった。
恒和は豊の姿を見て、みかんを持ったまま固まった。

「お父さん！　比奈子さんは誰にも渡しませんから！　俺がもらいます！」
怒鳴るように言ったあと一礼すると、豊の後ろにいた志乃が豊の肩を指先でトントンと叩き言った。
「比奈子は自分の部屋にいるわよ。あっち」
と、にこやかな顔で、廊下の一番奥の部屋を教えた。

豊は、比奈子の部屋に猛ダッシュし、ボーっとしていた恒和は我に返り、ソファから立ち上がった。
「な、な、なんなんだぁぁああ！！　あいつぁぁぁあああ！！
　ぼ、僕はあいつのお父さんではない！！　なにが、お父さん！だ！」
憤慨丸出しで、自分も比奈子のところに行こうとしたが、志乃に首ねっこをつかまれた。

「あなた、娘のしあわせを邪魔する気なの！？　」
「な、何ィ！？　あいつは何しに来た！」
「プロポーズじゃないの？」
「はぁぁあああ！　許さん！　比奈子が危ない！　待ってろ、比奈子！
　今、お父さんが助けに行くからー！」
「あなたはここにいていいから！！」
また比奈子の部屋に行こうとしたが、志乃に連れ戻された。

豊は、比奈子の部屋をノックすると、返事も待たずにドアを開けた。
「う、うわぁ！」
ドア横に置かれている大きいキリンに驚いた。
クリスマスのスティックキャンデーを銜えたまま、振り向いた比奈子は、目をパチパチさせ、椅子から立ち上がった。
「……な…に？」
真剣な表情の豊は、比奈子の方に歩いてくると、そのまま比奈子を抱きしめた。
「見合い相手となんて、好きじゃないヤツとなんて結婚するな！」
力を込めて抱きしめた。
「なになになに、なんの話？」
「小鳩なんて捨てて俺と逃げよう！　俺も前田クリーニング店捨てるから！
　一緒に逃げて、二人で暮らそう」
「……？」
逃げる、という意味がさっぱりわからない比奈子は、豊の腕の中で少し考えたが、やっぱり意味がわからない。
だけど、一つわかったことは、豊の腕の中は暖かいということだ。

忍び足で二人の様子を覗きに来ていた志乃は、目を細め、うれしそうな顔で、開いていたドアをそっと閉めリビングに戻った。

「豊…？　今日は由美子と一緒なんでしょ？　由美子はどうしたの！？」

「別れてきた」

「はぁ？」

少し、体を離した比奈子は、怪訝な顔で豊を見上げた。

「俺は比奈子が好きだから、由美子ちゃんとは別れた」

「ちょ、ちょっと、由美子の気持ちはどうなんのよ！

由美子のこと泣かすとか、そういうことするんなら、許さないわよ」

「由美子ちゃんに言われたんだ、比奈子が好きなら結婚相手から奪え、って…」

豊はもう一度、比奈子を引き寄せて言った。

「だから奪いに来た。俺以外、誰とも結婚させない」

「ゆたか…」

と、余韻に浸っていたが、比奈子が体を離し、訊いた。

「ねぇ、私の結婚相手って、誰のこと？　見合い相手って…」

「見合い相手と無理やり結婚させられる、って、政略結婚だって、由美子ちゃんが教えてくれた」

「見合い相手と…？　政略結婚！？」

比奈子は、思い出したくもない十一月の見合い相手の名前まで思い出してしまった。

「……由美子…謀ったわね…」

その頃、由美子は、料理など一口も食べていない出坂町雄に、数万

円のレストランのお会計をさせたあと、コンビニの二つで三百八十円のケーキを買い、町雄のワンルームマンションで楽しく過ごしていた。

比奈子は、見合いの話は、見合い当日に断り、結婚の話なんて一つもないことを説明した。

「マ、ジ……？」

「うん、だから豊は、大切な前田クリーニング店を捨てなくていいから！」

「えぇ～…、あっ、そうだ、これ」

少し顔を引きつらせつつ、豊は、左ポケットに突っ込んできたプレゼントを出した。

比奈子が、リボンを解き、包み紙を外し、中を見ると、ホワイトゴールの細い鎖に、ハートが5個並んでいるトップのかわいらしいネックレスだった。

選ぶのに数時間掛かった。

「俺が選んだから、比奈子が気に入るかわかんないけど…」

豊は、照れた顔を下に向けた。

「ありがとう…」

比奈子が嬉しそうにネックレスを見ていると、豊がネックレスを手に取り、比奈子の首に付けた。

「へへっ、似合う？」

「うん。……あっ」

二人で照れていると、豊は、右ポケットのプレゼントも思い出し、取り出した。

「これ…も」

「もう一個あるの？」
比奈子に訊かれ、豊は由美子との話をした。
「……だから、これは、比奈子が一番ほしいものだって…由美子ちゃんが言ってたけど、
これ、どうするの？」

比奈子は、それを受け取り、中身を見た。
「う、うわぁ～、これ！　ほしかったぁ！！　あ～ん、由美子ちゃん、ありがとう！」
比奈子は、豊ではなく由美子の家の方角に体を向けてお礼を言った。
「それ、そんなにどうするの？」
中身は、「某ハンバーガー店のギフト券二万円分」だ。
かえで学園の子供たちが、ハンバーガーが大好きなのだが、人数が人数なだけに、たまにしか買ってあげられないため、ギフト券はどんなプレゼントよりうれしい。

豊は複雑だ、ギフト券の三倍の値段のネックレスより、ギフト券を喜んでいる比奈子を見て、多少ではなく、多多のショックを受けた。

「比奈子…？」
豊は、真面目な顔で比奈子の目をまっすぐ見た。
「好きです！　俺と、付き合ってください…、け、け、結婚、前提…で！」
「うん！」
おもいきり首を縦に振り答えた比奈子を、抱きしめた。

ニンマリとした顔が戻らない豊だったが、思い出したかのように、顔を青くした。

「あっ……すごく、ヤバイ！
俺、比奈子のお父さんにもう一度ちゃんと比奈子とのことお願いしに行かなきゃ」
「会ったの？」
「リビングにいて、比奈子を貰いに来ました発言して、俺、そのままこの部屋にきたから」
「そう…？」
比奈子は首をかしげた、恒和の性格なら絶対、豊を捕まえにこの部屋まで追いかけてくるはずなのに、どうして来ないのか…、不思議だ。
とにかく、「リビングに行こう」と、二人は恒和と志乃がいるリビングに向かった。

＊　遠回りしても、好きな人にはちゃんと「好き」だと伝えよう…うまくいく…場合も…ある　＊

（45）聖なる…夜？2（完）

「お母さ～ん？　お父さ……んは…、ぇえ！？」
比奈子と豊は、恒和の姿に驚いた。
ソファに座っていたのは志乃だけで、サンタクロース姿の恒和は、ダイニングの椅子に座らせられたまま、両手両足身体を、ガムテープで縛りつけられており、口にもガムテープが張られ、比奈子の顔を見てフゴフゴと何かを言い、豊の方を睨むと、フゴフゴの勢いが増した。

「…おと、おとうさん…、どうしたの！？　お母さん！」
比奈子が心配そうな顔で、志乃に訊き、恒和の口に張られているガムテープを剥がそうとした。
「あー、剥がしちゃダメよ、比奈子！　比奈子の部屋に乗り込んで行きそうだったから、
縛っておいた。そうやっておけば、大人しくていいでしょ？
あっ、で、あなたたち、どうなったの？」
志乃は二人の顔を見て訊いた。

「あっ、お母さん、先ほどは失礼しました！　比奈子さんとの交際を認めてください！」
いきなり豊が深深と頭を下げると、志乃は、ソファから立ち上がり、真面目な顔をして言った。
「比奈子を誰よりもしあわせにするって約束をしてくれるのなら、許します。
私の大切な一人娘なんですから、泣かすようなことしたら、殺す！」
ドスの効いた声の志乃に豊は、体を硬直させた。
「はい！　絶対しあわせにします！」

「ん、では、比奈子をよろしくお願いします、豊くん」
志乃も頭を下げ、微笑んだ。
豊は次に、恒和の方を向き、縛られたまま睨みつける恒和に言った。
「お父さん、比奈子さんを大切にします！」
頭を下げると、恒和は目だけで真剣さを現し、言った。
「フゴフゴー！　モゴッモゴッ！」
「はい？」
豊が訊き返した。

「なんか、いいみたいよ？　許したみたい」
志乃が言った。
「本当ですか！？　ありがとうございます！」
豊が満面の笑みで礼を言い、もう一度、恒和に頭を下げた。

「いいんだよ、比奈子がしあわせなら。わしは何も言わん」
「はい！　必ずしあわせにします！」
「うんうん、頼んだぞ！　豊くん！　がっははは」
口を塞がれモゴモゴとしか言っていない恒和の代わりに、志乃がアフレコをしていた。

「モゴモゴッ！　モゴモゴーー！　フゴッフォウフゴ！
（僕は賛成してないぞ！　反対だ！　その男を追い返せ！）」
恒和の訴えなど、誰も聞くわけがない…

「お母さん、お父さん、なんか泣いてるよ？」
「え？　あぁ、嬉し涙じゃないの？
あっ、そんなことより、こっちに座ってお茶でも飲まない？　今、紅茶入れるわ」

志乃は、二人をソファに座らせ、ダイニングの椅子に縛ってある恒和の頭をパシッと叩きながら横を通り、紅茶を入れに行った。
結局、恒和は、豊が帰るまで解放させてもらず、少し離れたところで、和やかに笑い合う三人を、涙を流しながら見ていた。

時間が遅くなり、タクシーで帰るから大丈夫だという豊だったが、比奈子が車で送っていくことになり、豊は、志乃に挨拶をし、すでに、縛られたまま抜け殻状態の物言わぬ恒和にも挨拶をし、二人で家の外に出た。

「私の車、こっち」
比奈子に付いて、小鳩家の向いにある大きい駐車場に入った。
ロックを外し「乗って」と比奈子に言われた。
「…え」
「どうしたの？　豊。寒いから、早く乗りなよ」
「おまえの車、これなんだ…」
「そーだよ～」
軽く言った比奈子の車は、赤のベンツであった。

車に乗り込むと、比奈子が言った。
「お父さんがさぁ、女の子なんだから赤い車に乗れって、買ってくれた」
「そ、そーなんだ…。ベンツ…なんだ…」
お父さんが買ってくれたといっても、金庫のお金は志乃のものだ。
豊は、前に「一千万以上はする」と慎太郎が言っていたＢＭＷは、志乃のものだと比奈子が言っていたのを思い出した。
「比奈子の家って、もしかして、結構金持ち…？」
「ん？　どーだか、ここの土地もお母さんの物で、月極の駐車場で

貸してる」
エンジンをかけ、車を走らせ、小鳩家の上下関係を話した。
家も土地も小鳩家全ての実権は、母・志乃が握っており、父・恒和の名義のものは、「無い！」
恒和に任せるほど頼りないものは無い、と、比奈子は笑った。

「そ…そう…、ある意味、お父さんって、しあわせだよね？」
「うん、そうだよね？　お父さんも自分でそれはわかってるみたいよ？　あはは」
「あのさぁ……、小鳩縫製って…ね、ね、年商どれくらい…あんの？」
恐る恐る訊いてみた。
「ん？　や～ね、なにお金の話？　ん～、三くらいかな～？」
比奈子は、運転しながら答えた。

「さ、三千万！？」
驚いた豊は、比奈子の顔を覗いた。
「ぁあ？　三千万じゃなくて、億。」
比奈子は普通に答えた。

「ふ～ん、億……おくぅぅぅぅぅう！？　三億ってーこと！？」
「なに、うるさいなぁ、大きな声で！
　でも、都内にあるお母さん名義のマンションの物件の収入とか入れたら、もっとかなぁ？」
お金に執着するわけでもなく、無頓着な比奈子は、自慢をすることもなく、普通に話した。
その後、車の中で、小鳩縫製の全容を聞かされた豊は、途中で意識を失った。

「はい、着いたよ、豊…。ちょっと、何寝てんのよ！」
前田クリーニング店の前に車を止め、意識が飛んでいる豊を見た比奈子が、一叩きすると、豊は目を開けた。
「…あ、ん、ありがとう…」

比奈子が運転席から、後部席に置いてある豊のピーコートを取ろうと体をよじらせると同時に、豊が比奈子に口付けをした。
唇を離し、二人は照れた顔で俯き、もう一度キスをしようと顔を近づけた時、フロントガラス越しに何かが光り、二人が顔をそちらに向けた。
ボンネットに片手を着き、携帯のカメラをこちらに向け、大口を開け笑って立っている浩司がいる。
彼女を送り、ちょうど戻ってきた浩司と遭遇した。

「……こ、浩司っ！　おまえっ！」
豊は慌てて、車から降りた。
「うほっほっ～！　ナイスアングル頂き～。おやじとおふくろに見せてくるぅ～」
浩司は、ギャハハと笑いながら走り、家の中に入って行った。

「あのやろう…、ったく」
呆れた口調の豊だが、顔はニヤケている。
比奈子も苦笑いするしかない。
「んじゃ、私、帰るね～」
運転席の窓を開け、比奈子が言うと、
「来年のクリスマス、というか、この先のクリスマスは、ずっと一緒に過ごそう…な！」
豊がはにかみながら、比奈子の頬をちょんちょんっと、突っついた。
比奈子は照れながらも、「うん！」と、うなずき笑った。

が、この先のクリスマスは約束通り、二人は一緒に過ごすことになるのだが、二人だけで、ということはなく、前田家・小鳩家、両家揃ってのクリスマス会がずっと続いたのであった……。

＊　大切な愛する人といられる幸せを感じているならば、お金なんてなくてもいい

……いや、やっぱり、お金はあっても…いい。……あったほうがいいかもしれない、かも。　＊

……だけど、比奈子は本当のしあわせは何かを、知っている。

（４５）聖なる…夜？２（完）（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。
一応、「完」なのですが、このあと番外編になります。
また続きも読んでいただけたら、うれしいです。

番外・晴れた日に（1）

豊と比奈子が恋人同士になり、前田家、志乃、友人、みな大喜びだった……、
たった一人を除いて。

「許さん…。男と付き合うなんてまだ早すぎる！　それになんだ、あの天パァ～は！」
「あら、かわいいじゃない、天パァ～。
　豊くん顔もかわいいし、比奈子との子供もきっとかわいいわよ～？　楽しみだわ」
「かぁあああっ！　あいつと比奈子の孫なんていらん！　比奈子の結婚相手はボクが見つける！」
「あなたが見つけるの待ってたら、比奈子、おばあちゃんになっちゃうわよ。
　って、その前に、あなたがお陀仏さんよね？　あははは～南無南無～っと」
志乃が、両手を合わせ、恒和を拝んだ。
「あのさぁ、私、妊娠してないし…」
比奈子は、二人の会話を呆れながら聞いていた。

二人が付き合い始めて、四ヵ月が経ち、五月の風が気持ちのよい日、豊が、五郎太と恵子を連れて、小鳩家に挨拶に来るという。
朝から、というか、この四ヶ月間、恒和は機嫌が悪い。
志乃は、仕事上お世話になっているということで、何度か五郎太と恵子とは会っているが、恒和は初めて会う。
今日も「天パァ～などには会いたくないので、競艇に行く」と、駄々をこねたが、昨日のレースでスッカラカンになってしまっていて、どこの袖を振ってもお金が無い。

比奈子に言っても貰えるはずもなく、大人しく家にいるが、ふてくされ、パジャマのまま部屋をうろついていた。

「あなた、いいかげんに着替えなさい！　みっともない！」
「このまま挨拶してやる！」
「いつもお世話になっているんだから、本当はこっちがご挨拶に行かなきゃならないのよ、
それを前田さんが、わざわざいらしてくださるんですから、ちゃんとしなさい！」
ワイシャツとズボンを持った志乃が、恒和を追いかけまわしている姿を見ながら、比奈子はソファの上で笑っていた。

「ねぇねぇ、なんか、しあわせだなぁ～私」
比奈子の言葉に、二人の動きが止まり、比奈子を見た。

「賛成してくれるお母さんがいて、反対してくれるお父さんがいる。
二人共、私のしあわせを考えていてくれるのが、すっごくよくわかる。
私、生まれてきてよかった。産んでくれた人に感謝してる。
あの人がいなければ、小鳩比奈子はいなかったし、私の一番大切な、お父さんとお母さん、
小鳩恒和と小鳩志乃にも出会えなかった。
私はずっと、これからもお父さんとお母さんの子供で、ずっと離れないで暮らしていく」
そう言った比奈子は、笑ってみせた。

「ひ、ひ、ひーなーこぉぉぉぉぉぉ」
恒和は、涙を流しながら、比奈子に抱きついた。
志乃も笑顔のまま、目頭を少し押えた。
比奈子は、号泣する恒和に照れながら、笑った。

「さっ、あなた、着替えましょうね？」
志乃は優しく言った。
「……やだ！」
そこは譲れない恒和・四十八歳。
「なんですってっ！？」
怒りが頂点に達した志乃・四十三歳。
その後、ど突きまわされた恒和は、少しヨレッとなったスーツを着て、精神的にもヨレッとなっていた。

番外・晴れた日に（2）

夕食を共にする予定の豊たちは、約束の7時に、小鳩家に到着した。
豊がチャイムを押すと、比奈子が玄関を開けた。
「いよっ！　おっちゃん、おばちゃん、天パァ～」
「パァ～じゃねーつてんだろーが！　パーだ！　違うっ！　天然パーマだ！」
二人の代わり映えしない会話も耳に入らないほど五郎太と恵子は、緊張で足がガクガクし、もつれそうになりながら、比奈子の後に付いて、二階に上がりリビングの前に来た。
「ひ、比奈ちゃん…、おばちゃん、緊張しちゃって…」
「大丈夫だってば！」
ド緊張のため、頭に血が回らず、貧血を起こしかけている恵子の手を握った比奈子を、豊は愛しく見つめた。

「お母さん？　豊たち来たよ？　あれ？」
恒和と志乃の姿がなかったが、「お母さん！？」と比奈子が声を張ると、畳部屋から志乃が出てきた。
「まぁまぁ、お忙しい中、ありがとうございます」
志乃と五郎太たちが丁寧に挨拶を交わしていると、ムスッとした顔で少し涙目の恒和が、畳部屋から、顔を出した。

「比奈子…、お父さん、おでこのところ腫れてない？」
豊が小声で訊いた。
「……う、うん。どうしたんだろう…ね？」
往生際の悪い恒和は、比奈子が玄関に行っているときに、自分の書斎に逃げ込もうとし、志乃に捕まり、デコピン5発を連続で受けていた。

恒和は五郎太たちを見て、一応、頭は軽く下げたが、ニコリともしない。
比奈子の父親は、交際を反対している、と聞かされていた五郎太と恵子だったが、自分達に会ってくれただけでも、ホッとした。

ひとまず、お互い、父・母・本人同士で向き合い、ソファに座った。
「残念ですが、このお話はなかったことに、」
いきなり恒和が言いだすと、隣の志乃が恒和の足を踏み潰し、背中の肉を抓った。
「っ……痛い…」

「小鳩さん…」
五郎太が、恒和を見て話出した。

「小鳩さんのお気持ちは、とてもよくわかります。私共には娘はおりませんが、
娘にしろ息子にしろ、自分達にとっては大切な子供という気持ちは同じです。
町の小さなクリーニング店の息子と、大切なお嬢さんとの付き合いを不安に思われるのは、
無理ないと思います。
豊は…、自分の息子を褒めるのは、親ばかと言われてしまうかもしれませんが、
豊は、親思いで良いヤツなんです。たぶん、コイツも自分の夢とかあったと思うんですけど、
次男坊なのに、店を継ぐって言ってくれて、店の仕事を一生懸命やってくれています。
うちは、あまり裕福とは言えませんが、豊も比奈子さんに対して本気でお付き合いさせて
いただいております。比奈子さんを大切にするという気持ちは誰

よりももっているんです。
　どうか、二人の仲を許してもらえないでしょうか」
「おやじ……」
五郎太が立ち上がり、恒和に頭を下げる姿を見て、恵子も立ち上がり、頭を下げた。

そんな二人を見て、豊が立ち上がり口を開いた。
「お父さん！　俺は真剣に比奈子さんとお付き合いさせてもらってます。
　金は無いかもしれないけど、比奈子さんをしあわせにする自信はあります」
恒和に頭を下げる三人に、志乃は、頭を上げ座るように言い、ムスッとした顔の恒和がチラリと志乃を見たら、ジロリと睨み返された。
「あなた、なにか言ったらどうですか？」
志乃の冷ややかな声が、恒和を急かす。

「……、豊くん、私が反対している理由は、君にお金が無いからではない。
　お金なんてものは、普通に暮らしていかれる分、あればいい」
と、言う恒和の言葉に比奈子と志乃は思った。
おまえが言うな！
おまえの普通の暮らしって、なんじゃい！？
金はどこからか湧いてくる…と思っている恒和に言われたくない。
そんな二人の心も知らず、恒和は続けた。

「比奈子は、志乃と私の大切な大切な娘だ。しあわせになることがなによりの願いだ。
　豊くん、君が比奈子の相手だから反対しているわけではない。
　比奈子が誰を連れて来ても……ボクは、反対だぁああ！」
「「はぁ？」」

比奈子と志乃は、思い切り顔を恒和に向け言った。
「お父さん、なにそれ！」
「あなたバカじゃないの！？」
呆れて、ものも言えなくなる。

「あなた！　ほんとうにいいかげんにしてください！　子供みたいに駄々ばかりこねてっ！！
あー、もぉ腹が立つーー！！」
「痛い！　や、やめろ、志乃！」
志乃が恒和を本気で叩き出し、周りは立ち上がり、止めに入った。
恒和は頭を擦りながら、志乃を見ると、ゼィゼィと息を切らしている。
志乃の本気の怒りを察した恒和は、きちんとソファに座り直した。
「わかってるよ…、ボク一人が反対しても、どうにもならないことぐらい。
ちょっとくらい駄々こねてもいいだろう…」
と、俯き、ボソボソと言った恒和は、ひとつふたつ咳払いをしたあと、顔を上げ、豊の方を向いた。

「天…、いや、豊くん。比奈子や志乃から聞いているとは思うが、比奈子は私たちとは血は繋がってはいないが…、本当は誰にも渡したくないくらい大切な娘だ。
しかし！　比奈子が豊くんが良いと言うなら、しかたがない…。とりあえず、認めよう」
と、言う恒和に志乃は
「ほんとうに認めてくれるんですね？　あなた？」
と、念を押した。
「あー、そうだよ！　認める！　認めてやる！」
恒和が言うと、
「ありがとうございます」と、五郎太、恵子、豊は、深く頭を下げ、

礼を言った。

「まだプロポーズもしていないようだし、先のことはまだ、わからんし、」

半ば、やけくそに言う恒和の目の前に、比奈子は手を伸ばした。

「あっ、お父さん、私プロポーズされてんだわ。ほれっ！」

と、比奈子は指に光る指輪を見せた。

「ァア！？　お父さんは一言もそんなこと聞いてないぞ！　比奈子！

今日は交際を許してもらうためにここに来たんじゃ、」

驚く恒和を遮るように、

「あなた、ただの交際を認めてもらうだけで、お父様とお母様と三人で、

わざわざ来ていただくわけないじゃない？　今日は、二人の結婚の話でしょう？

もぉ、にぶいわね～、まったく。

とにかく、お父さんも認めてくれたし、さっ、お食事にしましょうか。

みなさんもダイニングの方に、どうぞ」」

と、志乃はにこやかな顔で言い、豊たちをダイニングに誘導した。

「ぁぁああ！？　……」

口をパクパクさせる恒和をソファに残し、ダイニングに向かった。

「お父さん？　何してんの～？　ご飯食べよう～」

と、比奈子は恒和の腕を持ち、ソファから立ち上がらせた。

「お父さん、ありがとう…」

比奈子が小さい声で、笑顔のまま言うと、恒和は、

「くっ……うっ……」と、腕で目をゴシゴシっと拭いた。

番外・晴れた日に（3）

ダイニングに移動した五郎太と恵子は、テーブルの上の料理に目を見開いた。
食卓が茶色の世界じゃない…
二人共、心の中でつぶやいた。
豊が初めて小鳩家で食事をしたときと、同じ感想だ。

食事を始め、お酒が入り、恒和のテンションが上がってくると、志乃が比奈子に言った。
「比奈子、ビデオカメラ、セット！」
「はい！　お母さん！」
比奈子がビデオカメラを固定しはじめ、レンズは恒和を捕らえている。
前田家三人は、不思議に思ったが、
「あ、思い出のために…」
と、志乃が軽く微笑むと、三人は納得した。

「お父さん、もっとお酒飲みなよ～」
「そうよね？　あなた、どうぞ」
志乃が恒和に、じゃんじゃんお酒を勧めた。

「あなた、見て見て。比奈子、豊くんといると楽しそうね？」
志乃が恒和の耳元で囁いた。
チラリと二人を見た恒和は、比奈子のうれしそうな顔にニンマリとし、
「前田さん！　で、二人の式はぁ～、いつ頃がいいんでしょうかねぇ～」
と、酒で赤らめた顔で訊いた。

「えっ！？　式…ですか？」
先ほどまでの態度の恒和と違うことに戸惑いながらも、五郎太は、
「本人たちの希望もあるでしょうが、秋なんてーのは…。なぁ」
と、恵子にも同意を求めるように言った。
「秋ですかぁ、いいですね～。うんうん、時期的にも季節的にもちょうどいい！　はっははは～」
恒和は上機嫌に笑った。
なんやかんやで話がどんどん進み、ひとまず秋を目標に結婚準備を始めることに、両家一致で決まった。

途中で恒和は酔いつぶれ、前田家の見送りもせず寝てしまった。
三人が帰ったあと、比奈子と志乃は、赤い顔でイビキをかき、眠る恒和の顔を見ていた。

「なんか、お父さんにちゃんとプロポーズされたことも言わないで、豊の両親に会わせちゃって、
　悪いことしちゃったね…」
比奈子は、少し反省しながら言った。
「しょうがないわよ。こうでもしなきゃ、この人、本気で比奈子のお婿さんは自分で
　見つけるつもりなんだもの。そんなの待ってたら、比奈子、一生お嫁になんて行けないわよ？」
クスクスと志乃は笑った。
「うん……。お父さん、ほんとにありがとう。お母さんも、ありがとう」
「しあわせになるのよ、比奈子」
「うん、しあわせになる」
恒和の頭の上で、母と子は、しあわせな会話をした。

翌朝、朝食中の小鳩家ダイニングルームで恒和の声が響きわたった。
「聞いてない！　ボクは聞いてないぞー！　秋に、けつこんしきぃ！？」
酔いつぶれ、夕べのことなど何も記憶がない恒和は、憤慨した。
「ずるいぞ！　ボクの知らないところで勝手に決めてっ！」
最初に式の話を持ち出したのは恒和だ、という志乃と比奈子に、「違う」と言い張った。

「あぁ、もう面倒臭いわね、あなたは！　撮っておいてよかったわ…」
と志乃は、夕べの食事風景を撮ったビデオをテレビにセットした。
「ほらほら、見てごらんなさい。口火を切ったのは、この小鳩恒和さん！」
と、大きなテレビ画面に映る恒和を指さした。

『前田さん！　で、二人の式はぁ～、いつ頃がいいんでしょうかねぇ～』
そう陽気に言う自分が画面に現れると、
「えっ！？」と、顔色を変えた。
「これ、あなたでしょう？」
志乃が、ビデオを撒き戻し、もう一度見せた。

『前田さん！　で、二人の式はぁ～、いつ頃がいいんでしょうかねぇ～』
確かに恒和本人が言っている。
お酒を得意としない恒和は、アルコールが入ると気分が愉快になる。
それを知っている志乃は、恒和が先頭を切って、式の話を持ち出すように誘導し、証拠としてカメラを回していた。

「もう一度確認しますか？　小鳩恒和さん？」

志乃の言葉に、
「もう…いい…」
と、テーブルの上に顔を伏せた。

そんな姿に比奈子と志乃は、顔を見合わせクスクスと笑い、
「お父さん！　はい、これ。今日のお駄賃〜」
と、比奈子は、伏せる恒和の横に、数枚のお札を置いた。

顔を上げ、チラリとお札を見た恒和は、少しばかり顔をほころばし、
「えっ、いいのぉ〜？」
と、素直に受け取った。

番外・小窪ちゃんの恋はデンジャラス（1）

オレは…小窪ちゃんと呼ばれている…
無口だ…
人と話すのが、苦手だけど…八百屋だ…
親父に「客商売なのに、おまえは愛想がない」そう嘆かれるけど、
お客さんは沢山来てくれる…
なぜか隣町からきてくれる人もいる…
時々、豊や慎太郎には「俺たちに流し目をしてどーすんだ？」と言われる。
流し目の意味が、オレにはわからない…
わからない…
わからないまま、今日も店先に立っていた。

「小窪ちゃ～ん、今日も無口で頑張ってる？」
酒屋の慎太郎だ。
いつもコイツは、夕方の忙しい時にやって来ては、女性客に愛想を振りまき、自分の配達の仕事をほったらかし、うちの店を手伝っていく。
目的は、うちに来る若い女性客とのコミュニケーション…らしい。
どうしてか、うちは普通の八百屋なのに、主婦ではない若い女性客も多い。
慎太郎は愛想がいいので、オレとしては、助かっている。
ただ、時々、美人なお客さん限定に、勝手にグレープフルーツのおまけをつけてしまう。
グレープフルーツは、結構な値段だ…、困る。
「小窪ちゃん～、こっちのお客さん、じゃがいもとネギだって～」

慎太郎に言われ、じゃがいもとネギを袋に入れていた……

あっ、今日も来た…

「小窪青果店」の向かいにある「和菓子のくらもと」に、一人の女性が入っていく。

最近よく見かける女性。

商店街は、飲み屋やコンビニなどの店を除いて、夜八時に閉まる。

彼女は、平日七時過ぎに来て、土日は、夕方に来ることが多い。

今日は土曜日だから、この時間なのか…

オレは、彼女が気になっている。

「和菓子の君」だ！

そんな彼女を目で追う。

「小窪ちゃん！　じゃがいもとネギ！！　何やってんだよ！」

慎太郎が、ボーっとしていたオレの手から、袋を取り上げた。

「やだ、慎ちゃん。そんな怒鳴ったら小窪ちゃんが可哀相でしょ！！」

「そうよ、そうよ。小窪ちゃん、大人しい子なんだから。あんたと違うんだからね」

近所に住むおばちゃん客が、慎太郎を責める。

「んだっ！　おばちゃんたちー、俺が悪いのかよ！　今日は二割増しにすっぞー」

「やだわ、慎ちゃん、あんた悪徳商法だわよ、そんなの！」

慎太郎とおばちゃんたちが、楽しく語りあっていると、

あっ、出てきた…彼女、笑顔だぁ。

「和菓子の君」が、いつものように「くらもと」の袋を提げて出てくると、そのまま来た道を戻る。

うちの八百屋に立ち寄ったことは、いまのところ一度もない。

そしてオレは、いつものように、彼女の後ろ姿を目で追った。

番外・小窪ちゃんの恋はデンジャラス（2）

「オレ…さぁ」
「「「「何何？　小窪ちゃん！」」」」

居酒屋・お春で、さと兄、豊、慎太郎、花ちゃんと飲んでいた。
オレが、口を開くと、四人全員がオレの前に顔を突き出し、オレの次の言葉を待っている。
これもいつものことなんだ…
オレが、「オレさぁ…」と言っただけで、みんなは興味深げな顔でオレを見る。

「どうしたんだ？　小窪ちゃん？　何を話したいんだ？」
そう言った左側に座っているさと兄を、チロッと見た。
「だから、その流し目でオレを見るな…。心が…揺れる…」
さと兄に言われたが、意味がわからない。

「で、何なんだ？　小窪ちゃん？」
秋に結婚を向える予定の豊が、オレの目の前で、目をパチパチさせた。

「うん…、オレ…、気になる人が…」
そこまで言うと、
「「「「ぇぇぇぇぇぇ！？」」」」
四人が一斉にオレから離れ、
「「「「えぇぇぇぇぇ！？」」」」
と、また近づいてきた。

「誰！？」

「どこの子！？」
「近所の子か！？」
「僕たちの知ってる人！？」
矢継ぎ早に訊かれた。

「誰…だかわかんない。どこの子…かもわかんない。近所…なのかもわかんない。
　みんな…も…たぶん、わからない人だと…思う」
俯いたまま、ポツポツ言うと、肩に力が入っていたみんなが、深い溜息と共にダラリとなった。

「誰だかわかんない子を、好きになったのか？」
「…うん」
豊に訊かれ、うなずいた。
「どこで見たんだよ、その子」
慎太郎に訊かれ、オレは、「和菓子の君」のことを、みんなに話した。

「ん～、じゃ、名前はおろか、話したこともなく、ただ見てるだけなんだ…？」
「それも、『和菓子屋くらもと』に入って出てくるときだけ…？」
「今度はいつ来そうなの？　その女性」
「毎日、来てるわけじゃないんだろ？」
オレは、
「うん…」
と、だけ答えた。

「ねぇねぇ、どんな人なの？　その人」
花ちゃんに訊かれた。
「…色白」

「「「「へぇ〜」」」」
「か、かわいい…」
「「「「ぉお〜」」」」
「いつも、スーツ着てる」
「「「「ほぉ〜」」」」
「包容力…？　が、ありそう」
「「「「ふぅ〜ん」」」」
「たぶん…、オレより、ちょっと…年上、だと思う…」
「「「「年上の女か！！」」」」

色白でかわいくて、いつもスーツを身につけている包みこんでくれるような年上の女性…
四人の想像は、膨らむ。
「キャリアウーマンかぁ」
「でも、年上っぽいんだろ？　結婚とかしてんじゃないの？」
豊が言った。

えっ？　結婚？
オレは、考えもつかないでいた。
彼女が既婚者？　かもしれない。
オレが肩を落すと、「よけいなことを言うな」と、豊がさと兄に頭を叩かれていた。

「困ったなぁ」と、言いながらも、四人は「どうしたらいいのか」と、相談し始め、オレは、ただ聞いているだけだった。
「とりあえず、今度、くらもとに来たときに、声をかける」

「なんて？」
「……くらもとの団子、うまいですか？　オレも好きです！　団子も君も！」
「んなこと、できるわけねーだろ、小窪ちゃんが！」
「だよな、できてたら、今頃こんなとこで悩んでねーって」

結局、良い案も浮かばず、五人で俯き、家路に着いた。

誰か何か悩みがあると、五人が一緒に悩むんだけど、何の対策もないまま解散になる。
いつものことだ。

番外・小窪ちゃんの恋はデンジャラス（3）

それは、突然やってきた。

晴れた土曜日の午後二時過ぎ、オレがお客さんにおつりを渡していると、「和菓子の君」が「くらもと」に入って行くのが見えた。
今日は、女友達らしい人と二人だった。
オレは、彼女が店から出てくるのを、自分の店先で待っていた。

笑顔の彼女が「くらもと」から出てくると、オレの方に向かって歩いてきた。
えっ、こっち…くる。
ど、ど、どーしよー！
顔に表情が出ないオレは、傍から見ると、普通の表情だ。

「すみませ～ん」と、友達らしい子が、オレに言った。
「…はい」
声は小さいが、オレは返事をした。

「えーっと、トマトとニンジンとしいたけと――――――」
友達らしい子が、野菜の名前を並べていたが、オレの目線は「和菓子の君」に向いている。
彼女は、スイカに目をやり、ポンポンと叩いて音を確認していた。

「あの～？　聞いてます？」
友達らしい子に言われ、
「あっ、すみません、何でしたっけ？」
と、小さい声のオレは、横目で友達らしい子を見ると、その子は、急に顔を赤らめた。

「いぇ、あのぉ、トマトとぉ、ニンジンとぉ、――――――」
その子は、もう一度言い、オレは、言われたものを揃えた。
「ねぇねぇ、デンジャラスちゃん、他に必要なものないよね？　くだもの買ってく？」
その子が、スイカをみていた彼女に声をかけた。

デンジャラス…ちゃん？
外人？
なわけないよね…
彼女は、どこからどうみても日本人だ。

「うーん、スイカ買って行こうか～。みんなも好きでしょ？　スイカ！」
デンジャラスちゃんと呼ばれた「和菓子の君」が言った。
「お、お、おまおまおまけ！　します！　ス、ス、スイカッ！！」
オレは、たぶん、生まれてこの方出したことのないほどの大きな声で、彼女に向かって言った。
が、音量的には、普通の人の普通の音量だ。

オレにそう言われたデンジャラスちゃんは、
「スイカ、おまけなの！？」
と、驚くように訊き、オレがうなずくと、デンジャラスちゃんは、うれしそうに笑ってくれた。
揃えておいた野菜をビニール袋に入れ、おまけのスイカも別の袋に入れると、
「……これ、本当に貰っていいんですかぁ？」
と、デンジャラスちゃんが、心配そうな顔をした。
「おまけですから…」
「でも…これは、」
「いいんです！　おまけです！　から！」

オレは、無理やりスイカを渡し、野菜の料金だけを受け取った。

デンジャラスちゃんは、オレに、二度ほど、スイカのお礼を言い、友達らしい人と帰って行った。

オレは、デンジャラスちゃんが、商店街の人ごみに紛れて見えなくなるまで、姿を追い、考えた。

「デンジャラス」「デンジャー」「ｄａｎｇｅｒ」……危険な…？

なにが？

ボーっとしていたら、奥から出てきた親父に声をかけられた。

「おおっ！　今朝仕入れた特大スイカ、売れたか！　四千二百円！」

うれしそうに言われた。

「デンジャラスちゃん、こんな大きいの貰っちゃってどうすんのよ！

女四人じゃ食べきれないわよ！」

友達らしい人に言われたデンジャラスちゃんは、困っていた。

そしてオレはその日、こっそり、自分の財布から四千二百円を、売り上げ金の中に忍ばせた。

番外・小窪ちゃんの恋はデンジャラス（4）

そして、デンジャラスちゃんは、相変わらず会社帰りに「くらもと」にやってくる。
いつも店先に立っているオレと目が合うと、お辞儀をしてくれるようになった。
でも買い物は、していってはくれない…。

豊たちと飲んだとき、その話をすると、事の成り行きの進展に喜んでくれた。
「僕、その人、見て見たい！」
花ちゃんが言いだすと、三人も興味を示してしまい、いつ来るかわからないが、平日の七時にみんなが「小窪青果店」に集まることになった。

その日、みんなは、自分たちの店の仕事を早めに切り上げ、オレの店の奥で待機した。
「まだ来てない！？　まだ来てない！？」
駆け込んできたのは、一人だけサラリーマンをしている花ちゃんだ。
一生懸命、駅から走ってきたらしい。
親父に水を貰っている。

「どうしたんだ？　おまえら、次から次へ」
いつもは豊の家か、さと兄の家に集まるみんなが、今日は小窪青果店に来ている。
親父は不思議がった。

七時を過ぎてもデンジャラスちゃんは、来ない。
七時半近くになっても来ない。

店の奥では、
「今日は来ないんじゃないの？」
と、慎太郎が言い、
「店閉めたら、飲みにでも行くかー」と、
さと兄が言ったその時、息を切らしながら彼女が走ってきた。
そして、「くらもと」に入った。

「き、きた…」
と、店の奥に行き、ボソッと、みんなに報告すると、全員が店先に並び、「くらもと」から彼女が出てくるのを待った。

「くらもと」の自動ドアが開き、デンジャラスちゃんが、袋を提げて出てくると、みんなは何の反応も示さない代わりに、デンジャラスちゃんが、小窪青果店前に並んでいる五人の男に怪訝な目を向け、首を捻ったが、オレと目が合い、微笑んだ。

「出てこないじゃん？」
「違う人が出てきたよ…」
「まだ買ってんじゃない？」
「…っていうか、店の中、客いねーじゃねーかよ！」

「あの人…」
オレは、背を向け歩いていくデンジャラスちゃんを指さした。

「「「「…っぇぇぇぇぇ」」」」

みんなは、店先から道路に出て、デンジャラスちゃんを見つめ、言った。
「うそ…」
「確かに、色白っぽい…」

「スーツだよ…」
「年上かどうかわからないけど、包容力はありそうだ。うん！」
「デンジャラスちゃん…」
つぶやたオレを、みんなが見た。
「小窪ちゃん、あの人が好きなんだな？」
「うん…」
「久々というか、ほとんど初めて、本気で人を好きになったんだよね？」
「うん…」
「小窪ちゃんの…恋…か？」
「うん…」
「小窪ちゃんの胸は、どきどきするんだな？　あの人を見てると」
「うん…」
オレはデンジャラスちゃんを見ながら、みんなの問いに答えていた。
「よし！　行って来い！」
さと兄が、オレの手の中に、店のグレープフルーツをのせた。
「え？」
「追いかけて、これ渡して告って来い！」
「ええ！？」
「見てるだけじゃぁ、しょうがないだろ？　話かけないと、先には進めない。
　フラれてもいいから、行って告白して来い！」
そう言って、さと兄は、オレの背中を押した。

みんなの「がんばれ」の声を背中に受けて、オレは走り出した。
一度振り返ると、四人が並んで、ガッツポーズをして、オレに見せてくれた。

「くらもと」の袋をぶら下げたデンジャラスちゃんに追いつき、オレは声をかけた。
「デ、デンジャラス…さん…」

振り向いた彼女に、グレープフルーツを差し出し、言った。
「オレと…つきあってください…」
「はい？　なんですかぁ？」
声が小さすぎて聞こえなかったらしい…耳に手をやり、聞き返された。
もう一度、大きな声で言った。

「オレと付き合ってください！！！」

遠くの方から、オレを見ていた四人は、
「あっ、グレープフルーツ渡した」
「おっ、受け取ってくれた」
「……あれ？　どこ行くんだ？　あの二人」
「僕たちから、どんどん離れていくよ？」

「「「「まっ、いっか～」」」」
と、小窪青果店に入って行った。

デンジャラスちゃん…
本名、西山佳代。
オレより、少しだけ年上。
芸能プロダクション、「吉田プロ」というところで勤続八年のＯＬ。
甘いもの大好き、「くらもと」の「おはぎ命」
デンジャラスの由来、体重八十八キログラム。末広がりな数字がステキだ。
メタボ体型が危険なため、本人に意識を持たせるため会社の人に付けられた愛称。
今だ本人は気にしていない。オレも全然気にしない。

オレが告白をしてグレープフルーツを差し出すと、彼女は、笑って受け取ってくれた。
そして、そのまま二人で駅の近くのファミレスに行き、デンジャラスちゃんは「メロンパフェ」と「チョコレートパフェ」を食べ、オレは、デンジャラスちゃんを見つめながら、緊張した喉を「愛すコーヒー」違う違う…「アイスコーヒー」だ、「アイスコーヒー」で……潤した。

番外・小窪ちゃんの恋はデンジャラス（4）（後書き）

番外編、以上で終わりです。
「お茶の間劇場」を目指そうと思ったのですが、
ただ単に本編の文章の中に「茶の間」が出てきただけで終わってしまいました。
が、最後まで読んでいただき、ほんとうにありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0083k/

アイ　ラブ　ナチュラリーカーリーヘアー

2010年10月9日07時55分発行